和久遺跡

- 第10次発掘調査報告書 -

ツカザキ病院北館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査

2020

姫路市教育委員会



遺跡遠景(南西から)



調査区遠景(北から)



調査区全景(北東から)



調査区空中写真(上が北)



SI2イチマル土坑検出状況(北西から)



SD2土器検出状況(北西から)

兵庫県姫路市の南西部に位置する和久遺跡は、平成12年から13年にかけて行った発掘調査(第1次調査)で弥生時代後半から古墳時代初めにかけての100棟あまりの竪穴建物跡が見つかり、同時期の集落遺跡として注目を浴びました。また平成23年に行った発掘調査(第8・9次調査)では20棟ほどの竪穴建物跡をはじめ、ムラの縁辺部を流れていた川跡なども発見され、今では姫路市を代表する遺跡の一つとなっています。

本書は、平成29年9月から平成30年4月にかけて実施した第10次発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、20棟ほどの竪穴建物跡、ムラの縁辺部に掘られた溝跡、古墳時代初めに設置された柵跡などが見つかり、多数の土器も出土しました。これらは、地域の歴史をより豊かなものにするとともに、学問的にも大変意義のあるものであると考えております。

最後に発掘調査の実施及び本書の作成にあたり、多大なご協力を賜りました社会医療法人三栄会ツカザキ病院をはじめ、関係各位に心から御礼申し上げます。

令和2年(2020年)3月31日 姫路市教育委員会 教育長 松田 克彦

例言

- 1 本書は姫路市網干区和久に所在する和久遺跡(県遺跡番号020338)第10次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、社会医療法人三栄会ツカザキ病院北館の建設に先立って実施した。現地での発掘調査は、 姫路市埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 発掘調査と報告書作成の費用は、社会医療法人三栄会ツカザキ病院の負担による。
- 4 発掘調査は平成29年9月20日から平成30年4月27日にかけて実施した。調査面積は1270㎡である。
- 5 本書の執筆及び編集は姫路市埋蔵文化財センターが行った。
- 6 出土した土器の接合・復元・実測は、株式会社島田組に委託した。図版作成は一部を除いて、国際文化 財株式会社に委託した。遺構写真図版の作成は、株式会社クレアチオに委託した。
- 7 遺構写真及び遺物写真の撮影は、姫路市埋蔵文化財センターが行った。
- 8 本報告にかかわる調査の記録、出土遺物などは姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 発掘調査·報告書作成に際して、下記の方々にご援助、ご教示を頂きました。記して感謝申し上げます。 (敬称略) 社会医療法人三栄会ツカザキ病院 青木哲哉

凡例

- 1 発掘調査で行った測量は、世界測地系(測地成果2000)に準拠する平面図直角座標系第V系を基準とし、 数値はm単位で表示している。
- 2 本書で用いる標高は東京湾平均海面 (T.P.) を基準とし、使用する方位は世界測地系の座標北である。
- 3 本書で使用した地形図は、国土地理院発行の20万分の1地勢図(姫路市)、2万5千分の1地形図(網干)、 及び姫路市基本地形図を使用した。
- 4 遺構の略称は、以下のように呼称している。
 - SI:竪穴建物跡、SB:掘立柱建物跡、SA:柵、SK:土坑、SP:柱穴・ピット、SD:溝
 - ※第4章第2節・同第3節中の竪穴建物跡SH14・39については第1次調査の成果による。本書で報告する第10次調査の成果との混同を避けるために、遺構名については当時のものを使用している。
- 5 遺構・土層等の呼称は、調査時に付したものを基本とするが、整理に際して変更したものもある。
- 6 土色と土器の色調は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
- 7 土器の図化に関しては、小片の場合でも復元的に図化したものを掲載している。その際、文様などについては、残存部位のみの図化にとどめているものもある。また、拓本を用いた破片の実測図は、右から外面の拓本、断面図の順に配列している。
- 8 遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、まとめている。観察表の表記基準は以下のとおりである。
 - ①法量は、残存率が1/4未満の部位に関しては、()を付けて復元した数値を示している。
 - ②色調を併記している場合は、外面、内面の順で表示した。
 - ③SI15出土遺物のうち、138・139・141~151と挿図 4~12については第 1 次調査の整理作業の成果を使用した。図面や観察所見については当時のものを掲載している。
- 9 遺物番号は基本的に通し番号とする。
- 10 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
- 11 第4章の自然科学的分析については、下記のとおり執筆いただき掲載した。
 - 第1節「和久遺跡10次調査区の地形環境」(青木哲哉氏)、第2節-1「和久遺跡出土種実同定」(パリノ・サーヴェイ株式会社)、第3節「和久遺跡出土遺物年代測定および樹種鑑定」(パリノ・サーヴェイ株式会社)

本文目次

序 例言 凡例

第	章	f i	調査に至る経緯と経過	1
第	£ 1 :	節	調査に至る経緯	1
第	5 2 (節	本発掘調査 (第10次調査)	1
第	£3′.	節	整理作業	1
第 2	2 章	5 ;	遺跡の概要	2
第	£ 1 .	節	地理的環境	2
第	§ 2 (節	歴史的環境	2
第	5 3 ′.	節	既往の調査	2
第3	3 章		調査の成果	6
第	51.		基本層序	6
第	£ 2 .	節	弥生時代・古墳時代の遺構と遺物	6
第	£3′.	節	中世の遺構と遺物	16
第4	1 章	Ī	自然科学的分析	18
第	£ 1 .	節	和久遺跡第10次調査区の地形環境	18
第	£ 2 (節-	1 和久遺跡出土種実同定	24
第	5 2 (節-	2 和久遺跡第1次調査SH39-1について	28
第	33	節	和久遺跡出土遺物年代測定および樹種鑑定	32
第	§ 4 ′.	節	和久遺跡第1次調査SH14-3出土礎板について	39
第 5	章	ま	とめ	46
第	£ 1 .	節	竪穴建物跡の変遷	46
第	§ 2 (節	SD2について	46
第	33	節	中世以降の遺構について	47
第	§ 4 .	節	おわりに	47

土器観察表

図版

写真図版

巻頭図版目次

巻頭図版 1 遺跡遠景(南西から) 巻頭図版 2 調査区遠景(北から) 巻頭図版 3 調査区全景(北東から) 巻頭図版 4 調査区空中写真(上が北) 巻頭図版 5 SI2イチマル土坑検出状況(北西から) SD2土器検出状況(北西から)

插図目次

挿図1	調査区周辺の地形分類図
	(S=1:35,000)19
挿図2	調査地付近における微地形の分布
	(S=1:3,000) ······20
挿図3	遺構検出面からのトレンチ断面図
	(S=1:20, S=1:100) ······21
挿図4	1次調査 SH39-1平面図・断面図
	(S=1:60)30
挿図5	1 次調査 SH39-2 · 3 平面図
	(S=1 : 80)
挿図6	1次調查 SH39-1出土遺物
	(S=1 : 4)
挿図7	1 次調査 SH39-3 出土遺物
	(S=1 : 4)
挿図8	暦年較正結果34
挿図9	1次調查SH14-3出土礎板
	(S=1 : 6)
挿図10	1 次調査SH14-1・14-3 平面図・断面図
	(S=1 : 80) - 44
挿図11	1次調查SH14-3出土土器
	(S=1 : 4)
挿図12	1次調查SH14-1出土土器
	(S=1 : 4)

表目次

表 1	土壌試料洗い出し・炭	比種実同定結果… 25
表 2	放射性炭素年代測定及	び暦年較正結果33
表 3	炭化米試料の計測値	35

写真目次

写真1	炭化種実27
写真 2	SH39-1 全景(北から) ······29
写真3	炭化米出土状況 29
写真4	年代測定試料 (1)36
写真 5	年代測定試料 (2)37
写真 6	炭化材
写真7	1 次調査SH14-3 出土礎板43

図版目次

図版 1	和久遺跡の位置(S=1:200,000)
図版 2	関連する周辺の遺跡 (S=1:25,000)
図版 3	和久遺跡における既往の調査
	(S=1 : 3,000)
図版 4	遺構全体図(S=1:250)
図版 5	1次・9次・10次調査平面合成図
	(S=1 : 400)
図版 6	調査区西壁土層断面図(S=1:40)
図版7-	1 SK1平面図・断面図 (S=1:60)
図版7-	2 SK2平面図・断面図 (S=1:30)
図版 7 -	3 SI1平面図・断面図 (S=1:60)
図版 8	SI2平面図・断面図 (S=1:40)
図版 9 -	1 SI2 炭化材検出状況 平面図
	(S=1:50)
回陪 0 −	2 CI2 亚帝回,將帝回(C-1:40)

図版 9-2 SI 3 平面図・断面図 (S=1:40) 図版 10-1 SK 3 平面図・断面図 (S=1:50) 図版 10-2 SK 4 平面図・断面図 (S=1:60)

図版10-3 SK5平面図・断面図 (S=1:30)

```
図版10-4 SK6平面図・断面図 (S=1:25)
                                  図版24-4 SI1出土土器 (S=1:4)
図版11-1 SI4平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版25-1 SI1出土石器 (S=1:2)
図版11-2 SI5平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版25-2 SI2出土土器 (S=1:4)、
図版12-1 SI5·SI5下部構造平面図·断面図
                                         石器 (S=1:2)
      (S=1:50)
                                  図版25-3 SI3出土土器 (S=1:4)
図版12-2 SI6平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版25-4 SK3出土土器 (S=1:4)
図版13-1 SI7平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版25-5 SK4出土土器① (S=1:4)
図版13-2 SI8床面平面図 (S=1:60)
                                  図版26-1 SK4出土土器② (S=1:4)、
図版13-3 SI8下層平面図 (S=1:60)
                                         石器 (S=1:2)
図版14-1 SI9平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版26-2 SK5出土土器① (S=1:4)
図版14-2 SK87上層平面図 (S=1:25)
                                  図版26-3 SK5出土土器② (S=1:4)
図版14-3 SK87下層平面図 (S=1:25)
                                  図版26-4 SK6出土土器 (S=1:4)
図版14-4 SI9下層平面図 (S=1:50)
                                  図版27-1 SI4出土土器 (S=1:4)
図版14-5 SD1断面図 (S=1:20)
                                  図版27-2 SI5出土土器 (S=1:4)
図版15-1 SI10平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版27-3 SI6出土土器 (S=1:4)
図版15-2 SI11平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版28-1 SI7出土土器 (S=1:4)
図版16-1 SI12平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版28-2 SI9出土土器 (S=1:4)
図版16-2 SI13平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版28-3 SI10出土土器 (S=1:4)
図版17-1 SI14平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版29-1 SI11出土土器 (S=1:4)
図版17-2 SI15平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版29-2 SI12出土土器 (S=1:4)
図版18-1 SI16平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版29-3 SI13出土土器 (S=1:4)
図版18-2 SI17平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版29-4 SI15出土土器 (S=1:4)
図版18-3 SK7平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版30-1 SI16出土土器 (S=1:4)
図版18-4 SP102断面図 (S=1:20)
                                  図版30-2 SK7出土土器 (S=1:4)
図版18-5 SK8平面図・断面図 (S=1:25)
                                  図版30-3 SK8出土土器 (S=1:4)
図版18-6 SK19平面図・断面図 (S=1:60)
                                  図版30-4 SD1出土土器 (S=1:4)
図版18-7 SI18平面図・断面図 (S=1:50)
                                  図版30-5 SD2上層出土土器① (S=1:4)
図版19 SD2 · 3 平面図 (S=1:150)、
                                  図版31-1 SD2上層出土土器② (S=1:4)
     断面図 (S=1:50)
                                  図版31-2 SD2中層出土土器① (S=1:4)
図版20 SD4平面図・断面図 (S=1:40)
                                  図版32 SD2中層出土土器② (S=1:4)
図版21 中世遺構全体図 (S=1:250)
                                  図版33 SD2中層出土土器③
図版22 SB1·2·SA1平面図·断面図
                                       (S=1:4)、石器 (S=1:4)
     (S = 1 : 80)
                                  図版34 SD2下層出土土器①
                                       (S=1:4)、石器 (S=1:4)
図版23-1 SB3平面図・断面図 (S=1:80)
                                  図版35-1 SD2下層 出土土器② (S=1:4)
図版23-2 SB4平面図・断面図 (S=1:80)
図版24-1 SK1出土土器 (S=1:4)
                                  図版35-2 SD4 出土土器 (S=1:4)
図版24-2 SK2出土土器① (S=1:4)
                                  図版35-3 その他の遺構 (S=1:4)
図版24-3 SK2出土土器② (S=1:4)
```

写真図版目次

写真図版1 調査区南西部全景(北から)

写真図版 2 SD 2 土器検出状況 (北から)

SD2土器検出状況詳細(北西から)

SD2 手焙形土器検出状況(南から)

SD2 断面状況(北から)

SD2 土器検出状況(北西から)

調査区南西部東壁断面状況(北西から)

写真図版3 調査区全景(北東から)

写真図版 4 SI1 炭化材検出状況(南西から)

SI1全景(北西から)

写真図版 5 SI1 完掘状況 (南東から)

SI1イチマル土坑検出状況(南東から)

SI1 炭化材断面状況(南から)

SI1 炭化材断面状況(南から)

SK93検出状況(東から)

写真図版 6 SI 2 炭化材検出状況(北西から)

SI2全景(北西から)

写真図版7 SI2イチマル土坑検出状況(北から)

SI2イチマル土坑検出状況(北東から)

SI2イチマル土坑検出状況(北から)

SI2イチマル土坑イチ土坑断面状況(西から)

SI2イチマル土坑マル土坑断面状況(東から)

SI3全景(北東から)

写真図版 8 SI4 全景(北西から)

SI4ベッド状遺構断面状況(東から)

SI4内SK103検出状況(南東から)

SI4 土器検出状況(北東から)

SI4 完掘状況 (北から)

写真図版 9 SI5 全景 (南から)

SI5下部構造全景(北から)

写真図版10 SI5 石材 1 検出状況 (東から)

SI5石材2検出状況(西から)

SI5内SK98検出状況(東から)

SI5内SK98断面状況(南東から)

SI6全景(東から)

写真図版11 SI7全景(北から)

SI7イチマル土坑検出状況(北から)

写真図版12 SI8全景(北から)

SI9全景(北から)

写真図版13 SI10全景(北から)

SI10内SK62検出状況(北から)

写真図版14 SI10内SP109断面状況(北から)

SI10内SP109柱痕検出状況(北から)

SI10内SP63断面状況(南から)

SI10内SK431断面状況(北から)

SI10内SK431土器検出状況(北東から)

SI10内SK431完掘状況(北から)

写真図版15 SI11全景(北西から)

SI12全景(南東から)

SI12内中央燃焼土坑検出状況(西から)

写真図版16 SI13全景(北東から)

SI14全景(北東から)

SI13内中央燃焼土坑検出状況(北から)

SI13内中央燃焼土坑検出状況(北から)

SI13内中央燃焼土坑土手検出状況(北から)

SI13内中央燃焼土坑土手部断面状況 (東から)

写真図版17 SI15全景(北から)

SI16全景(北西から)

写真図版18 SI17全景(南東から)

写真図版19 SI17完掘状況(南東から)

写真図版20 SD2検出状況(南から)

SD1・2切り合い状況(南西から)

SD2土器検出状況(北西から)

SD2 土器検出状況 (西から)

SD2土器検出状況(北東から)

SD2粘土塊検出状況(北東から)

写真図版21 SD2土器検出状況(北から)

SD2土器検出状況(西から)

SD2土器検出状況(北西から)

SD2 炭集積部検出状況(北から)

SD2 炭集積部検出状況(北西から)

SD2断面状況(北から)

写真図版22 SD2 完掘状況 (南から)

写真図版23 SD1 断面状況 (西から)

	SD1断面状況(西から)	写直回版91	SB1・2・SA1検出状況 (東から)
	SD 4 全景 (東から)	子兴凶/队31	SP137断面状況(西から)
	SD4 里京 (SP139断面状況(西から)
	SD4断面状況(西から)		SP144断面状況(西から)
写直図版24	SD4断面状況(北東から)		SP146断面状況(西から)
子兴四/021	SD4断面状況(北から)		SP148断面状況(西から)
	SD4断面状況(北から)		SP150断面状況(西から)
	SD4断面状況(北から)		SP178根石検出状況(西から)
	SD4 土器検出状況 (東から)	写直図版32	SB3検出状況(南から)
写直図版25	SD7検出状況(北から)	3 J (E 11)X 0 E	SP335断面状況 (西から)
	SD7 断面状況 (北西から)		SP336断面状況 (西から)
子兴四派20	SD7断面状況詳細(北から)		SP337断面状況(西から)
写真図版27	SK19検出状況 (北から)		SP342断面状況(西から)
	SK19焼土面検出状況(北から)	写真図版33	SD6 断面状況 (西から)
	SK48土器検出状況(東から)		SD6 断面状況 (西から)
	SK54土器検出状況(北西から)	写真図版34	調査区西壁断面(南東から)
	SK54土器検出状況詳細(北西から)		調査区西壁断面詳細(東から)
写真図版28	SK2検出状況(南から)		調査区南壁断面(北西から)
	SK2土器検出状況(南西から)		調査区南壁断面詳細(北から)
	SK2土器検出状況(西から)		現地指導状況 (立命館大学 青木哲哉氏)
	SK64検出状況(東から)		現地説明会状況
	SK64土器検出状況(北東から)	写真図版35	$1 \sim 3$, 5, 7, 10
	SK64土器検出状況(南から)	写真図版36	16、18、24、25、38
写真図版29	SP345上層土器検出状況 (北西から)	写真図版37	27、28、35、43、44
	SP345下層土器検出状況 (南東から)	写真図版38	46~49、51、54
	SP302断面状況(北から)	写真図版39	55、62、64、65
	SP403断面状況(南西から)	写真図版40	66、69、77、79、86、89、92
	SP455断面状況(南から)	写真図版41	93、95、98~100
	SP462断面状況(南から)	写真図版42	102, 105 · 106, 108~111
	SP463断面状況(南から)	写真図版43	116、117、119、120、127
	SP463石群検出状況(南から)	写真図版44	130、132、133、173、174、177
写真図版30	調査区南東部全景(西から)	写真図版45	176、180、187、189、196、198、206
	SK1土器検出状況(南東から)	写真図版46	212、213、217、226、229
	SK1土器検出状況(北西から)	写真図版47	230、233、235、238、240、258
	SK1土器検出状況(西から)	写真図版48	256、261、267、268、278、282、283
	SP480断面状況(北から)		
	SP624断面状況(西から)		

SP626断面状況(西から)

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

平成29年(2017)6月7日に姫路市網干区和久字土井34番4、35番9、36番8、36番9及び字旨戸68番1、71番6において、社会医療法人三栄会ツカザキ病院北館建設工事が計画された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である和久遺跡(県遺跡番号:020338)に該当する(図版1~3)。社会医療法人三栄会ツカザキ病院より文化財保護法第93条に基づく届出が提出されたため、姫路市教育委員会生涯学習部文化財課において遺跡の取り扱いについての協議が行われた。その結果、まずは確認調査によって包蔵地内を把握することとなり、同法人から役務提供を受ける形で調査を行った。確認調査成果に基づき、工事により遺構面が影響を受ける1270㎡を対象として、記録保存を図るため本発掘調査を実施することとし、平成29年9月1日に姫路市と事業者とで委託契約を締結した。

第2節 本発掘調査(第10次調査)

本発掘調査に際して、姫路市と社会医療法人三栄会ツカザキ病院との間で委託契約を結び、姫路市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査対象は、基礎等の工事により地下の遺構・遺物に影響が及ぶ範囲とした。調査面積は1270㎡である。また造成土と耕作土・床土、および中世以降の耕作土と考えられる土層については主に重機による掘削を行い、遺物の採集にとどめた。それより下位については、人力によって精査した。調査体制は以下の通りである。

姫路市教育委員会事務局

教 育 長 中杉隆夫 (~平成29年度) 姫路市埋蔵文化財センター

松田克彦(平成30年度~) 館 長 前田光則

教育次長 名村哲哉 (~平成30年度) 課長補佐 岡崎政俊

坂田基秀(平成31年度~) 係 長 森 恒裕

庶 務 岡本武平 (~平成29年度)

生涯学習部 竹井宏文(平成30年度~)

福井 優

R 長 岡田俊勝 (~平成30年度) 技術主任 小柴治子

沖塩宏明(平成31年度~) 中川 猛

文化財課(埋蔵文化財担当) 南 憲和

課 長 花幡和宏 関 梓(~平成30年度)

課長補佐 大谷輝彦 技 師 黒田祐介(平成31年度~)

師 黒田祐介(~平成30年度) 技師補 山下大輝

第3節 整理作業

技術主任 関 梓(平成31年度~)

遺物の整理作業は平成30年度に行った。このうち、接合・復元・実測は株式会社島田組に、図版の一部は国際文化財株式会社に、遺構写真図版作成については株式会社クレアチオにそれぞれ委託した。それらを含めた整理作業全体については、山下と福井が担当した。

1

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

姫 路 市 和久遺跡は兵庫県姫路市網干区和久に所在する(図版1)。姫路市は、兵庫県の南西部に位置し、 県内第2位の人口を擁する播磨地域の中核となる都市である。市域は播磨平野を中心に、北は中 国山地、南は瀬戸内海の島々にかけて広がる。平成18年3月27日に飾磨郡家島町、同夢前町、神 崎郡香寺町、宍粟郡安富町と合併し、現在の姿となった。令和元年5月現在、53,435km²、人口 530,640人である。

姫路は古代以降、山陽道を中心とした陸海交通の要衝にあたり、近世には姫路城の城下町として繁栄してきた。近代以降は軍都に姿を変えたため、第二次世界大戦末期には米軍による空襲を受け、市街地の大半が焼失するという壊滅的な被害を受けた。戦後は、播磨の中核として復興し、平成8年4月全国で初めて中核市に移行し、現在に至っている。

網 干 区 網干の名称は、養老4年(720)に魚吹八幡神社での祭礼に網を干して放生会とし、それが網 干祭と呼ばれるようになったことに由来しているという(橋本1956)。また現在使われている網 干区という地名は、東京都の特別区や政令指定都市の区とは異なるものである。これは昭和21年 (1946)3月のいわゆるラモート合併によって姫路市と当時の揖保郡網干町が合併した時の地名 の名残である。姫路市には網干区以外にも、飾磨区・広畑区・大津区・勝原区・余部区のように 「区」のつく地名がある(姫路百年編集委員会1990)。

第2節 歴史的環境(図版2)

弥生時代中期 平野部に所在する遺跡として、川島遺跡、檀特山遺跡、中筋遺跡などが挙げられる。また高地 性集落として檀特山山頂遺跡が挙げられる。また近年では、関ノ口遺跡において中期初めの遺構 が検出されているほか、中期後半に位置付けられる竪穴建物跡も検出されていることから今後も 周辺において新たな中期の遺跡の検出が予想される。

> 中期後半から後期にかけては川島遺跡、立岡遺跡が継続するようであるが、いずれの遺跡でも 後期初頭の一時期に関しては欠落している。

古墳時代初頭 弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては、川島遺跡、丁・柳ヶ瀬遺跡、鵤遺跡、鵤石田 遺跡、上構遺跡、上太田茶屋ノ前遺跡では庄内式の甕が出土している。この点について鵤遺跡で はその保有率が約30%と高く、川島遺跡においては庄内式の甕を保有しない一方で讃岐系の甕を 主体とするなどの特徴が指摘される。

第3節 既往の調査

既往の調査 和久遺跡におけるこれまでの発掘調査は本発掘調査が今回を含めて10次、試掘確認調査が4次 行われている。以下ではそれらの概要について時系列にてふれておきたい(図版3)。

試 掘 調 査 調査期間 平成12年(2000) 10月18日~10月27日

調査面積 64㎡

周知の埋蔵文化財包蔵地の近接地であったが、ツカザキ病院本館の建設工事の計画に伴い試掘調査を行った。16箇所設定した調査区のうち15箇所で遺構を確認し、またその半数以上の調査区

で竪穴住居跡を検出した。この結果を受け、当初想定されていたよりも和久遺跡の範囲が広がる ことが明らかになった(小柴2003)。

第1次調查 調査期間 平成12年(2000)12月12日~平成13年(2001)5月31日

調査面積 2640m²

先の試掘調査の結果を受け、工事の影響を受ける範囲の本発掘調査を行った。検出した遺構は、弥生時代中期後葉の土坑25基、弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物跡約100棟、土坑約80基、柱穴約1800基、溝約10条と奈良時代以降の掘立柱建物跡や溝である(小柴2003・2010)。このうち、竪穴建物跡の複雑な重複関係や出土した土器の年代観によってその平面形の変遷や播磨特有の燃焼施設であるイチマル土坑の実態に迫ることができたことは最大の成果といえよう(小柴2003・2010)。また大量に出土した地元産の土器に加えて、讃岐、阿波、山陰・河内といった遠隔地からの搬入土器も少なからずみられた。そして、ガラス製勾玉・小玉・碧玉製管玉といった交易品も出土するなど、他地域との活発な交流をうかがわせる資料が得られた。

本調査により、和久遺跡は播磨を代表する古墳時代初頭の集落遺跡の1つであることが明らかになり、以後注目を集めることになる。

第2次調查 調査期間 平成13年(2001) 4月26日~4月27日

調査面積 76㎡

第1次調査の調査区から北へ約150mの地点で調査を行った。耕土直下で地山が検出される箇所もあり、土坑やピット、溝などを確認した。このうち、北東-南西方向に延びる溝は幅1.6m、深さ約1mの断面V字形を呈し、上層から弥生時代後期の土器が多数出土した(大谷2003)。

第3次調査 調査期間 平成16年(2004) 2月13日~3月26日

調査面積 596m²

1次調査の調査区の北西側で調査を行った。竪穴住居跡 4 棟、溝15条、土坑15基、ピット123 基を検出した。このうち、時期の明らかなものは、弥生時代後期の溝 2 条と土坑 2 基、古墳時代 初頭の竪穴住居跡 1 棟である。溝からは讃岐産の甕が出土した。

試掘確認1次 調査期間 平成16年(2004) 4月1日~6月15日

調査面積 632㎡

和久遺跡の範囲確認のために4ヶ年計画で試掘確認調査を実施することになった。試掘確認第 1次調査は45箇所に調査区を設定した。北西端の調査区で検出した古墳時代の土坑からは、土師器とともに滑石製有孔円盤が出土したことから、遺跡の範囲は北西側へ大きく広がることが明らかになった。そして、第1次調査の調査区の東側と南側のトレンチでは、地形の傾斜と低湿地状の堆積がみられ、集落が立地する微高地が、南~南西方向に傾斜していることがわかった。また、その地形の落ちよりもさらに南東側に設定した調査区では、畦畔状の遺構や竪穴住居跡が確認できたことから南東側に別の集落域が存在する可能性が極めて高くなった。

第4次調査 調査期間 平成16年(2004)12月9日

調查面積 4 ㎡

第1次調査の調査区の北側に隣接する地点で調査を行った。遺構の密度は低かったものの、試 掘確認第1次調査で確認した古墳時代初頭の溝の埋土と類似する土層を確認している。

試掘確認2次 調査期間 平成17年(2005) 2月10日~3月25日

第2章 遺跡の概要

調査面積 200㎡

試掘確認調査の2年目として、3箇所の調査区を設定した。第1次調査の北西側に設定した調査区では地形が西側へと傾斜しており、第1次調査で検出した微高地の北西側の落ちを確認することができた。また、試掘確認第1次で検出した畦畔状遺構付近に設定したトレンチではその続きを確認するとともに、5棟の住居跡を検出した。いずれも弥生時代後期のものである。

以上より第1次調査で検出したものとは別に南東側にも集落域が存在することが明らかになり、和久遺跡の南東側への広がりは、確実なものとなった。

第5次調査 調査期間 平成17年(2005) 9月16日

調査面積 65㎡

狭小な調査区であったが、弥生時代前期と思われる土坑を1基確認した。

第6次調査 調査期間 平成17年(2005)10月25日

調査面積 65㎡

第3次調査と同じ敷地内で調査を行った。平安時代のピット14基、弥生時代の土坑2基、平安時代と思われる落ち込みを確認した。いずれの遺構からも土器の小片が出土している。

試掘確認3次 調査期間 平成18年(2006)2月9日~3月24日

調査面積 250m²

範囲確認を目的とした試掘確認調査の3年目である。調査対象範囲の北西端に設定した調査区では、南北方向の溝を検出した。土層の堆積状況及び大量に出土した土器の様相から、溝は弥生時代後期半ばに人為的に埋め戻された可能性がある。この溝以西では、地形の傾斜がみられ、微高地の西側縁辺部にあたると考えられる。

以上より、和久遺跡の存在時期が従前考えられていたよりも長期に及ぶことがわかった。また、 第1次調査で確認した微高地の西端を検出することができた。

試掘確認4次 調査期間 平成19(2007)2月8日~3月19日

調査面積 150㎡

第1次調査の北西側にある地形の高まりの性格を把握するために調査を行った。調査の結果、 この高まりは人為的なものであることがわかったものの、その性格を特定するには至らなかっ た。

第7次調査 調査期間 平成21 (2009) 12月7日~12月9日

調査面積 42㎡

調査区全体で低湿地状の堆積を確認した。遺物は、弥生土器の細片が出土したにとどまる。旧 地形が東から西へ傾斜していることがわかった。

以上の試掘確認調査によって、和久遺跡は、従前考えられていたよりも広範囲に展開することが明らかになった。そのため周知の埋蔵文化財包蔵地の変更の報告を兵庫県教育委員会文化財室 (当時)に行った。

第8次調査 調査期間 平成23年(2011) 3月15日~3月19日

調査面積 36㎡

社会医療法人三栄会ツカザキ病院新館建設計画に伴い、まず確認調査を行うことになった。調査対象地に9箇所の調査区を設定した。そのうち2・3・7区において、竪穴住居跡と考えられ

る遺構を検出した。出土遺物から、古墳時代初頭に比定することができた。また低位部にある7~9区では、水成堆積層と考えられる砂層が検出され、ここでも古墳時代初頭の土器が出土した。この砂層は、集落域縁辺部を流れた旧河道によって構成された可能性が考えられた。これらの成果から遺構密度が調査対象地全域に広がることが明らかとなった。

第9次調査 調査期間 平成23年(2011) 7月12日~12月24日

調査面積 1347㎡

竪穴住居跡21棟、木棺墓の可能性がある土坑3基、ピット101基、溝1条、旧河道1条を検出した。住居跡は、互いに近接もしくは切りあうものが多く、ほぼ同位置での建て替えが行われていたものもあった。これらの成果から、弥生時代中期後半の住居を確認することができた。この成果から、集落の形成時期がこれまで考えられていたよりも一段階古くなることが確実となった。

また初めて木棺墓の可能性がある土坑を数基検出したことで、和久遺跡の景観が一層具体的に 復元することが可能となった。

第1節 基本層序

調査地の層序は場所によって異なるため、調査区西壁を基準として述べる。図版 6 によると現地表は標高5.1 ~5.2mで北から南へとわずかに地表面から傾斜する。現地表面から0.8~1.3mの厚さで現代盛土が堆積し、以下、0.08~0.2mの厚さで灰色細砂・オリーブ褐色細砂からなる耕土を経て、オリーブ褐色粘質土からなる地山に至る。なお調査区西側には耕土と地山の間に傾斜地に堆積した暗灰黄色粘質土及び細砂がみられる。調査は地山面で行った。

第2節 弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭を検出した。以下では、それについて時期ごとにみていく ことにする。

弥生時代中期中葉

SK1 (図版7-1、24-1)

検出状況 調査区南東部で検出した。後述するSI15・SK3に切られる。

形状・規模 本遺構の周辺は、SK3や撹乱による削平を受けているため平面形が不明であった。そのため、サブトレンチを設定するなど遺構の規模・性格の把握に努めた。その結果、検出面から約0.1 mの厚さで暗オリーブ褐色細砂が堆積し、この下層で地山を確認することができた。したがって暗オリーブ褐色細砂が遺構埋土である可能性が高く、土坑として認識した。

出土遺物 ほぼ完形に復元できる広口壺1が1点出土した。

時 期 弥生時代中期中葉と考えられる。

SK2 (図版7-2、24-2·3)

検出状況 調査区北部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西0.67m・南北1.3m・深さ0.3mを測る。掘方は楕円形を呈する。

出土遺物 遺物は主に上層から広口壺2~5、甕6~8、甑9、高杯10・11が出土した。

時 期 弥生時代中期中葉と考えられる。

弥生時代中期後葉

SI1 (図版7-3、24-4、25-1)

検出状況 調査区北東部で検出した。SI11・SD6に切られる。

形状・規模 周壁溝の形状から平面形は円形を呈すると考えられる。SI11・SD 6 によって建物の半分以上が失われている。検出した周壁溝からの復元径は約6.0mである。検出面からの深さは0.08mで、床面の標高は4.12mである。

屋内施設 周壁溝・SP420・422~424・SK95・イチマル土坑(SK96)を検出した。柱穴は、位置や構造から主柱穴を構成するものと考えられる。柱穴の平面規模は、径0.15~0.44m・深さ0.55~0.63mを測る。掘方はいずれも円形を呈する。柱痕は確認できなかった。イチマル土坑(SK96)の平面規模は、東西1.6m・南北1.6mを測る。イチ土坑を南側に配し、マル土坑が北側に位置する。イチ土坑は長軸0.84m・短軸0.2m・深さ0.4mであり、マル土坑は長軸0.6m・短軸0.38m

である。

またマル土坑の東西隣では径約0.3mのピットを検出した。

出土遺物 埋土からは広口壺12、甕13、高杯14·15、環状石斧の未製品と思われる石製品18が出土した。 また、SK95からは大型の鉢16と小型器台17が出土した。出土遺物の年代観から、SK95は古墳 時代初頭に本遺構を掘り込んだ別の遺構である思われる。

時 期 弥生時代中期後葉に位置づけられる。

SI2 (図版8、9-1、25-2)

検出状況 調査区南部で検出した。SI3・7・8に切り込まれる。

形状・規模 直径4.1mの円形を呈する。検出面からの深さは0.12mで、床面の標高は約3.9mである。周 壁溝内の面積は、12.43㎡である。

屋内施設 周壁溝とイチマル土坑を検出した。周壁溝は、幅0.11mを測る。イチマル土坑は、SI2中央部で検出した。平面規模はやや楕円形を呈し、東西約1.42m・南北1.49mを測る。イチ土坑を南側に、マル土坑を北側に配置する。また周囲に盛土による土手を巡らしていることから小柴分類のB4にあたる(小柴2004)。イチ土坑は、長軸約1.0m・短軸0.3m・深さ約0.1mであり、マル土坑は、長軸0.9m・短軸0.5m・深さ約0.3mである。イチ土坑・マル土坑ともに、埋土には炭が多く含まれ、特に下層は炭の単層に近い状況であった。またイチ土坑とマル土坑の間には、0.08mほどの土手状遺構を確認した。この土手状遺構の上面には炭が堆積し、イチ土坑からマル土坑へと、炭が流れ込むような状態を確認できた。土手状遺構が盛土によるものか地山削り出しによるものかを確認するために断割調査を行った。その結果、SI2の床面を構築する際に地山を掘り込み、イチマル土坑の土手を造成するために盛土を行ってから床面を構築していることを確認した。

出土遺物 広口壺19、直口壺20、壺21、椀形高杯22・23、石錘24、サヌカイト製削器25が出土した。 時 期 弥生時代中期後半に位置づけられる。

SI3 (図版 9-2、25-3)

検出状況 調査区南部で検出した。後述するSI7・8・16に切りこまれ、遺構の約半分は撹乱されている。 形状・規模 平面規模は、直径約4.0mを測る円形を呈する。検出面からの深さは、約0.1mで床面の標高は、 約3.9mである。

屋内施設 周壁溝・SP536を検出した。周壁溝の規模は、幅約0.1m・深さ約0.1mを測る。SP536の平面 規模は、径0.18m・深さ0.24mを測る。

出土遺物 椀形高杯26の小片が出土した。

時 期 弥生時代中期後葉に位置づけられよう。

SK3 (図版10-1、25-4)

検出状況 調査区東部で検出した。

形状・規模 平面規模は、東西4.3m・南北2.2m・深さ0.3mを測る。掘方は隅丸長方形を呈する。土坑西部の底面では焼土面を検出した。

出土遺物 図化できたのは、甕27と無頸壺の把手28のみであった。

時 期 弥生時代中期後葉と考えられる。

SK 4 (図版10-2、25-5、26-1)

検出状況 調査区南部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西4.1m・南北約2.0m・深さ0.8mを測る。掘方は楕円形を呈する。

出 土 遺 物 3 層から 4 層にかけて土器が多量に出土した。 5 層で炭層を確認した。広口壺29~32、壺 33、無頸壺34、甕35~40、高杯41~43、甑44、サヌカイト製打製石鏃46・47が出土した。

時 期 弥生時代中期後葉に位置づけられる。

SK 5 (図版10-3、26-2·3)

検出状況 調査区中央部で検出した。SI13に切られる。

形状・規模 平面規模は東西3.0m・南北3.5mを測り、掘方は略円形を呈する。

出土遺物 広口壺48、甕49が出土した。

時 期 弥生時代中期後葉に位置づけられる。

SK6 (図版10-4、26-4)

検出状況 調査区北西部で検出した。遺構の中央部が後世の掘削により撹乱されている。

形状・規模 平面規模は東西1.3m・南北5.9m・深さ0.07mを測る。

出土遺物 無頸壺50、甕51、高杯52・53、蓋54が出土した。

時 期 弥生時代中期後葉に位置づけられる。

弥生時代後期後葉

SI4 (図版11-1、27-1)

検出状況 調査区南部で検出した。遺構の中央部は後世に削平を受けている。

形状・規模 平面規模は直径5.51mを測り、円形を呈する。検出面からの深さは0.18mで床面の標高は約3.9 mである。

屋内施設 周壁溝・SP404・525・527・SK103・106・ベッド状遺構を検出した。周壁溝は、幅0.08~0.16m・深さ約0.1mを測る。柱穴は、その位置から主柱穴を構成するものと考えられる。規模は、径0.22~0.26mで、深さは0.14~0.3mであった。SK103は建物内中央部に位置する。平面規模は、長軸0.88m・短軸0.6m・深さ約0.3mを測る。掘方は不定形を呈する。ベッド状遺構は盛土により、周壁溝に沿って巡る。幅約0.7~1.0m・高さ0.12mを測る。なお、本遺構の検出時に長頸壺55が横転した状態で出土し、その下半分が盛土内に埋没していた状況を確認した。精査の結果、周囲に掘方は認められなかったため、本遺構構築時に埋められたと考えられる。

出 土 遺 物 長頸壺55・56、広口壺57、壺58・59、甕60~62、有稜高杯63、高杯64~67、鉢68、器台69が 出土した。

時 期 弥生時代後期後葉に位置づけられる。

SI5 (図版11-2、12-1、27-2)

検出状況 調査区中央部で検出した。遺構間での切り合いはなく、独立した建物である。

形状・規模 平面規模は、長軸3.4m・短軸2.78mを測り、平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは、約0.1mであり、床面の標高は4.0mである。地山を約0.2m掘り込み、炭混じりの細砂土を入れた後、貼床で床を構築する構造である。

屋内施設 周壁溝·SK102·南北中軸上に並ぶ石材 1・2 を検出した。周壁溝の規模は、幅0.14m·深さ約0.1

mであり、周壁溝内の面積は8㎡である。

石材1・2はともに長軸0.2m・短軸0.14mほどである。これらの周囲には掘方は確認できなかったため、床面の構築時に据え付けられたと考えられる。また、これらの石はどちらも平坦面が上向きであり、柱を支えるための礎石であった可能性が高い。

貼床下層では、SK102を検出した。平面規模は、東西1.6m・南北0.3mを測る。この土坑最下層には、0.02~0.03mほどの厚さで炭が堆積していた。SK102については、本建物跡とは別の遺構である可能性も考えられるが、既述した貼床とその下部構造であるシルト混じりの細砂土との間層に形成されていることから、SI5床面の構築と関連する遺構として評価しておきたい。

下部構造 床面を掘り下げるとSK104を検出した。SK104は、長軸0.65m・短軸約0.2mを測る溝状の遺構である。遺物は出土しなかった。

出土遺物 甕70と器台71の極小片が出土した。

時 期 概ね弥生時代後期後葉に位置づけられよう。

庄内期以降

SI6 (図版12-2、27-3)

検出状況 調査区南東部で検出した。SK3・SD8に切られる。

形状・規模 平面規模は東西約4.3m・南北約5.0mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは約0.1mで、 床面の標高は3.97mである。

屋内施設 周壁溝・SP345・349・350・359・362・369・467・468を検出した。周壁溝は東半分が残存 していた。柱穴の平面規模は、径0.12~0.2m・深さ0.12~0.3mを測る。SP349・350は、その位 置から主柱穴の可能性が考えられるが、断定することはできない。

出 土 遺 物 床面に接した状態で壺72が出土し、SP349からは甕73が、SP345からは広口壺74・有稜高杯75・高杯76、器台77が、SP468からは鉢78が、SP362からは庄内形甕79がそれぞれ出土している。

時 期 庄内式併行期のなかでも前半に位置づけられよう。

SI7 (図版13-1、28-1)

検出状況 調査区南部で検出した。後述するSI16に切られ、SI2・3・8を切り込んで構築される。

形状・規模 南北4.69m、東西5.04mの平面隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.24mで床面の標高は3.92mである。

屋内施設 SP320・321・470・473・512・513・イチマル土坑 (SK68・SK69) を検出した。イチマル土 坑のうち、イチ土坑 (SK69) は南北0.7m・東西1.14mを測り、不定楕円形を呈する。またマル土坑 (SK68) は、南北0.5m・東西0.65mを測り、掘方上部は大きく、下部は小さい 2 段構造である。土坑底部には、炭が集積する状況であった。さらに土坑上部の北東・北西・南西角ならびに土坑の西側においてピット状の窪みを検出した。

柱穴の平面規模は、径0.27~0.31m・深さ0.12~0.4mである

出土遺物 出土遺物のうち甕80~84、甑もしくは有孔鉢85、鉢86・87は床面に接した状態で、脚台部88 は床面から遊離した状態で出土した。鉢89はSP473から、高杯90はSP470から、甕91は周壁溝から、甕92・93は貼床からそれぞれ出土した。

時 期 庄内式併行期の中でも後半に位置づけられよう。

SI8 (図版13-2·3)

検出状況 調査区南部で検出した。SI7・16に切られ、SI2・3・19を切り込んで構築されており、一部は撹乱されていると考えられる。

形状・規模 平面規模は南北4.0m・東西3.9mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは約0.1mで床面の標高は3.92mである。

屋内施設 中央部からわずかに東の位置において、SK75を検出した。土坑の平面規模は、南北0.39m・ 東西0.6m・深さ約0.1mである。その他の遺構は、確認できなかった。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時 期 遺構の切り合いから庄内式併行期に推定できる。

SI9 (図版14-1~4、28-2)

検出状況 調査区中央部で検出した。撹乱により建物の西半部が判然としない。

形状・規模 平面形は、残存状況から隅丸方形であったと考えられる。平面規模は南北4.8m・東西3.3m 以上で、検出面からの深さは0.15m、床面の標高は3.98mである。

屋内施設 周壁溝の一部・SP402・SP406・SK72・87を検出した。周壁溝は、幅0.12~0.2m・深さ0.08 mを測る。SP402・406の平面規模は、径0.2m・深さ0.1~0.36mを測る。検出位置から、主柱穴である可能性がある。またSK72は、屋内中央部で検出した。埋土からは炭集積部を検出したため、燃焼施設であると考えられる。東中央部では、SK87を検出した。平面規模は、最大径0.7m・深さ0.2mを測る。埋土上層と下層からそれぞれ鉢と壺が出土した。

下 部 構 造 床面においてサブトレンチを設定したところ、地山の堆積土とは異なる土層を確認したため、調査を進めた結果、中央部に径約3.0mの窪みを検出した。SI9構築時に、整地した痕跡である可能性も考えられる。

出土遺物 床面に接した状態で、壺94・96、高杯97が、SK87からは、複合口縁壺95、小型丸底土器98、 甕99、大型の鉢100が出土した。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SI10 (図版15-1、28-3)

検出状況 調査区中央部で検出した。建物跡南半の一部は後世の撹乱を受ける。

形状・規模 平面規模は長軸4.2m・短軸4.1mを測り、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは、0.05m で床面の標高は3.95mである。

屋内施設 SP63・109、SK62・431を検出した。SP63は、径0.45m以上・深さ0.5m、SP109は、径0.42m・深さ0.45mを測る。掘方最下部では、柱痕を検出した。SP63・109は、その位置と規模から主柱穴と考えられる。SK62は、径0.5m・深さ0.1mを測り、掘方は円形を呈する。土坑内中央部以外は炭で覆われており、燃焼施設である可能性がある。SK431は、0.5m四方のおよそ隅丸方形を呈する。深さは0.23mを測る。

出土遺物 床面に接した状態で壺101が、床面から遊離した状態で台付鉢102が、SK62からは甕103・ 104が、SK431からは甕105~109が出土した。なお、甕105・106は同一個体であることが実測 後に判明した(写真図版43)。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SI11 (図版15-2、29-1)

検出状況 調査区北東部で検出した。SD6に切られる。

形状・規模 SD6によって遺構の半分以上が撹乱を受けるため、全容は判然としない。検出面での規模は、東西4.85m・南北2.0m以上である。検出面からの深さは0.22m、床面標高は3.90mである。

屋内施設 周壁溝の一部とSK110を検出した。周壁溝の平面規模は、幅0.16m・深さ0.08mである。 SK110の平面規模は径約0.7m・深さ0.2mである。土坑上層には炭が集積していたため、燃焼施設である可能性も考えられる。

出土遺物 床面から遊離した状態で鉢110、甕116~119が出土し、SK110から壺111、甕112・113、鉢114が出土した。

時 期 庄内式併行期の中でも後半に位置づけられよう。

SI12 (図版16-1、29-2)

検出状況 調査区北東部で検出した。SD6に切られる。

形状・規模 平面規模は東西3.54m・南北3.1m以上である。建物跡の北側は、調査区外へと延びる。床面標高は4.1mを測る。

屋内施設 周壁溝とSK98を検出した。周壁溝の平面規模は、幅0.08m・深さ0.08mである。SK98の平面規模は、径0.62m・深さ0.23mを測る。掘方は円形を呈する。検出面から0.08m下には、炭が集積していた。また周壁溝に沿うように、幅0.9~1.0mの僅かな段状の高まりを確認した。この高まりは、断面観察においては不明瞭であるが、ベッド状遺構の可能性も否定できない。

出土遺物 床面の炭層検出時に甕120、有稜高杯121、丸底土器122が出土した。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられよう。

SI13 (図版16-2、29-3)

検出状況 調査区中央部で検出した。周壁溝北東部の一部がSI18に切られる。

形状・規模 平面規模は南北5.05m・東西5.0mを測り、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.2mである。床面標高は、約3.7mである。

屋内施設 SP538・540・545・667・668・SK83・84を検出した。柱穴は、検出位置からいずれも主柱穴を構成するものとみられる。平面規模は、径0.3~0.35m・深さ0.3~0.5mを測り、掘形は円形を呈する。また屋内中央部では、SK83を検出した。平面規模は、東西0.7m・南北0.5m・深さ0.05mを測る。掘方は楕円形を呈し、土手状の高まりが一部残存していた。燃焼施設である可能性が高い。なお、SK83の南側約1.5~2.0mの範囲で、炭の集積が確認できた。また建物跡内南東部では、SK84を検出した。平面規模は、南北1.48m・東西1.3m・深さ0.2mを測り、掘方は半円形を呈する。

出土遺物 床面に接した状態で、甕123、鉢124、有稜高杯125、有段高杯126が、床面から遊離した状態で鉢の脚台部127が、SK83から甕128が、周壁溝から甕129、SP538からは甕130が、SK84からは有稜高杯131・132、椀形高杯133、貼床からは甕134~136、高杯137がそれぞれ出土した。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半の古相に位置づけられよう。

SI14 (図版17-1)

検出状況 調査区中央部で検出した。SI13に切り込まれており、貼床部を掘り下げたところ、周壁溝・ピットなどを検出した。

形状・規模 平面規模は南北4.6m・東西4.82mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは約0.2mで、床面の標高は4.1mである。周壁溝は幅0.18m・深さ0.05~0.15mを測る。

屋内施設 周壁溝の一部とピットを検出した。周壁溝の規模については上述したとおりである。ピットは、建物跡内中央部から東半部にかけて17基検出した。径はいずれも0.08mほどである。深さは0.14~0.15mを測る。ピット以外の遺構は確認できなかった。

下 部 構 造 地山面ではSP558・560~569・592~597を検出した。その性格は判然としない。

出土遺物 土器の極小片が出土した。

時 期 出土土器からの時期の比定は困難であるが、遺構の切合関係から庄内式併行期の後半に収ま ると考えられる。

SI15 (図版17-2、29-4)

検出状況 調査区南東部で検出した。遺構の大部分は調査区南側に位置し、今回検出したのは北西部の 一部のみであるが、第1次調査SH01としてすでに調査されていることから、以下SH01の調査 成果を中心に概要を述べる。

形状・規模 平面規模は長軸4.96m・短軸4.56mを測り、方形を呈する。検出面からの深さは0.08mである。

屋内施設 第1次調査SH01では、柱穴・土坑・周壁溝・ベッド状遺構を検出した。柱穴は、検出位置からいずれも主柱穴を構成する。さらに建物内南辺中央部に土坑を検出した。掘方は最大径0.56mの楕円形を呈し、深さは0.28mを測る。周壁溝は幅0.16m・深さ0.12mを測る。またベッド状遺構は、盛土によって造成されており周壁溝に沿って巡る。平面規模は、幅0.96m・高さ0.08mを測る。今回の調査区内では、周壁溝の北西部分を検出した。

出土遺物 床面から遊離した状態で、広口壺138、無頸壺139、壺140、甕141・142・144、庄内型甕 143・145、高杯146・147・148が、SK01から小型器台149が、SP06から高杯150、小型器台151、 周壁溝からは甕152がそれぞれ出土した。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SI16 (図版18-1、30-1)

検出状況 調査区南部で検出した。SI7を切り込んで形成される。

形状・規模 平面規模は長軸約3.8m・短軸1.6m以上である。本遺構の大部分は調査区外へと延びると考えられる。後世の撹乱などにより残存状態が悪く、周壁溝を断続的に検出したにとどまった。

屋内施設 周壁溝·SP468を検出した。周壁溝は、幅0.1~0.12m·深さ約0.1mを測る。SP468は、径0.3m・深さ0.51mを測る。主柱穴である可能性が考えられる。

出土遺物 周壁溝から甕153が、床面では甕154がそれぞれ出土した。

時期 出土遺物からの特定は困難であるが、概ね庄内式併行期の範疇に収まると思われる。

SI17 (図版18-2)

検出状況 調査区北東部で検出した。SD6によって半分以上が撹乱される。

形状・規模 平面規模は東西3.18m・南北0.98m以上である。床面の標高は3.92mを測る。周壁溝の規模は0.1 ~0.2m・深さ0.08mである。 **屋内施設** 床面南部においてSK617を検出した。SK617の平面規模は、長軸0.44m・短軸0.4m・深さ約0.1 mで、掘方は隅丸方形を呈する。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時 期 切り合いから庄内期と考えられる。

SK7 (図版18-3、30-2)

検出状況 調査区北部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西3.84m・南北1.42m・深さ0.27mを測る。掘方は隅丸長方形を呈する。土坑 西部の底面では焼土面を検出した。

出 土 遺 物 焼土面検出中に長頸壺155、甕156~158、高杯159・166、甕蓋160が、そこから遊離した状態 で、甕164・165、高杯167~169、有孔鉢170、小型器台171が出土した。

時 期 出土土器の所属時期にややばらつきがみられるが、概ね庄内式併行期の範疇で収まると思われる。

SP102 (図版18-4·35-3)

検出状況 調査区北西部で検出した。

形状・規模 径0.2m・深さ0.32mである。掘方は円形を呈する。

出土遺物 甕281が出土した。

時 期 1点のみの出土であるために、時期の比定は難しいが、庄内式併行期の後半からいわゆる布 留式に位置づけられよう。

SK8 (図版18-5、30-3)

検出状況 調査区北部で検出した。

形状・規模 平面規模は長軸1.54m・短軸0.88m・深さ0.35mを測る。掘方は楕円形を呈する。

出土遺物 埋土中層から土器が多量に出土した。ただし土器は満遍なく全体的に集積するという状況ではなく、土坑長軸方向に平行して列状に出土した。出土した器種は、在地の甕172、庄内形甕173~179、高杯180~182である。

時 期 庄内式併行期のなかでも後半に位置づけられる。

SD2 (図版19、30-5~35-1)

検出状況 調査区西部で検出した南北方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は幅1.45~1.50m・延長28.5mで、南北ともに調査区外へと延びる。溝の深さは、南 北両端において約0.6mを測り、断面形は逆台形である。調査時には遺物の出土状況、埋土の 違いから上・中・下層と大別して行った。

遺物の 溝内出土遺物の大多数は中層上面から出土している。遺物の出土分布は溝全体にわたり、中出土状況 層のうち溝中央部および東肩にかけて集中するという状況を確認した。こうした状況から遺物は、SD2東側に位置する集落側から投棄されたと考えることができる。下層については概ねSD4と交差する部分の南北で埋土の状況が異なる。SD4以北は、土色が灰オリーブ色を呈しており、水成堆積層と考えられる。対してSD4以南は中層と分類した埋土に類似しており、土器の出土量もSD4以北に比べ多い印象である。これらの状況からSD2は、初期段階では自然に埋まりつつあったものが途中から土器の投棄など人為が加わって埋まったものと捉えることができる。

出土遺物 上層からは甕187・188、高杯189・190、器台191とともに外来系の広口壺192、甕193、高杯194が出土した。中層出土として図版31-2~図版33に掲載した資料のうち、壺197・198、外来系の広口壺205と甕215、高杯222・228、鉢232・233、砥石241は中層を掘り下げ時に出土したもので、それら以外の大半は、先に述べた中層上面でまとまって出土した一群であることをここで付記しておく。195は長頸壺、196・199~204は広口壺である。206~212は在地の甕、213・216~221は外来系の甕である。在地の甕のうち206~211は外面にタタキを残す一群で、212は最終的にハケメで仕上げている。213は吉備地域、216~221は讃岐地域からの搬入品と思われる。このうち、217・218・219の外面調整において、二次調整である縦方向のミガキの停止位置が胴部最大径付近から胴部下半と差がある点については、何に起因するかは不明であり、今後も注視する必要があろう。223~227・229~231は高杯である。このうち、223~225の有稜高杯と226の椀形高杯は弥生時代後期後半に比定され、土器群のうちでもやや古相を呈する。234は脚台部、235は把手付鉢、236は器台、237は外来系の鉢である。238は大型鉢、239はやや古相を呈する器台、240は手焙形土器である。

下層では、広口壺242・244、高杯243、外来系の高杯245、脚台部246といった弥生時代中期後半とともに、敲き石247といった石器もみられる。それとともに長頸壺248・249、外来系の広口壺250、有稜高杯251、大型鉢252・253といった後期後半の遺物が一定割合を占める。そして、254~268にみられる庄内式併行期の土器群が加わる。254~257は広口壺、259~263は甕である。259~261は在地の甕で、外面にタタキを残す。262・263は外来系で、前者は器形が近江地域に、後者は讃岐地域からの搬入品と考えられる。264~267は高杯の脚部、268は有孔鉢である。

時 期 上層と中層上面の土器群は弥生時代後期後半から庄内式併行期の範疇に収まり、中層から下層については一部に弥生時代中期後半の遺物を含みながらも大半は同後期後半のものが占めている。漸移的ではあるが、層位毎に時期差が窺える。

SI18 (図版18-7)

検出状況 調査区中央部で検出した。SI13を切る。ほぼ全域が残存せず周壁溝の一部を検出したのみである。

形状・規模 竪穴建物の規模や形状は判然としない。

屋内施設 周壁溝の一部を検出した。平面規模は幅約0.2m・深さ約0.1mを測る。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時 期 遺物がないため判然としないが遺構の切り合いから庄内式と考えられる。

SD4 (図版20、35-2)

検出状況 調査区南西部で検出した東西方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は、幅0.3m・延長14.0mで、溝の西延長部は、調査区外へと延びる。溝の深さは、 西端0.14m・中央部0.36m・東側0.2mである。断面形状は、掘方が底に対して垂直方向となる。 先述したSD 2 が埋没した後に形成されている。断面形状等から布掘りの柵である可能性を念 頭に置き、調査を進め、横断面と縦断面を観察するためのセクションを設けた。その過程で SD 4 中に径0.1~0.2mのピット状の輪郭を検出した。断面を確認しながら慎重に調査を進めた が、残念ながら最終的に明確な柵と断定することはできなかった。

出土遺物 直口壺269、複合口縁壺270、壺273、在地の甕271・272、外来系の甕274、高杯275・276、小

型器台277、小型丸底土器278、鉢279が出土した。

時 期 布留式に位置づけられる。

その他の遺構

SK19 (図版18-6)

検出状況 調査区中央部で検出した。

形状・規模 平面規模は東西1.7m・南北2.15m・深さ0.05mを測る。掘方は方形を呈する。土坑中央部や や東よりの地点では、被熱面を検出した。被熱面は中心部から最大2.0mほどの範囲で広がっ ていた。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時期 時期は判然としない。

SD1 (図版14-5、30-4)

検出状況 調査区北部で検出した東西方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は、幅1.1m・延長約34.0m以上で、溝の東西両側ともに調査区外へと延長する。断 面形状は、緩やかなU字状を呈し、深さは0.5mである。SD 2 に切り込まれる。

出土遺物 甕183・184・185、高杯186が出土した。

時 期 上述のとおり、遺物から時期の比定は困難である。

SD3 (図版19)

検出状況 調査区西部で検出した南北方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は幅1.3m・延長14.0m以上で、溝は南北ともに調査区外へと延びる。溝の深さは、 北側で約0.5m、南端で約0.6mと若干ながら南側に傾斜することがわかり、北から南への水流 方向が考えられる。

出土遺物 出土した土器はいずれも極小片であった。

時 期 上述のとおり、遺物から時期の比定はできない。

SD5 (図版4)

検出状況 調査区南部で検出した東西方向に延びる溝である。

形状・規模 平面規模は、幅約4.0m・長さ7.4m・深さ0.2~0.24mである。断面観察から上下2層に埋土が堆積する。SD5の検出位置は、先述したSD4のおよそ東延長部に位置することから両遺構の関連が想定されたが判然としない。

出土遺物 出土した土器はいずれも小片であった。

時 期 小片であるため時期は判然としない。

SD7 (写真図版25·26)

検出状況 調査区南東部で検出した南北方向に延びる流路である。

形状・規模 平面規模は、幅2.0m以上・長さ6.0m・深さ0.22mを測る。埋土は上下2層に分かれ、いずれも締まりがない細砂礫が堆積する。

出土遺物 出土した土器はいずれも小片であった。

時期 時期は判然としない。

SD8

検出状況 調査区南東部で検出した南北方向に延びる流路である。

形状・規模 平面規模は幅1.0m・長さ9.0m・深さ0.27mである。SI 6 を切り込む。埋土は灰・灰オリーブ 色細砂が堆積する。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時 期 遺構の切り合いから庄内期以降と考えられる。

第3節 中世の遺構と遺物

今回の調査では、中世の遺構も複数検出した。中世の遺構は、灰黄色を呈する埋土を有し、古代以前の遺構の土色とは一線を画している。今回は掘立柱建物跡3棟、柵1条、畝溝を検出した。以下に概要をまとめる。

畝溝群 (図版21)

検出状況 調査区全域で南北方向の畝溝を21条検出した。

形状・規模 平面規模は、南北長5.7~23m・幅約0.3~0.4m・深さ約0.1mを測る。畝溝群は後述する SB1・2に切り込まれる。なお溝の方位は概ね座標北と合致しており、SB1~3と異なる。

出土遺物 土器の小片が出土したが器種等は不明である。

時期後述するSB1・2よりは新しいが詳細な時期は不明である。

SB1 (図版22)

検出状況 調査区南部で検出した掘立柱建物跡である。

形状・規模 SP135・136・139・140・143・144・147・313・314によって構成される。平面規模は、東西 1.8m・南北7.0mを測り、1間×4間の建物跡である。柱間はおよそ1.8mである。いずれの柱 穴も掘方は円形を呈する。建物跡は、座標北から西へ約5度振れて立地する。柱穴掘底からは 根石を検出したものもあった。

出土遺物 遺物は土器の細片が出土したにとどまる。

時期 時期は判然としない。

SB2 (図版22)

検出状況 調査区南部で検出した掘立柱建物跡である。

形状・規模 SP138・142・146・149・151・171~180によって構成される。平面規模は、東西3.3m・南北 6.8mを測り、2間×4間の建物である。柱間はおよそ1.8mである。いずれの柱穴も掘方は円 形を呈する。建物跡は、座標北から西へ約5度振れており、SB1と同様である。また柱穴底 からは根石を検出したものがあった。

出土遺物 遺物は出土していない。

時 期 判然としないが、SB1と規模・方位が近似することから同時期と考えられる。

SB3 (図版23-1)

検出状況 調査区南東部で検出した掘立柱建物跡である。

形状・規模 SP334~344で構成される。平面規模は東西5.0m・南北5.7mの2間×3間の建物跡であり、 柱間は東西約2.5m・南北約1.8mである。いずれの柱穴も掘方は、円形を呈する。主軸方位は SB1・2とおよそ同一である。しかしSB1・2と比較して、やや東に立地することや柱間の 距離が異なることから、同一時期における性格の異なる建物の可能性も考えられる。 出土遺物 土器が少量出土した。

時 期 遺物が少量であることから判然としないが主軸方向等からSB1・2と同一時期の可能性が 高い。

SB 4 (図版23-2)

検出状況 調査区南西部で検出した。

形状・規模 SP11・12・19・20・31・39・46・51・55・68から構成される。平面規模は梁行4.4m×桁行5.0 mを測り、2間×3間の建物跡である。方位は、座標北から約15度東へ振る。SB1~3と比較して、方位や構造が異なる点から時期が異なるものと考えられる。

出土遺物 遺物はない。

時 期 遺物が出土しないため判然としない。

SA 1 (図版22)

検出状況 SB1から東へ2.5m、SB2から西へ2.5mの地点で検出した。

形状・規模 SP137・141・145・148・150で構成される。南北7.0mの柱穴列であり、柵と考えられる。柱間は1.5~2.0mとややばらつきがある。いずれの柱穴も掘方は円形を呈する。柵はSB1~3同様に、座標北から西に約5度振れる。SB1・2のおよそ中間地点で検出したことから、建物間を仕切る性格を持つものと考えられる。柵を構成する柱穴埋土から遺物は出土しなかったが、根石と考えられる石を検出した。

出土遺物 遺物は出土していない。

時期判然としないが、SB1・2に伴うものであると考えられる。

なおSB1~3·SA1については、発掘調査中及び整理作業中において柱間間隔の差異などからそれぞれ異なる遺構として評価した。但しSB1~3·SA1それぞれを構成する柱穴群が4間×5間におよぶ掘立柱建物跡を構成する可能性が少なからずあることを付しておく。

SP131

検出状況 調査区南西部で検出した柱穴である。

形状・規模 平面規模は、径0.2m・深さ0.27mである。掘形は円形を呈する。

出土遺物 掘形底部から土師器皿が出土した。

時 期 土師器皿の形状は11~12世紀頃のものと考えられる。

SD6 (図版35-3·写真図版33)

検出状況 調査区北東部で検出した中世の水路である。

形状・規模 平面規模は、延長11.5m・幅3.0m・深さ0.83mである。溝は東西方向に延び、調査区内で北向きに直角に折れ曲がる。埋土から弥生時代から中世までの遺物が出土したが、層位を問わず中世の遺物が多数みられることから中世段階において機能し、埋没したものと考えられる。なおこのSD6に関連するものとして、平成17年(2005年)に行われた試掘確認2次調査で南北方向の溝が検出されている。SD6の北延長部で検出され、さらに断面形状・出土遺物の年代観が類似することからSD6と一連の溝であると考えられる。

出土遺物 瓦器椀283などが出土した。

時期出土遺物から13世紀ごろには廃絶したと考えられる。

第4章 自然科学的分析

第1節 和久遺跡第10次調査区の地形環境

青 木 哲 哉(立命館大学非常勤講師)

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにする必要がある。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。このため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。こうした堆積物には編年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通じて明確にすることが可能となる。また調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも分析できるのである。

本稿では、和久遺跡第10次調査区の地形環境について明らかにし、それと人間活動との関係を考察したい。調査では、調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず20,000分の1空中写真の判読から調査区周辺の地形を区分した。ついで、5,000分の1空中写真の判読と現地踏査によって調査区付近の平野における微地形分類を行った。他方、堆積物に関しては調査区での地質断面を詳細に観察した。地質断面の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、遺構検出面から掘削したトレンチの断面についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近の地形環境ならびにそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査区付近の地形分布

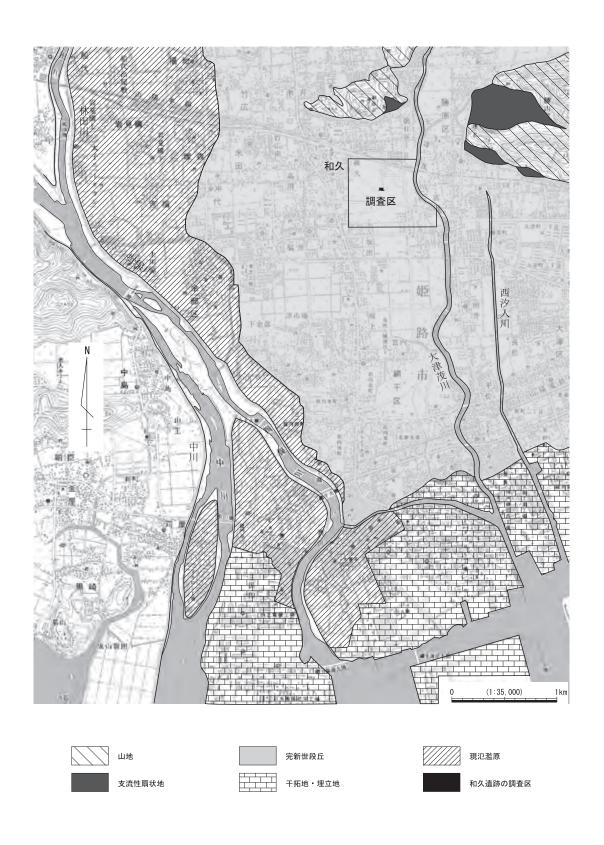
(1) 調査区周辺の地形について

本遺跡の第10次調査区は瀬戸内海に面する播磨平野の西部に位置する。そこには沖積低地が広がり、調査区の約3km西を揖保川が南東へ、またおよそ300m東には小規模な大津茂川が南へ流れる。沖積低地の周辺には丘陵と更新世段丘がみられず、山地が分布する。山地は80~180mの標高を有し、調査区より約750m北方ならびに揖保川の西岸に認められる。調査区の約4.5km南には、瀬戸内海が広がり、海岸付近には江戸時代以降の干拓地や近年の埋立地が存在する。

調査区周辺の沖積低地は完新世段丘、現氾濫原および支流性扇状地に分けられる(挿図1)。これらのうち、 調査区は完新世段丘に位置する。各地形の特徴は次のとおりである。

〔完新世段丘〕この地形は広範囲に発達し、現氾濫原と比高数十 $cm\sim1$ mの崖で接する。段丘面は比較的平坦で、条里型土地割(条里地割)が認められる。

〔現氾濫原〕これは、洪水時に冠水しやすい最も低い地形面である。この地形面は、揖保川とその支流である 林田川に沿って認められ、規模の小さい大津茂川沿いにはみられない。現氾濫原における現地表の起伏は完新 世段丘と比べてやや大きい。



挿図1 調査区周辺の地形分類図 (S=1:35,000)

第4章 自然科学的分析

〔支流性扇状地〕この扇状地は、背後の山地から堆積物が供給されてできたもので、山麓に点々と分布する。 調査区北方の山麓では、面積が小さく急な地表傾斜の支流性扇状地が完新世段丘と傾斜変換線で接している。

(2) 調査区の微地形と遺構について

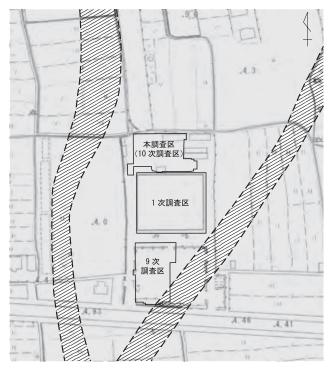
調査区付近の完新世段丘は埋没した扇状地が段丘化したものである。そのため、扇状地の微地形である旧中州と旧河道が埋没した状態で分布する(挿図 2)。旧中州は扇状地に分布する微高地に相当し、それが埋没している地点の現地表は旧河道の埋没地点より数十cm高い。調査区はこうした埋没旧中州の頂部付近に位置する。

調査区では、弥生時代中期中ごろの竪穴住居跡 1 棟、弥生時代中期後半の竪穴住居跡 2 棟と土坑数基、 弥生時代後期の土坑 1 基と溝 1 条、弥生時代後期後半の竪穴住居跡 4 棟、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の竪穴住居跡 4 棟と土坑 2 基、溝 2 条などが検出されている。調査区がみられる埋没旧中州上は、弥生時代後期前半を除く弥生時代中期中ごろから古墳時代初頭にかけて居住域に利用されていたことが知られる。

3. 調査区における堆積物の特徴

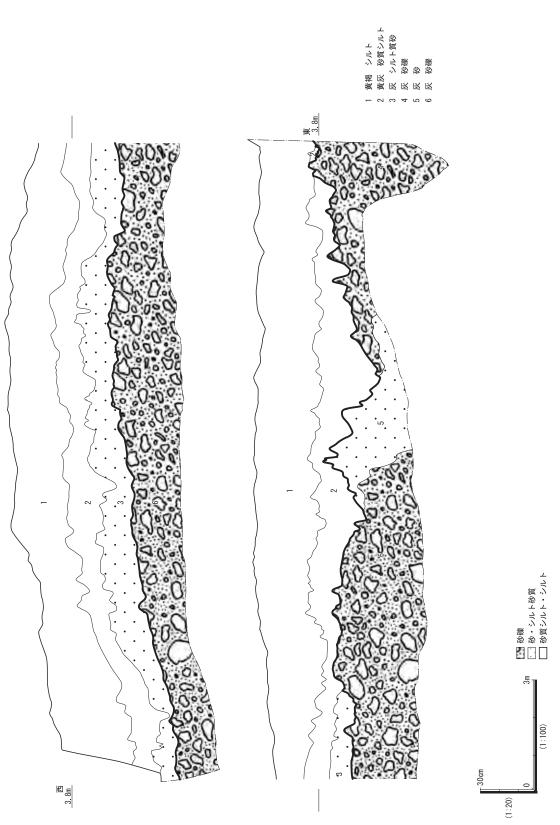
調査区では、基本的に灰色の砂礫とこれを覆う細粒堆積物が観察される(挿図3)。これらはいずれも洪水堆積物である。灰色の砂礫は扇状地の旧中州堆積物に相当する。上面は、近年の盛土下面から70cm前後の比較的浅所に認められ、西へわずかに高度を下げる。これは、調査区が旧中州の頂部よりやや西側に位置することを示す。調査区付近のボーリング資料によると、この砂礫は5~8mの厚さで認められ、縄文海進頂期以降に堆積したと考えられる。

調査区では、こうした砂礫の上部が観察できる。そこでは砂礫が2層に細分され、間には灰色の砂(挿図3の堆積物5)が30~40cmの厚さで挟まれる。下位の砂礫(同図の堆積物6)は、調査区のほぼ全域に分布し、



挿図2 調査地付近における微地形の分布(1:3,000)

□ 埋没旧中州
□ 埋没旧河道
0 (1:3,000) 50m



挿図3 遺構検出面からのトレンチ断面図(1:20、1:100)

第4章 自然科学的分析

上面高度が東部で低くなる。礫は径3~8cmの亜角礫から亜円礫を主体とし、最大で径15cmの礫を含む。上位の砂礫(同図の堆積物4)は調査区東部だけにみられ、80cm以上の厚さで堆積している。これは主に径2~5cmの亜角礫から亜円礫からなり、径10cmの礫を最大とする。このような砂礫は 調査区より約55m南方に位置する和久遺跡第9次調査区¹⁾ やおよそ900m北西方の鍛冶田遺跡調査区²⁾ でも観察され、調査区の周辺一帯に広く認められる。鍛冶田遺跡調査区では、砂礫より上位の堆積物に縄文時代晩期の遺物が混入する³⁾。

砂礫を覆う細粒堆積物は近年の耕土と盛土を除いて5層に分けられる。これらのうち、遺構検出面以深には下位から灰色のシルト質砂(同図の堆積物3)、黄灰色の砂質シルト(同図の堆積物2)、ならびに黄褐色のシルト(同図の堆積物1)が認められる。灰色のシルト質砂は砂礫の上面がやや低くなる調査区西半部に分布する。これは最大で約30cmの厚さをもつ。その上位に位置する黄灰色の砂質シルトと黄褐色のシルトはともに調査区のほぼ全域に広がる。厚さはそれぞれ40cm以下ならびに15~50cmである。黄褐色のシルト上面は緩やかに西へ傾斜し、その面から弥生時代中期中ごろから古墳時代初頭にかけての遺構が検出されている。

遺構検出面より上位には、下位から暗灰黄色のシルト、オリーブ褐色の砂質シルト、近年の耕土、及び盛土がみられる。中でも暗灰黄色のシルトとオリーブ褐色の砂質シルトは、それぞれ高度がやや低い調査区の西部及び北西部に分布する。これらは、全体で最大約35cmの厚さをもち、弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺物を含む。こうした砂礫を覆う細粒堆積物は和久遺跡第9次調査区でも観察され、そこでの厚さは1.3~1.4mである4)。この堆積物は、旧中州の頂部付近で薄く、南の末端に向かって厚くなる傾向が認められる。

4. 地形環境の変遷

これまで述べた事柄からみて、調査区付近では次のような地形環境の変遷が考察される。

[ステージ1] 縄文時代晩期以前、調査区付近には揖保川や大津茂川によって砂礫が堆積し、扇状地が発達した。砂礫は少なくとも2度もたらされ、まず径の大きい礫を含む砂礫の堆積が調査区全域でみられた。これによって中州が形成された。さらに、この砂礫を砂が薄く覆った後、やや小さい礫からなる砂礫が調査区東部を中心に堆積した。その結果、中州は発達し、調査区付近で上面が西へわずかに傾斜する微高地になった。

〔ステージ2〕 中州上には、弥生時代中期中ごろまでに少なくとも3層の細粒堆積物が洪水によってもたらされた。最初にシルト質砂がやや地表高度の低い調査区西半部に堆積した。ついで調査区全域に砂質シルトとシルトの堆積が相次いでみられ、旧中州は浅く埋没していった。

[ステージ3] 遅くとも弥生時代中期中ごろ以降、調査区付近には洪水のほとんど発生しない比較的安定した環境が訪れた。調査区では、弥生時代中期中ごろから中期後半ならびに弥生時代後期後半から古墳時代初頭に竪穴住居が建てられ、埋没旧中州上は居住域として利用された。和久遺跡第9次調査区では、弥生時代後期前半に洪水が1度発生し、砂質シルトが堆積した。本調査区で同時期に竪穴住居が建てられなかったのは、この洪水に一因があると推定される。

〔ステージ4〕 調査区付近に広がる沖積低地が揖保川によって下刻され、段丘化した(完新世段丘の形成)。 その結果、今も揖保川が流れる段丘崖下では度重なる洪水によって現氾濫原が発達していった。

5. おわりに

本遺跡の第10次調査区は沖積低地の完新世段丘に位置する。この付近では、縄文時代晩期以前に扇状地が揖保川や大津茂川によって形成され、その後弥生時代中期中ごろまでに埋没した。完新世段丘は、これが古墳時代初頭以降のある時期に段丘化したものである。調査区は埋没した旧中州上に分布する。この微地形は約55m

南方の和久遺跡第9次調査区から連続するもので、本調査区はその頂部付近に認められる。

調査区付近の埋没旧中州上は主に居住域として利用され、そこでは弥生時代後期前半を除く弥生時代中期中ごろから古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡が多数検出されている。これには2つの要因があげられる。ひとつは、埋没旧中州上が埋没旧河道上よりわずかに高いため、比較的高燥で排水されやすいことである。これは埋没旧中州上の特性にあたる。他の1つは、調査区付近の環境が遅くとも弥生時代中期中ごろから比較的安定し、洪水がほとんど発生しなかったことである。調査区では、こうした人間の居住に適する地形環境がみられたと考えられる。ただし、和久遺跡第9次調査区付近では、弥生時代後期前半に洪水が1度発生した。この時期には本調査区でも人間が居住しておらず、これは第9次調査区付近での洪水に影響を受けた可能性がある。第10次調査区では、以上のような地形環境と人間生活の関係が認められる。

註

- 1) 拙稿「和久遺跡の地形環境」、姫路市埋蔵文化財センター『和久遺跡』所収、2013年
- 2) 兵庫県まちづくり技術センターが発掘調査した鍛冶田遺跡調査区での観察による。
- 3) 兵庫県まちづくり技術センターの発掘調査成果による。
- 4) 前掲1)

第2節-1 和久遺跡出土種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

和久遺跡(兵庫県姫路市網干区和久)は、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡であり、これまでの 発掘調査で、弥生時代から古墳時代の竪穴住居が多数検出されている。

本分析調査では、弥生時代後期とされる竪穴住居内の覆土を対象として、洗い出し同定を実施し、当時の植物利用に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、弥生時代後期とされる第1次調査竪穴住居SH39-1の床面上より採取された土壌1点である。試料は、乾燥した状態でポリ袋に入っている。

2. 分析方法

土壌試料から炭化種実を分離・抽出するために、水を入れた容器に試料を投入し、速やかに容器を傾けて浮いた炭化物を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(20回程度)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後の水に浮いた試料(炭化物主体)と水に沈んだ試料(砂礫主体)を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を抽出する。炭化種実の同定は、現生標本や佐藤 (1988)、谷城 (2007)、中山ほか (2010)、鈴木ほか (2012) 等を参考に実施する。結果は、部位・状態別の個数を一覧表で示し、写真を添付する。また、保存状態が良好な炭化米の大きさをデジタルノギスで計測し、炭化米の「粒大(長さ×幅)、粒形(長さ/幅)」(佐藤,1988)を求め、結果を一覧表に併記する。炭化種実以外は、個数または重量、一部の最大径を一覧表に併記する。

分析後は、炭化種実を分類群・部位別に容器に入れて返却する。

3. 結果

結果を表1に示す。また、炭化種実各分類群の写真を写真1に、計測値を表1に示して同定根拠とする。

SH39-1の土壌試料900gを洗い出した結果、被子植物3分類群(木本のブナ科、草本のイネ、ホタルイ属)284個0.68gの炭化種実が同定された。炭化種実以外は、炭化材が0.07g(最大5.3mm)、炭化材主体3.09g、砂礫主体51.96g、土器片1個10.90g(径34.6mm)が確認された。

炭化種実群は、栽培種のイネの籾(基部)が6個0.01g未満、籾・玄米が9個0.05g、玄米(炭化米)が267個0.63gと、抽水性多年草のホタルイ属の果実が1個0.01g未満、広葉樹のブナ科(クヌギ節の可能性)の果実の破片が1個0.01g未満(残存径2.7mm)から成り、圧倒的なイネ主体の組成を示す。

炭化種実の保存状態は概ね不良で、炭化米は焼き膨れや発泡、欠損、摩耗しており、完全な形状をとどめた 個体や表面模様が明瞭な個体が少ない。一方、表面に籾が残る個体や、虫類による食痕も少量確認される。そ の他、ホタルイ属にも食痕がみられる。以下、炭化種実の形態的特徴を記す。

・イネ (Oryza sativa L.) イネ科イネ属 写真 1-1~14

分類群	類群 部位・状態/粒径		SH	39-1		計測値	$\left(mm\right)$		粒大	粒形	図版 番号	備考
刀规件	마깐. 1	忠/ 松注	(個)	(g)	No.	長さ	幅	厚さ	長さ×幅	長さ/幅	番号	加与
木本種実												
ブナ科	果実	破片	1	0.00	-	2.71	-	-	-	-	16	残存長,クリかクヌギ節の可能性
草本種実												
イネ	籾(基部)	破片	6	0.00	-	2.05	-	-	-	-	3,4	残存長
	籾·玄米	完形	1	0.00	-	4.76	2.21	1.92	10.52	2.15	10	長粒極小型
		完形未満	8	0.05	-	_	-	-	_	-	5-9	2個食痕
	玄米	完形	6	0.06	1	4.78	2.41	1.92	11.52	1.98	11	短粒極小型
					2	4.07	2.76	2.40	11.23	1.47	12	短粒極小型
					3	3.95	2.25	2.01	8.89	1.76	14	短粒極小型
					4	4.51	2.06	1.89	9.29	2.19	13	長粒極小型
		完形未満	28	0.20	-	-	-	-	_	-	2	
		破片	233	0.37	-	-	-	-	-	-	1	
ホタルイ属	果実	完形	1	0.00	-	-	-	-	-	-	15	食痕
種実合計			284	0.68	-	-	-	-	-	-	-	
分析残渣												
炭化材	>2mm		_	0.07	-	-	-	-	-	-	-	最大5.29mm
炭化材主体	2-1mm		_	0.90	-	-	-	-	-	-	-	炭化物・植物片含む
	1-0.5mm		_	2.20	-	-	-	-	_	-	-	炭化物・植物片含む
砂礫主体	>4mm		_	4.27	-	-	-	-	_	-	-	岩片3個
	4-2mm		_	8.23	-	-	-	-	-	-	-	
	2-1mm		-	10.78	-	-	-	-	-	-	-	
	1-0.5mm		-	28.68	-	-	-	-	-	-	-	
土器片			1	10.90	-	34.56	-	-	-	-	-	
分析量			-	900	-	-	-	-	-	-	-	乾重

表 1 土壌試料洗い出し・炭化種実同定結果

柱形の果実序柄(小穂軸)と1対の護穎を有し、その上に外穎(護穎と言う場合もある)と内穎がある。外 類は5脈、内穎は3脈をもち、ともに舟形を呈し、縫合して稲籾を構成する。果皮表面には微細な顆粒状突 起が縦列する。

籾内に1個入る玄米(穎果)は、長さ4.0~4.8mm、幅2.1~2.8mm、厚さ1.9~2.4mmを測る。基部一端に胚が脱落した斜切形の凹部がある。表面に2~3本の縦隆条があるが、出土玄米は不明瞭な個体が多く、焼き膨れや発泡、欠損、摩耗している。かろうじて計測が可能な完形5個の計測値より求めた粒大・粒形(佐藤,1988)は、3個が短粒・極小型、2個が長粒・極小型に該当する。2個の籾が残る玄米には歪な円形の孔があり、孔周囲に直交する浅い縦筋模様がみられる。縦筋模様は歯型とみなされ、虫類による食痕と考えられる。

・ホタルイ属 (Scirpus) カヤツリグサ科 写真 1-15

果実は長さ2.0mm、幅1.3mmの片凸レンズ状広倒卵体。頂部は尖り、基部は切形で刺針状の花被片を欠損する。背面正中線上は鈍稜。果皮表面は光沢があり、不規則な波状横皺状模様が発達する。背面に径0.7mmの歪な円形の孔があり、孔周囲に直交する浅い縦筋模様がみられる。縦筋模様は歯型とみなされ、虫類による食痕と考えられる。

・ブナ科(Fagaceae) 写真 1-16

果実は残存径2.7mmの果皮片である。果皮は薄く、外面は平滑、内面は粗面で縦筋は不明瞭、断面の外面側に薄い柵状構造がある。曲率が小さいため、クリやクヌギ節(クヌギやアベマキ)などの大型果実に由来する可能性がある。

注) 計測はデジタルノギスを使用、粒大・粒形は佐藤(1988) に基づく。

4. 考察

弥生時代後期(庄内期)とされる竪穴住居SH39-1の床面上から得られた炭化種実群は、ほぼ栽培種のイネ (炭化米)から成り、他の穀類は確認されなかった。イネは、近辺で栽培されたか持ち込まれたかは不明であ るが、当時利用された植物質食糧と示唆される。出土炭化米の粒大・粒形(佐藤,1988)は、3個が短粒・極小 型、2個が長粒・極小型であった。邦産の炭化米としては標準的である(佐藤,1988)。また、炭化米の表面に 籾殻が残る個体が確認されることから、脱稃(だっぷ;籾殻を取り去る、籾摺り)前の段階で火を受けたと推 測される。さらに、籾殻が残る炭化米の一部に食痕が確認されたことから、火を受ける前の段階で害虫による 食害を受けた可能性がある。

イネを除いた炭化種実には、木本のブナ科と草本のホタルイ属が確認された。ブナ科は、高木になる常緑または落葉広葉樹である。周辺の森林に生育していたと考えられる。また、堅果類のブナ科は、果実内部の子葉が食用可能である。出土果実に人が利用した痕跡は認められないが、当時の遺跡周辺の森林より採取され、利用された可能性はある。

ホタルイ属は、水深が浅い水湿地に生育する抽水性多年草である。調査区周辺の水深の浅い水湿地に生育していたと考えられる。多量のイネが供伴することから、水田雑草に由来する可能性もある。また、出土果実には食痕が確認されたことから、火を受ける前の段階で虫類による食害を受けた可能性がある。

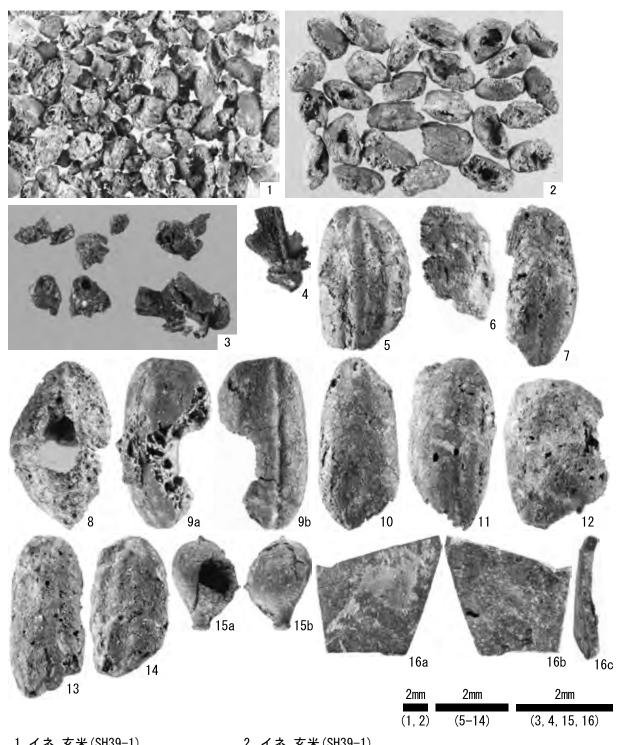
引用文献

中山至大·井之口希秀·南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.

佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2生業,金関 恕・佐原 真編,雄山閣,97-111.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-.誠文堂新光社,272p.

谷城勝弘,2007,カヤツリグサ科入門図鑑.全国農村教育協会,247p.



- 1. イネ 玄米(SH39-1)
- 3. イネ 籾(基部)(SH39-1)
- 5. イネ 籾·玄米(SH39-1)
- 7. イネ 籾·玄米(SH39-1)
- 9. イネ 籾·玄米(食痕)(SH39-1)
- 11. イネ 玄米(SH39-1)
- 13. イネ 玄米(SH39-1)
- 15. ホタルイ属 果実(SH39-1)
- 2. イネ 玄米(SH39-1)
- 4. イネ 籾(基部)(SH39-1)
- 6. イネ 籾·玄米(SH39-1)
- 8. イネ 籾·玄米(食痕)(SH39-1)
- 10. イネ 籾·玄米(SH39-1)
- 12. イネ 玄米(SH39-1)
- 14. イネ 玄米(SH39-1)
- 16. ブナ科 果実(SH39-1)

写真1 炭化種実

第2節-2 和久遺跡第1次調査SH39-1について

前節では、今回の調査に南接する第1次調査SH39-1 (以下、SH39-1とする。) 床面出土の炭化米についての分析を行った。

当該遺構については、これまでは『姫路市史』第七巻下(小柴2011)に一覧表として紹介されているので、 ここでは遺構と出土遺物について報告しておきたい。

SH39-1 は調査区南西隅付近で検出した。平面はやや不整形な七角形を呈し、検出面から床面までは17~20cmを測る。床面積はベッド状遺構の内側で20.7㎡、ベッド状遺構は21.2㎡である。屋内施設としては、主柱穴、周壁溝、ベッド状遺構と燃焼施設であるイチマル土坑を有する。主柱穴は7基あり、径約20~50cmと幅がある。周壁溝はベッド状遺構の内側と外側にそれぞれ巡り、内側が幅約10cm、外側が幅約20cm、深さを測る。ベッド状遺構の西辺には床面に通じる階段状の段差がみられる。燃焼施設であるイチマル土坑は床面のほぼ中央にマル土坑(SK02)を北側に、イチ土坑(SK01)を南側に配置している。両者の周囲にはそれぞれ盛土による土手が構築されている。以上の特徴から、小柴分類のB3に当たる(小柴2003)。イチ土坑底面のほぼ全面には炭層が広がる。またその短辺両側には径約10cmの小柱穴が1基ずつ穿たれている。マル土坑は土坑の上方と下方で平面形態が異なる。このイチマル土坑については後述するSH39-2のものを再利用している。なお、今回の分析対象となった炭化米は、ベッド状遺構の内側の床面全体からまばらに出土したことを付記しておく。

SH39-1の下には、SH39-2・3として認識した2棟の竪穴建物が重複している。土層断面の観察から、最初にSH39-3が構築され、その後、埋没、あるいは埋戻しという過程を経て、SH39-2、1の順番に新たに建て替えられていたことがわかっている。

次に、最初に構築された SH39-3 についてふれておきたい。当該建物は、部分的な削平を受けているものの、明らかに平面多角形を呈しており、SH39-1 と同様七角形である可能性が高いといえる。床面構築前に、不整形な平面形の掘り込み地業のような痕跡が観察できる。用途は不明であるが、いわゆる下部構造と呼ばれるものと考えられる。床面積は30.0㎡を測る。屋内施設について確実に当該建物に帰属するものとしては、周壁溝とイチマル土坑がある。柱穴については、次段階の SH39-2 に帰属するものとの分別が容易ではなかったという。床面中央付近にあるイチマル土坑は、先出の小柴分類によるB3にあたる。ただ、イチ土坑である SK03がマル土坑の西側に位置することは特異な状況といえ、これまでの和久遺跡の調査例でみると、管見の限りでは1次調査で1例、9次調査でも1例、今回の調査では確認できなかった。そして、その他のほとんどがマル土坑の南側にイチ土坑を配置しているという(小柴2003)。本遺構の用途についてはなお不明な点が多いが、配置という点に着目すると、一種の規範のようなものの存在を想定できよう。この傾向はイチマル土坑を有する播磨の竪穴建物でも一般的にみられるものであるといえる。

最後にSH39-2についてふれておく。一見すると平面形が不整形な円形とも捉えられかねないが、東側の肩についてはSH39-3と共有していることから、本段階においても七角形を志向していると考える。床面積は35.7㎡を測る。屋内施設に関しては、柱穴については先述のようにその帰属が不明確である。ただ、SP04・15~17については本段階のものとする妥当性は高いが、その機能について考えた場合、主柱穴でなく副次的なものであるといえよう。イチマル土坑についてもすでに述べているとおりSH39-1に引き続き使用されているようである。

以上、遺構については現場での観察所見を交えて記載した。次に出土土器についてふれておくことにする。 SH39-1では、床面から遊離した状態、イチ土坑であるSK01、SP06からそれぞれ土器類が出土している (挿図4)。床面から遊離した状態では、短頸壺(挿図6-1)、甕(挿図6-2~5)、高杯(挿図6-6・7)、鉢(挿図6-8・9)が出土した。1 はあまり見かけない器形である。2~4 は概ね同時期のものと思われるが、5 は古式土師器の小平底にもみえる。SK01からは、長頸壺(挿図6-10)、壺(挿図6-11)、小型の壺(挿図6-12)、甕(挿図6-13~16)、高杯(挿図6-17)が出土した。11の壺はやや新相を示し、他の伴出資料よりも5の時期に近い。15は口縁部の形態や胴部上半の張り具合などやや新相を呈しているように思われる。SP06からは、小型壺(挿図6-18)、甕(挿図6-19)が出土した。18の小型壺は当該期に散見されるタイプと思われる。19の甕も違和感はない。

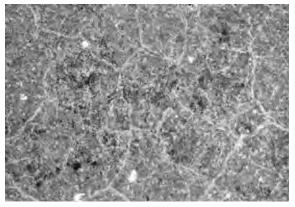
これらと周辺の資料群を比較すると、周世入相遺跡の土坑8・20 (甲斐1990) など、弥生時代後期後葉の指標となりうる資料群とほぼ同時期のものとして捉えられる。

SH39-2からは良好な状態の遺物が出土しなかったため、SH39-3出土遺物についてふれておく。

甕(挿図7-1)、鉢(挿図 $7-2\cdot3$)が、ベッド状遺構の盛土内から出土した。いずれも小片で残存状況がよくないものが多いため、詳細は不明であるが弥生時代後期後半の範疇に収まると思われる。



写真 2 SH39-1 全景 (北から)



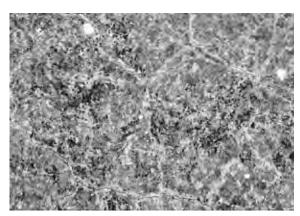
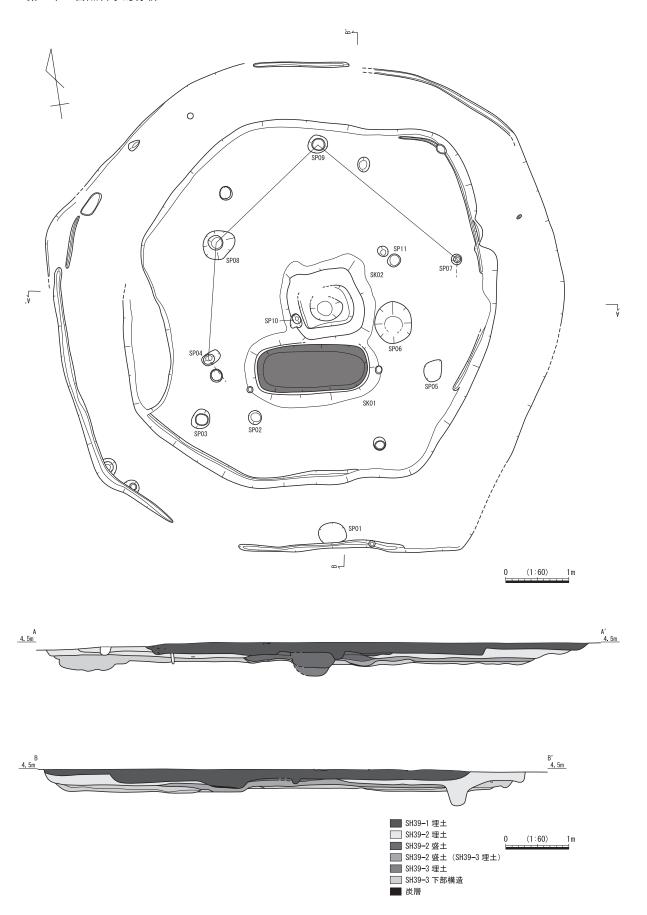
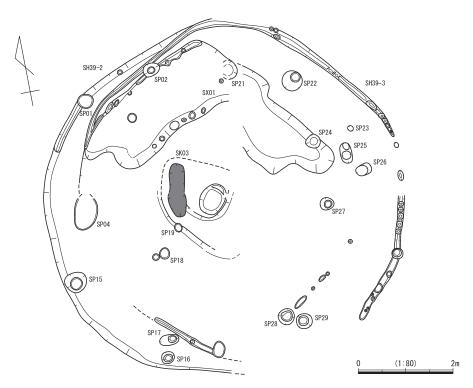


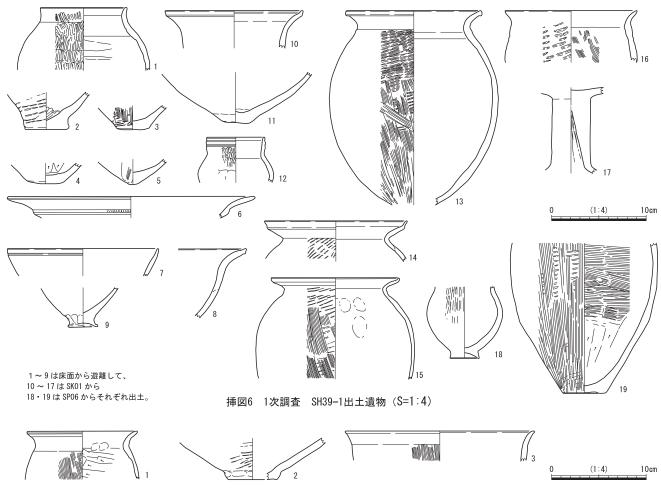
写真3 炭化米出土状況(右は左の詳細)



挿図4 1次調査 SH39-1平面図・断面図 (S=1:60)



挿図5 1次調査 SH39-2・3平面図 (S=1:80)



挿図7 1次調査 SH39-3出土遺物 (S=1:4)

第3節 和久遺跡出土遺物年代測定および樹種鑑定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

和久遺跡(兵庫県姫路市網干区和久)は、弥生時代から古墳時代を中心とする集落遺跡であり、これまでの 発掘調査で、弥生時代から古墳時代の竪穴住居が多数検出されている。

本分析調査では、用材や植物利用、年代に関する情報を得るために、樹種同定、種実同定、放射性炭素年代 測定を実施する。

1. 試料

分析用試料は、No.1 (SI 2)、No.2 (SI 2)、No.3 (1次SH14-3 SP01)、No.4 (1次SH14-3 SP02)、No.5 (1次SH14-3 SP02)、No.6 (1次SH14-3 SP04)、No.7 (1次SH14-3 SP04)、No.8 (1次SH14-3 SP04)、No.9 (1次SH14-3 SP04)、No.10 (1次SH14-3 SP04)、No.11 (SH39-1 床面))の11点である。放射性炭素年代測定は、11点全てについて分析を行う。No.1はa1、a2の2点あるが、a2の方を用いる。樹種同定はNo.1 (a1、a2両方)とNo.2を対象にする。種実同定はNo.11を対象にする。いずれの試料も弥生時代後期(庄内期)に帰属する。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

試料は、周りを削って付着物を除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1 mol/Lである。脆弱な試料は、アルカリの濃度を薄めて処理する(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge 3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径 1 mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14 C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、 14 Cの計数、 13 C濃度 (13 C/ 12 C)、 14 C濃度 (14 C/ 12 C) を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C 6 等)、バックグラウンド試料(IAEA-C 1)の測定も行う。 δ 13 C は試料炭素の 13 C 濃度(13 C/ 12 C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)である。

(2) 樹種同定

炭化材は、木口 (横断面)・柾目 (放射断面)・板目 (接線断面) の各割片を作成する。炭化草本は横断面を作成する。これらを電子顕微鏡で観察する。木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類 (分類群) を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東 (1982)、Wheeler他 (1998)、Richter他 (2006) を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林 (1991) や伊東 (1995,1996,1997,1998,1999) を参考にする。

(3) 種実同定

年代測定を実施する試料(No.11)について実体顕微鏡下で種類を同定し、計測を行う。

			補正年代							樫	年較正	年代							
試料名	性状	方法	(暦年較正用) BP							年	代 値						確率%	Code	e No.
No.1 SI2	炭化材 アカガシ 亜属	AAA (1M)	2050 ± 20 (2048 ± 20)	-27.01 ± 0.26	σ 2 σ	cal cal cal cal	BC BC BC	94 30 11 161	- - -	cal cal cal	BC BC BC	37 21 2 133	2043 1979 1960 2110	- - -	1986 1970 1951 2082	calBP calBP calBP	55.5 6.0 6.7 5.5	YU- 9286	pal- 12033
No.2 SI2	炭化 草本	AaA (0.1M)	2075 ± 20 (2077 ± 20)	-11.21 ±0.25	σ	cal cal cal	BC BC BC	116 149 112	- - -	cal cal cal	AD BC BC	5 141 51	2065 2098 2061	- - -	1945 2090 2000	calBP calBP calBP	89.9 5.9 62.3	YU- 9287	pal- 12034
No.3 1次SH14-3	イネ科 木材	AAA (1M)	1870 ± 20 (1872 ± 20)	-23.58 ±0.25	2 σ σ	cal cal cal cal	AD AD AD	166 81 159 196	- - -	cal cal cal	AD AD AD	45 140 166 208	2115 1869 1792 1754	- - - -	1994 1810 1784 1742	calBP calBP calBP	95.4 57.6 3.8 6.8	YU- 9278	pal- 12025
SP01 No.4		AAA	2020 ± 20	-22.25	2 σ σ	cal cal	AD BC BC	78 46 88	-	cal cal	AD AD BC	215 5 76	1873 1995 2037	-	1736 1946 2025	calBP calBP calBP	95.4 68.2 2.2	YU-	pal-
1次SH14-3 SP02	木材	(1M)	(2020 ± 20)	± 0.21	2 σ σ	cal cal	BC AD BC	56 37 45	-	cal cal	AD AD	30 50	2005 1913 1994	-	1921 1900 1945	calBP calBP	90.5 2.8 68.2	9283	12030
No.5 1次SH14-3 SP02	木材	AAA (1M)	2015 ± 20 (2017 ± 20)	-22.43 ± 0.40	2 σ	cal cal cal	BC BC AD	83 55 37	- - -	cal cal cal	BC AD AD	80 30 51	2032 2004 1914	- - -	2029 1920 1900	calBP calBP calBP	0.4 91.4 3.6	YU- 9280	pal- 12027
No.6 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (1M)	1910 ± 20 (1911 ± 20)	-22.97 ± 0.28	σ 2 σ	cal cal	AD AD	70 99 53	- -	cal cal cal	AD AD	90 124 131	1880 1851 1897	- - -	1860 1827 1820	calBP calBP	31.9 36.3 95.4	YU- 9279	pal- 12026
No.7 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (1M)	$1870 \pm 20 \\ (1870 \pm 20)$	-24.93 ± 0.22	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	83 156 196 80	- - -	cal cal cal	AD AD AD	141 167 209 215	1867 1794 1755 1871	- - -	1809 1783 1742 1735	calBP calBP calBP	54.0 6.2 8.0 95.4	YU- 9284	pal- 12031
No.8 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (1M)	1935 ± 20 (1933 ± 20)	-25.29 ± 0.27	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	30 51 110 24	- - -	cal cal cal	AD AD AD	38 86 115 125	1920 1900 1840 1927	- - -	1913 1865 1835 1825	calBP calBP calBP	6.9 57.3 4.0 95.4	YU- 9285	pal- 12032
No.9 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (1M)	1935 ± 20 (1934 ± 22)	-22.51 ± 0.22	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	29 50 110 23	- - -	cal cal cal	AD AD AD	39 86 115 125	1922 1900 1840 1928	- - -	1912 1865 1835 1825	calBP calBP calBP	9.5 54.8 4.0 95.4	YU- 9282	pal- 12029
No.10 1次SH14-3 SP04	木材	AAA (1M)	1885 ± 20 (1887 ± 20)	-22.36 ± 0.22	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	83 66 192	- - -	cal cal cal	AD AD AD	129 175 211	1868 1885 1759	<u>-</u> -	1821 1776 1740	calBP calBP calBP	68.2 91.7 3.7	YU- 9281	pal- 12028
No.11 SH39-1 床面	炭化米	AaA (0.1M)	1885 ± 20 (1884 ± 20)	-27.01 ± 0.25	σ 2 σ	cal cal cal	AD AD AD	84 68 191	- - -	cal cal cal	AD AD AD	130 176 212	1867 1882 1760	- - -	1820 1775 1739	calBP calBP calBP	68.2 90.3 5.1	YU- 9288	pal- 12035

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

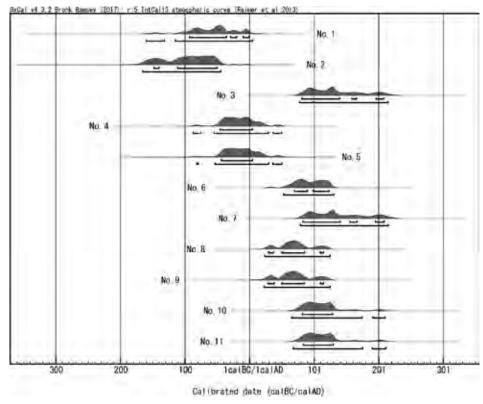
- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68.2%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。 AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データーセットは、Intcall3を使用。 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σが68.2%、 2 σが95.4%である

3. 結果および考察

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表2、挿図8に示す。いずれも試料の状態が良く、年代測定に必要な炭素が得られた。同位体補正を 行った測定値は、No.1が2050 ± 20BP、No.2が2075 ± 20BP、No.3が1870 ± 20BP、No.4が2020 ± 20BP、No.5が 2015 ± 20 BP, No.6%1910 ± 20 BP, No.7%1870 ± 20 BP, No.8%1935 ± 20 BP, No.9%1935 ± 20 BP, No.10%1885 $\pm 20BP$ 、No.11が1885 $\pm 20BP$ である。

暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度 や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、その後訂正された半減期(14Cの半減期5730±40年)を較 正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcall3 (Reimer et al.,2013) を用いる。 2σ の値は、No.1がcalBC161~ AD5、No.2がcalBC166~ BC45、No.3がcalAD78~ AD215、No.4が calBC88~ AD50、No.5が calBC83~ AD51、No.6が calAD53~ AD131、No.7が calAD80~ AD215、No.8が



挿図8 暦年較正結果

calAD24~ AD125、No.9がcalAD23~ AD125、No.10がcalAD66~ AD211、No.11がcalAD68~ AD212、である。 多少ばらつきがあるものの、紀元前 1 世紀~ 2 世紀前半の範囲内にある試料が大半であり、弥生時代後期(庄内期)と考えられている発掘調査所見とも概ね調和的である。

(2) 樹種同定

結果を表 2 に示す。No.1はa 1 、a 2 2 4 ともにアカガシ亜属、No.2はイネ科草本類である。以下に検出された試料の解剖学的所見や用途等について述べる。

・コナラ属アカガシ亜属 (Quercus subgen. Cyclobalanopsis)

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、 壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で1~15細胞高である。複合放射組織は、写真の範囲内 には存在しない(存在する場所もある)。

アカガシ亜属は、遺跡周辺に普通にみられる樹木で、容易に採取である。加工しにくいが、重硬なため、農耕具や器具材、建築材として使われることが多い。当時の用材が何らかの火熱を受けて炭化したと思われる。

・イネ科草本類(Gramineae)

No.	遺構		分類群	状態		個数	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ×幅	長さ/幅	粒大·粒形
11	SH39-1	床面	イネ	完形	炭化	6	1	4.40	2.45	1.99	10.78	1.80	短粒極小型
11	SH39-1	床面	イネ	完形	炭化	-	2	4.81	2.66	1.84	12.79	1.81	短粒小型
11	SH39-1	床面	イネ	完形	炭化	-	3	4.41	2.99	2.14	13.19	1.47	短粒小型
11	SH39-1	床面	イネ	完形	炭化	-	4	4.56	2.86	1.91	13.04	1.59	短粒小型
11	SH39-1	床面	イネ	完形	炭化	-	5	4.52	2.60	1.72	11.75	1.74	短粒極小型
11	SH39-1	床面	イネ	完形	炭化	-	6	4.39	2.63	1.93	11.55	1.67	短粒極小型

表3 炭化米試料の計測値

である。桿の太さから草丈数十センチの小型のC4植物イネ科(たとえばオヒシバとかエノコログサの類)と思われる。C4植物は温暖で乾燥した場所において光合成を効率よく行うよう進化した植物である。本遺跡周辺は降水量が少なく温暖な気候であり、C4植物のイネ科は人家近くや田畑の雑草として普通に生育していたと思われる。

(3) 種実同定

結果を計測結果とともに表 3 に示す。炭化米の粒大・粒形 (佐藤,1988) は、3 個が短粒・極小型、3 個が短 粒・小型であった。邦産の炭化米としては、標準的である (佐藤,1988)。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181. 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176. 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201. 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166. 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216. 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース.海青社,449p.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCall3 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0 –50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴 リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

佐藤敏也,1988,弥生のイネ.弥生文化の研究2生業,金関 恕・佐原 真編,雄山閣,97-111.

島地 謙·伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

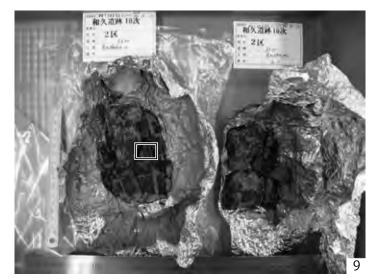
Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon, 19, 355–363. Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

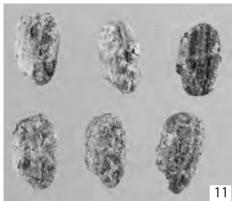
注) 計測はデジタルノギスを使用、粒大・粒形は佐藤 (1988) に基づく。



- 1.礎板(転用)試料採取後(No.3;SH14-3) 2.礎板試料採取後(No.6;SH14-3) 3.礎板試料採取後(No.5;SH14-3) 4.礎板試料採取後(No.10;SH14-3) 5.礎板(転用)試料採取後(No.9;SH14-3) 6.礎板試料採取後(No.4;SH14-3)
- 7.礎板試料採取後(No.7;SH14-3) 8.礎板(転用)試料採取後(No.8;SH14-3)

写真4 年代測定試料(1)

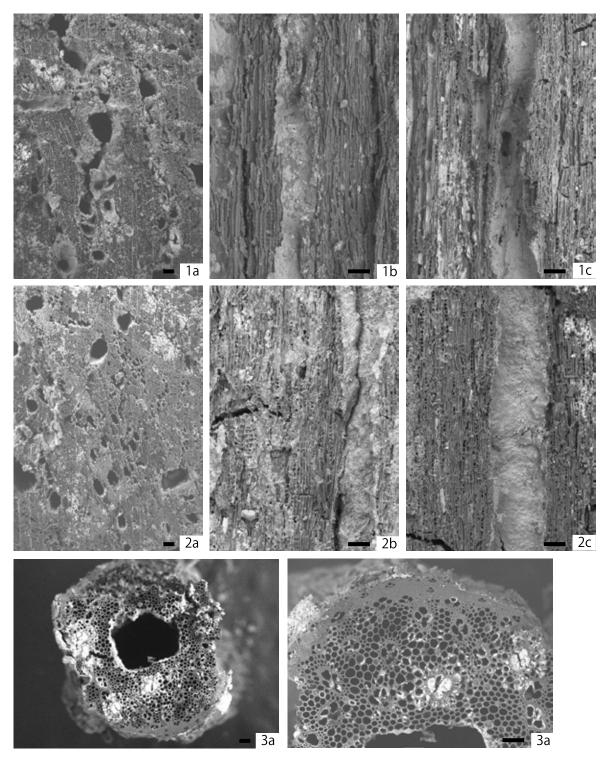




2mm



9.炭化材試料採取前(No.1;SI2) 10.炭化草本試料採取前(No.2;SI2) 11.炭化米(No.11;SH39-1) 写真5 年代測定試料(2)



1.アカガシ亜属(No.1 a1) 2.アカガシ亜属(No.1 a2) 3.イネ科草本類(No.2)

a:木口 b:柾目 c:板目 スケールは100 μ m

写真6 炭化材

第4節 和久遺跡第1次調査SH14-3出土礎板について

前節で行った分析の試料のうち、第1次調査SH14-3(以下、SH14-3とする。)については、主に『姫路市史』 第七巻下(小柴2011)において出土した土器の一部が紹介されている。本節においては、まず、試料となった 礎板についてふれたのちに、出土した遺構と伴出した遺物についても概観しておきたい。

挿図 9-3 (写真 7-1) はSP01出土で、長さ33.9cm、幅18.6cm、厚さ3.8cm~5.0cmを測る。板目取りである。 長辺のほぼ中央に、幅5.5cm、深さ0.5~1.0cmの彫り込みがみられる。

挿図 $9-4\cdot 5$ (写真 7-5)は SP02出土である。断面二段掘り状を呈するピットで、4が下段に、5が上段に配置されていた。4は長辺23cm、短辺6.4cm、厚さ約2.5cmを測る。板目取りである。5は長辺約23cm、短辺8.5cm、厚さ1.8~2.2cmを測る。板目取りである。4よりも整った板状を呈する。上端は欠損しているが、下端については4と同様上下面から削りを加えている。

挿図 9-6 (写真 7-2)・7・8 (写真 7-4)・9 (写真 7-3)・10 (写真 7-6) はSP04出土である。出土位置は、6が最上部で、その下位に7・8が併置され、9が最下部に据えられていた。なお、10の詳細な出土状況は不明である。6 は長辺36.7cm、短辺10.5~12.0cm、厚さ2.7~3.4cmを測る。板目取りである。下端は先述の4・5と同様、上下面から斜めに削られている。7 は幅10.8~12.0cm、長さ37.2cm、厚さ1.5~2.6cmを測る。面に僅かに加工痕と思われる擦痕がみえるが、板状を呈する以外のことは不明と言わざるを得ない。8・9 は鳥形木製品で、板の側面や小口を切り込むことにより形作られており、平面的に鳥の胴体を象ったと考えられる。胴体部分には羽根を接合したような痕跡はみられない。両者を比較すると、8 は細部に未だ粗さを残すのに対し、9 はより整美な印象を受ける。法量について、8 は全長34.2cm、厚さは3.0~4.8cmと、尾から頭部にかけて厚みを増す。また、頭部は幅9.0cm、長さ13.2cm、胴部は長さ8.5cm、幅4.7~6.0cm、尾は長さ12.5cm、幅9.1cmをそれぞれ測る。表面には僅かに擦痕が残る。9 は全長38.1cm、厚さは概ね2.7cmで、8 とは異なり一定した厚みを保っている。また、頭部は長さ18.5cm、幅10.0cm、胴部は長さ9.0cm、幅5.2cm、尾は長さ11.1cm、幅10.2cmをそれぞれ測る。表面に明瞭な加工痕はみえないが、尾の端部は上面からのみ削りを加えている。10は長さ21.9cm、幅約6 cm、厚さ2.0cmを測る板状を呈する。両小口側は斜めに削られている。

以上が、今回分析した礎板であるが、7を除く全てに加工痕を確認した。その多くが板状の部材の両小口を 斜めに削るというものであった。また、8・9のように鳥形木製品の転用材と思われる部材がみられたことは、 木製品の出土数が少ない姫路市内においては重要な例となる。

次に、上述の木製礎板が出土したSH14-3と、その廃絶後に構築されたSH14-1についてみておきたい。

SH14-3 は調査区中程やや東寄りで検出した。平面は1辺約5.2mの方形を呈し、検出面から床面までの深さは約40cmを測る。床面積はベッド状遺構の内側が14.1㎡、ベッド状遺構は12.3㎡である。屋内施設としては、主柱穴、周壁溝、ベッド状遺構と燃焼施設であるイチマル土坑を有する。主柱穴は4基あり、それぞれ長軸約35cm、短軸約20cmの平面楕円形を呈する。このうちSP01とSP02については、礎板が2枚あり、その間には拳大から人頭大の円礫が充填されていた。周壁溝はベッド状遺構の外側のみに巡り、幅約10cmを測る。盛土によるベッド状遺構は北西側で途切れており、全周しない。床面からの高さは12cmである。燃焼施設であるイチマル土坑は床面のほぼ中央にマル土坑(SK01)を、イチ土坑をその西側に配置している。このような配置は和久遺跡の既往調査例においては珍しい。盛土による土手はマル土坑の周囲にのみ構築されている。小柴分類のB5に当たる(小柴2003)。イチ土坑は明瞭な土坑状の掘り込みを有さず、炭層の広がりで認識した。マル土坑の平面形は不整形な隅丸方形で、長軸55~75cm、短軸30~40cm、深さ45cmを測る。床面下には深さ約10cmの平面不整形な下部構造を有する。

SH14-3 埋没後にほぼ重複する位置でSH14-2 が、そしてSH14-2 埋没後にほぼ同位置でSH14-1 という 3 棟の竪穴建物が連続して構築されている。

次に、床面から一括性の高い状況を示す遺物が出土したSH14-1について述べることにする。SH14-1は1辺が5.5m~6.2mの平面方形を呈する。検出面から床面までの深さは約10cmである。床面積は36.2㎡である。屋内施設としては、主柱穴、周壁溝と燃焼施設であるイチマル土坑を有する。主柱穴は2基あり、それぞれ長軸約45cm、短軸約30cmの不整な楕円形を呈する。周壁溝は外側に巡り、幅約20cmを測る。燃焼施設であるイチマル土坑は床面のほぼ中央にマル土坑を、イチ土坑をその西側に配置している。このような配置はSH14-3同様、和久遺跡の既往調査例においては珍しい。なお、このイチマル土坑は土手を持たず、小柴分類のB5に当たる(小柴2003)。また、イチ土坑は明瞭な掘り込みを持たず、炭層の広がりで認識した。マル土坑の平面形は不整形な隅丸方形で、長軸105cm、短軸95cm、深さ12cmを測る。

以上、遺構については現場での観察所見を交えて記載した。次に出土土器についてふれておくことにする。 SH14-3では、主に床面から遊離した状態で出土している。複合口縁壺(挿図11-1)、甕(挿図11-2・3)、小型の鉢(挿図11-4・5)、鉢(挿図11-6)、性格不明の土製品(挿図11-7)である。1はやや中膨れする口縁部を有する。2は外面に僅かに右上がりのタタキが残存する。3は底部の粘土塊の充填が不十分なために上げ底状になっている。2と比すとやや古層を呈するように思われる。図面は掲載していないが、丸底を呈する小片が伴出していたことも付記しておく。4・5について、4は細部の調整が甘くやや古層を呈するのに対し、5は細部の稜線がやや鋭く新相を呈するようにみえる。両者はともに器壁が粗いため、調整は不明である。6は外面上半に3条の浅い沈線を有する。上半は横位の、下半はやや左上がり斜位の匙面状のミガキを施す。7は紐通しの孔が穿たれた把手と思われる。本来は長軸が上下となり、長胴、もしくは筒状の部位を有する器種から剝落したものと考えられる。

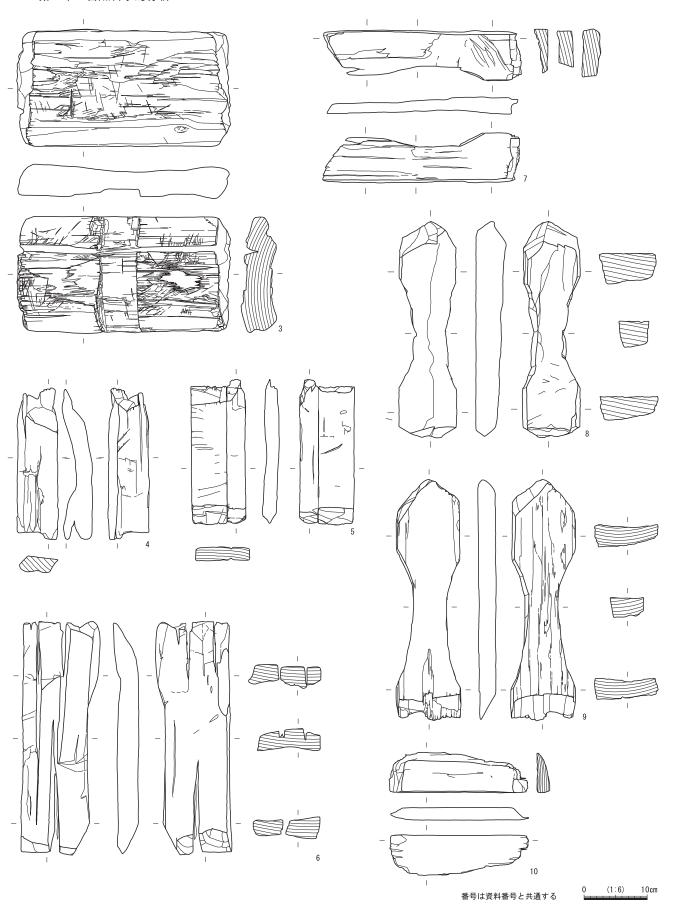
これらのうち、1や4・5については川島遺跡20-溝出土の土器群との共通性が看守できるが、3・4・6のようにやや古層を呈するものも含んでおり、庄内式の中でも前半に位置付けるのが妥当ではないかと思われる。

次にSH14-3 埋没後に構築されたSH14-1 の出土土器についてみることにする。本遺構では、床面上で一括性を保った状態で出土した一群(挿図12-1~10)と床面から遊離した状態で出土した一群(挿図12-11~24)がある。1~4 は庄内型甕である。1 は比較的直線的に伸びる口縁部を有し、端部は僅かに摘むことで外面に直立気味の面を持つ。胴部上半から肩部においては横方向の細密なタタキがみえる。肩部は張らない。内面調整は不明である。2 は口縁部中程が僅かに膨れ気味に伸びる。端部は上下に僅かに拡張し外傾面を有する。胴部上半から肩部においては外面には、横方向の細密なタタキがみえる。内面調整について胴部上半は反時計回りでやや左上がりのケズリの後に、時計回りの右上がりケズリを施すが、口縁部の屈曲部までは至らない。3 は長くやや内湾気味に伸びる口縁部形態で、端部は丸く収めており面を持たない。外面調整は不明な一方、内面はわずかにケズリが残り、口縁部の屈曲部に至る。4 は中程が膨れる口縁部形態で、端部は丸く収めている。調整について、外面はヨコナデがみえる。内面は不明であるが、口縁部の屈曲部の稜線がしっかりとしているのは、ケズリによるものと考えられる。1~4 は肉眼観察から地元産と思われる。5 は器壁がやや厚く、ごく僅かに外反する口縁部を有し、端部は上方に僅かに摘み上げることで外傾面を形成する。外面には接合痕が残る。調整について、外面はごく僅かに右上がりのタタキが残り、内面は反時計回りのほぼ横方向のケズリがみえる。6 は口径17.0cm、残存高は27.3cmを測る。底部は稜線の甘い平底、もしくは丸底であると思われ、本来の器高もさほど変わらないと推定できる。口縁部は中程が僅かに膨れ、内湾する。端部は肥厚する。外面の

ヨコナデは強く肩部上半まで至る。内面は左上がりのハケメが微細に残る。胴部最大径は器高の中央付近に位置し、さほど強くは張らない。外面調整は右上がりのやや比較的細かいタタキの後に胴部最大径付近までは上下方向のピッチの短いハケメが切る。内面は下から上方向に掻き上げるようなケズリが胴部最大径付近まで至り、それ以上はやや左上がり方向、肩部付近では横方向へと部位毎に向きを変える。口縁部の形状や全体的な器形から、長越遺跡住居址15や鵤遺跡1次調査の「土師の溝」(中溝1973)等の資料に類例がみられ、庄内式併行期でもやや新相を示すと考えられる。7・8は有稜高杯である。7は稜線を境に口縁部と杯部の底面が明瞭に分かれるタイプで、口縁部は直線的に長く伸びる。残存しないが、杯部の底面は内湾せずにほぼ水平であったと思われる。本資料はその稜線の接合箇所で剝離しているようである。庄内式併行期の中でも半ばに位置づけられる。8はほぼ完形に復元できた。口縁部は外反しながらやや大きく広がっている。杯部下半は内湾気味にやや深さを持つ。脚部は中実である。脚部は直線的に広がるが底径はさほど大きくない。7とほぼ同時期の所産と位置づけられるが、杯についてみると、例えば北山遺跡土坑25例に類似する形態がみられることから所属時期についてはなお検討の余地を残す。9は台付椀と呼ぶべき器形を呈する。類例は少ない。椀部・脚台部の内外面に沈線状のミガキがみえる。7・8と同時期の遺構に類例がみられるため、ここでは同時期のものとして捉えておくことにする。10は小型器台である。器壁が粗いため微細なハケメが残るのみである。7~9とほぼ同時期に類例がみられる。

次に床面から遊離して出土した一群についてみておく。11~13は甕である。11の器壁は粗く詳細は不明である。12は中程でやや膨れる口縁部形態が特徴で、内外面に丁寧な横なでを施す。肩部のタタキは細密である。
庄内形甕の可能性がある。13は庄内形甕である。直線的に伸びる口縁部で、端部はやや斜め上方に摘み上げることで内傾する端面を有する。12・13はいずれも地元産と思われる。14は有段の鉢である。先述の鵤遺跡 1 次調査の「土師の溝」に類例がみえ、やや新相を示す。15~20は高杯である。15は脚部内面に絞り目を残すが器壁は粗くその他の調整は不明である。16の器壁も粗いが、脚部頂部に刺突痕がみえる。杯部に脚部を貼付けている可能性がある。17は杯部中央に凹みがあり、弥生土器に通じる製作技法を残していると思われる。18は同一個体の杯部底部と脚裾部である。杯部には脚部を挿入して接合した痕跡がみえる。19は器壁が粗いが、外面に細いミガキが微細に残る。20も僅かに調整が残る程度であるが、内面に二次被熱の痕跡がみえるという。21は小型器台の脚部である。外面調整はみえないが、内面にはナデ・オサエが残る。作りはやや粗い。22は小型丸底土器である。器壁が粗いためか、口縁部の屈曲部がいまだ甘くみえる。23は鉢である。外面に右上がりのタタキがみえる。鉢部内面上端には横方向のミガキを施すことにより口縁部の屈曲部を形成しているように思われる。24は山陰型甑形土器である。横位の半環状の把手が対称的な位置に一対付けられている。把手の断面形は長方形を呈し、底部の形態は先述の把手直下から内湾し緩やかに窄まっており、突帯はめぐらさない。器面の調整について、外面は主に縦方向のハケメ、内面は下から上方向のケズリである。

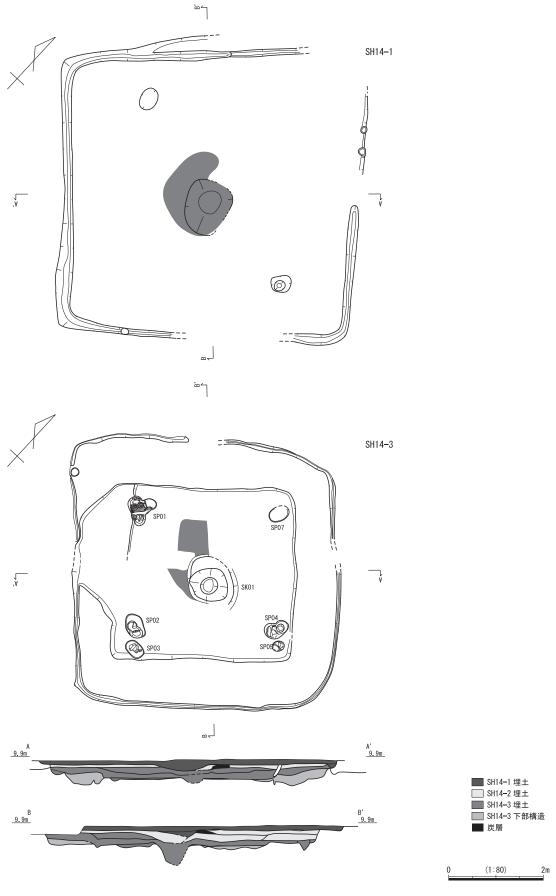
第4章 自然科学的分析



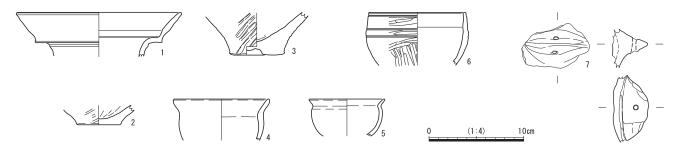
挿図9 1次調査 SH14-3出土礎板 (S=1:6)



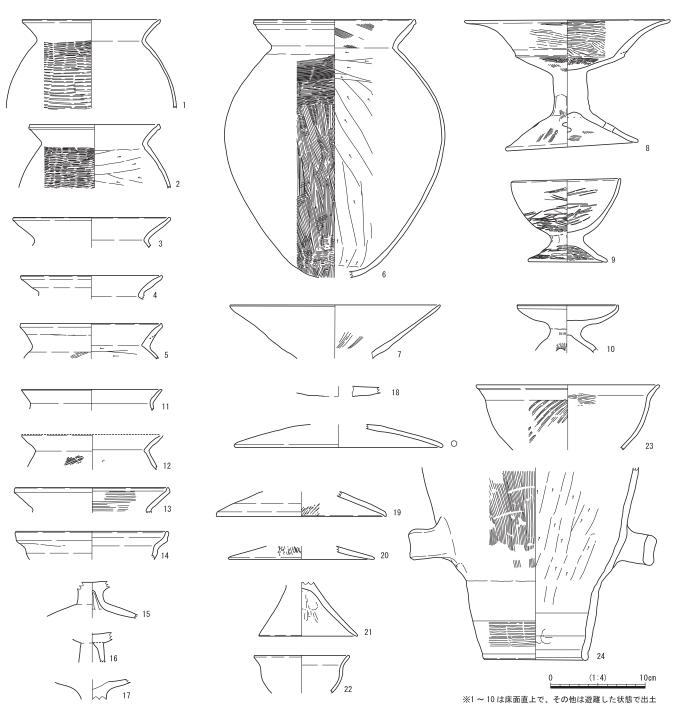
写真 7 1 次調査 SH14-3 出土礎板



插図10 1次調査 SH14-1・14-3平面図・断面図 (S=1:80)



挿図11 1次調査 SH14-3出土土器 (S=1:4)



挿図12 1次調査 SH14-1出土土器 (S=1:4)

第5章 まとめ

第1節 竪穴建物跡の変遷

今回検出した竪穴建物跡についての概要は、先述したとおりであるが、それらの変遷についてまとめる。

弥生時代中期中葉

SK1を検出した。建物跡の可能性もわずかに考えられるSK1は、現代の撹乱や他の遺構により削平を受け、その規模・形状は判然としない。第9次調査では、弥生時代中期後半の遺物が共伴する竪穴建物跡が検出されている。そのため後述するように、弥生時代中期後葉には、和久遺跡において集落形成が行われていることは確実であるが、その時期が中期中葉まで遡れるかは今回の調査では言及できない。

弥生時代中期後葉

 $SI1 \sim 303$ 棟を検出した。平面形態はいずれも円形を呈する。第9次調査で検出した弥生時代中期とされる SH9の出土遺物ともおよそ同時期の遺物が $SI1 \sim 3$ で出土している。このことから和久遺跡の集落の形成が弥生時代中期後葉であることを追認することができた。建物跡以外にも土坑も検出していることから、集落の営為活動をうかがうことができる。

弥生時代後期後葉

 $SI4 \cdot 502$ 棟を検出した。第 $1 \cdot 9$ 次調査を含めると34棟となる。 $SI4 \cdot 5$ は、第9次調査で述べられているように互いに重複することのない円形、もしくは一回り小さい方形の平面形態を呈しており、これまでの成果を追認する成果であった。

古墳時代(庄内式Ⅲ)

SI6~9の4棟を検出した。平面形態はいずれも方形を呈する。

古墳時代(庄内式Ⅲ~Ⅳ)

SI10~16の7棟を検出した。平面形態はいずれも方形を呈する。

古墳時代 (N~V)

当該時期の竪穴建物跡は確認できなかったが、その他の遺構としては、SD 4 を検出した。

以上、時期ごとに竪穴建物跡を主にした遺構の変遷を述べてきた。その結果、庄内期になるにつれ、建物数が増える傾向を確認することができる。この傾向は、第9次調査の成果をおよそ追認するものである。また弥生時代後期後葉と庄内期での建物数の差は著しく、この段階において和久遺跡に何らかの画期があったことは、疑いないものと考えられる。

第2節 SD2について

今回検出したSD2は、先述したように調査区西部を南北に貫く溝であり、埋土中層では溝中央部から東法面にかけて土器が集中して出土する状況であった。ここではそれらの要素も含めた上でSD2の性格について若干の考察を行う。

調査区の地形をみると、竪穴建物跡を多数検出した範囲周辺の標高は約4.1m前後である。これに対して SD 2 に近づくにつれて、標高は徐々に低くなり SD 2 東肩際で3.87m、SD 2 以西はさらに低く3.81mとなる。この地形の高低差は、地形が下がりはじめる SD 2 以東約1.0m辺りから SD 3 にかけて、須恵器などが混入する堆積層を検出したことからも明らかである。加えて遺構分布に注目すると、比較的標高が高い範囲で竪穴建

物跡などの遺構が展開し、SD 2 に近づくにつれて遺構が少なくなる傾向にある。SD 2 以西に関しては、調査範囲がわずかな範囲ではあるが、遺構が皆無であったことも注目すべきことであろう。これに付加して、今回の調査区から南西20mの地点で、平成17年度に行われた試掘確認 3 次調査 Tr.8(図版 3)では、SD 2 と同時期・同規模とみられる溝が検出されたとともに、溝の西側では低湿地が検出されている。SD 2 と平成17年度に検出された溝が一連のものと想定すれば SD 2 以西で遺構が皆無であったことと整合する。

これらを勘案すると、SD2は集落域の内と外とを隔てる区画施設としての溝であったと考えられる。また SD2と平行に伸びるSD3については遺物がないため、時期は判然としないが、同時期に一体のものとして機能していた可能性も考えられ、今後の調査への課題となる。

第3節 中世以降の遺構について

中世以降の遺構は、畝溝群・SB1~4・SA1・SD6を検出した。畝溝群は、その形状・規模から、田畑の 畝溝痕跡である。SB1~3・SA1の主軸方向はいずれもおよそ真北方向を向いている。またこれらを構成する柱穴の規模はおよそ同等であることから大幅な時期差があるとは考えにくい。SB4の主軸方向は北から約15度東へ振る。そのためSB1~3・SA1とは時期が異なるものと考えられる。SD6は、先に述べたとおり東 西方向に延び、調査区内で直角に折れ曲がって北方向へと延びる溝である。平成17年に行われた試掘確認2次 調査Tr.5(図版3)で検出された溝がSD6の北延長部で検出されており、断面形状・出土遺物からSD6と 一連の溝であると考えられる。基幹水路のような性格が想定できる。

なお中世段階の和久遺跡の遺構を考えるにあたり、歴史学的視点から和久遺跡周辺の状況に触れておく。中世段階の播磨では、荘園が設立されるようになり、姫路市域においても院政期になると増加するようになる(姫路市2018)。このうち、和久遺跡が位置する揖東郡、その西側の揖西郡には、鳥羽院・後白河院などに関連する王家領が展開した。和久遺跡一帯は、福井荘と呼ばれる荘園に含まれる。福井荘は、現在の姫路市勝原区・大津区・網干区から揖保郡太子町糸井付近まで広がる荘園であり(姫路市2018)、その規模もさることながら福井荘関連史料も豊富に残ることから、姫路市域を代表する荘園とされる。

福井荘は、寿永2年(1183)に平家が都落ちをするまでは平家領であった。しかし都落ち後は、後白河院が進退するようになり、荘園領主は、高野山を経て神護寺となった。なお同時期には、梶原景時、吉川氏が地頭として入部し、武家勢力による支配系譜がみられるようになるなど、中世段階の福井壮は、様々な権力支配の下に位置していたといえよう。

今回調査で検出した遺構が、上述した中世福井荘に直接関連するものと評価することはできない。しかし、 今後の調査成果の蓄積を待って、今回検出した4棟の掘立柱建物跡や水路が、中世福井荘の空間復元に繋がる 可能性は充分に考えられる。今後の周辺における調査成果に期待したい。

第4節 おわりに

今回の調査では、弥生時代中期後葉から古墳時代初頭にかけての竪穴建物跡を検出するとともに、集落域の 西限を区画すると考えられる溝を検出した。また集落形成時期の上限年代を従来よりも遡らせる可能性をもつ 弥生時代中期中葉の遺物を伴う遺構も検出した。第1次・第9次調査の成果を着実に追認する成果とともに、 新たな成果を若干ながらでも得られたことの意義は大きい。

集落域を区画する可能性がある溝の検出と、溝(SD2)と竪穴建物跡が集中するエリアの標高差により、 微高地上に集落が営まれていることは確実である。今後は、水田など食料生産に関する遺構などが今回検出

第5章 まとめ

した溝(SD2)以西において検出されることが期待される。検出されれば、遺跡の空間復元が一挙に前進し、 近隣に立地する関ノ口遺跡・前田遺跡との比較をもって、和久遺跡の本質にさらに迫ることが可能になろう。 今後の調査成果を期待してまとめとしたい。

引用・参考文献

秋山浩三2006「吉備・近畿の交流と土器」『古式土師器の年代学』(財)大阪府文化財センター

浅田芳朗・今里幾次『播磨橋詰遺跡発掘調査略報』

池田征弘編1999 『清水遺跡-県道桑原北山揖保川緊急道路整備事業に伴う発掘調査報告-』兵庫県文化財調査報告第183冊 兵庫県教育委員会

石野博信1971 「川島・20溝の土師器群」櫃本誠一編『川島・立岡遺跡(本文編)』太子町教育委員会

市村慎太郎2012「布留式と画期」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会

今里幾次1943「姫路市之郷彌生式遺蹟の研究-播磨国彌生式土器の様式分類-」『古代文化』第十四巻 第9號

今里幾次1969a「播磨弥生式土器の動態(一)」『考古学研究』第15巻第4号 考古学研究会

今里幾次1969b「播磨弥生式土器の動態 (二)」『考古学研究』第16巻第1号 考古学研究会

今里幾次1977「播磨の雲母土器」『考古学研究』第22巻第4号 考古学研究会

今里幾次1978「第2章 長越遺跡調査前史」松下勝編『播磨・長越遺跡 - 本文編 - 』兵庫県文化財調査報告書 第12冊 兵庫県教育委員会

今里幾次1980a『播磨考古学研究』 今里幾次論文集刊行会

岩崎直也1984「四国系土器群の伴出」『大阪文化誌』第17号 財団法人大阪文化財センター

上田千佳穂1999 「Ⅲ 土器からみた地域性」 『研究輯録』 IX 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター

大久保徹也1990「第10節 下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」藤吉史郎・西村尋文編『下川津遺跡 - 第Ⅱ分冊- 瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財センター・本州四国連絡橋公団

大久保徹也2006「讃岐及び周辺地域の前方後円墳成立時期の土器様相」『古式土師器の年代学』(財) 大阪府文 化財センター

置田雅昭1985「弥生土器から土師器へ」『月刊考古学ジャーナル』 9 月号(第二百五十二号) ニューサイエンス社

大谷輝彦 2003 「2 和久遺跡 (2次)」

甲斐昭光編1990 『周世入相遺跡 - 県道高尾 - 有年横尾線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 』 兵庫県文化財調査報告書第70冊 兵庫県教育委員会

香芝市二上山博物館編2006『シンポジウム『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』資料集』ふたかみ邪馬 台国シンポジウム 6 香芝市教育委員会

香芝市二上山博物館編2011『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』株式会社学生社

岸本一宏2001「北東播磨の弥生後期土器」松岡千寿編『荒田神社裏遺跡 -主要地方加美山崎線緊急道路整備 事業に伴う発掘調査報告-』兵庫県文化財調査報告 第221冊 兵庫県教育委員会

岸本道昭1995「2.494-土器群の実態と性格」『養久山・前地遺跡-龍野広域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化 財発掘調査報告書-』龍野市文化財調査報告15 龍野市教育委員会

岸本道昭1995「庄内播磨型甕発生説考」『庄内式土器研究-庄内式併行期の土器生産とその動き-』X 庄内式

土器研究会

- 岸本道昭編2001 『北山遺跡-1988・1989年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』 龍野市文 化財調査報告23 龍野市教育委員会
- 國下多美樹1999「乙訓地域における土器交流拠点」『庄内式土器研究-庄内式併行期の土器生産とその動き-「庄 内式併行期の土器交流拠点」』 XX 庄内式土器研究
- 甲元眞之・寺沢薫編2011『弥生時代 上』講座日本の考古学5 青木書店
- 甲元眞之・寺沢薫編2011『弥生時代 下』講座日本の考古学6 青木書店
- 小柴治子2003「「¦○(いちまる)型中央土坑」の変遷―和久遺跡検出資料の検討―」『続文化財学論集』 文 化財学論集刊行会
- 小柴治子2010「Y22) 和久遺跡」姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』第七巻下 資料編 考古 姫路市 酒井龍-1975「第6章「付載」 - 和泉における弥生式~土師器の移行過程について - 認識論的作業仮説として」『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会
- 酒井龍一1976「和泉における『伝統式 V 様式』に関する覚え書」『豊中・古池遺跡 発掘調査概報 そのⅢ』豊中・ 古池遺跡調査会
- 狭川真一編2001 『旧練兵場遺跡』善通寺教育委員会・(財) 元興寺文化財研究所
- 篠宮正1996「第3節 弥生時代中期中頃から後半の土器」兵庫県埋蔵文化財調査事務所編『神戸市西区玉津田中遺跡-第6分冊-』兵庫県文化財調査報告 第135-6冊 兵庫県教育委員会
- 篠宮正編2002『五反田遺跡 県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』兵庫県文化 財調査報告 第227冊 兵庫県教育委員会
- 篠宮正2007a「2.東播磨地域の編年」長友朋子編『弥生土器集成と編年 -播磨編-』六一書房
- 篠宮正2007b「弥生土器の分類」篠宮正編『川戸遺跡(主) 宍粟香寺線単独道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』
- 兵庫県文化財調査報告第314冊 兵庫県教育委員会
- 菅原康夫1987「吉野川流域における弥生時代終末期の文化相」森浩一編『考古学と地域文化』同志社大学考古 学シリーズⅢ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 菅原康夫1992「弥生時代終末期社会の特質」森浩一編『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 菅原康夫・梅木謙一編2000『弥生土器の様式と編年』四国編 株式会社木耳社
- 杉井健1994「山陰型甑型土器と山陰地方」『古文化談叢』第33集 九州古文化研究会
- 高木真光1981「7中田遺跡<刑部遺跡>関西電力K.K.地中線埋設工事に伴う埋蔵文化財調査概要」『昭和53・ 54年度 埋蔵文化財発掘調査年報』八尾市文化財調査報告7 八尾市教育委員会
- 高野陽子編2003 『佐山遺跡』 京都府遺跡調査報告書第33冊<本文編> (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 高野陽子2004「共同研究 庄内式甕の出現」『京都府埋蔵文化財情報』第92号 財団法人京都府埋蔵文化財センター
- 高野陽子2010「山城の庄内式甕をめぐる二、三の問題」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 財団法人京都府文 化財センター
- 田中琢1965「布留式以前」『考古学研究』第12卷第2号 考古学研究会

第5章 まとめ

田中元浩2005「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第20号 有限責任中間法 人日本老古学協会

次山淳1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会 坪井清足1956『岡山県笠岡市高島遺蹟調査報告』笠岡市教育委員会

都出比呂志1974「古墳出現前夜の集団関係-淀川水系を中心に-」『考古学研究会』第20巻第4号 考古学研究会

寺沢薫1980「大和におけるいわゆる第五様式土器の細別と二・三の問題」寺沢薫編『奈良市六条山遺跡』奈良 県立橿原考古学研究所

寺沢薫1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」寺沢薫編『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

友久伸子1990「弥生時代の播磨型装飾壺 – その文様にみる地域色 – 」『今里幾次先生古希記念播磨考古学論叢』 今里幾次先生古希記念論文集刊行会

長友朋子2004「近畿における編年研究の経緯と現状」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集 埋蔵文化財研究会

長友朋子・田中元浩2007「3. 西播磨地域の土器編年」大手前大学史学研究所編『弥生土器集成と編年 - 播磨編 - 『六一書房

西岡達哉編1989『稲木遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第六冊 香川県埋蔵文化 財研究会

原口昭三1968「大阪府松原市上田町遺跡の調査」『大阪府立島上高等学校研究紀要』復刊第3号 大阪府立島 上高等学校

播磨学研究所編2010『播磨から読み解く邪馬台国 最新考古学事情』 神戸新聞総合出版センター

姬路市2018『姬路市史』第七卷 下 資料編 考古

姫路市教育委員会 2013『和久遺跡第9次発掘調査報告書-ツカザキ病院新館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査-』 姫路百年編集委員会編1990『姫路百年』姫路市

櫃本誠一編1981『川島・立岡遺跡(本文編)』 太子町教育委員会

古本寛1995「中期後半の弥生土器について」『尾崎遺跡Ⅱ - 市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』

龍野市文化財調査報告14 龍野市教育委員会

古本寛2001「播磨系弥生鉢形土器の地域性について - 地域制の位置指標として - 」『ひょうご考古』第8号 兵庫考古研究会

松下勝1971「檀特山遺跡確認調查報告」『川島·立岡遺跡』 太子町教育委員会

松下勝編1976『播磨・長越遺跡-本分編-』兵庫県文化財報告第12冊 兵庫県教育委員会

森岡秀人1985「土器の交流-西日本-」『月刊考古学ジャーナル』 9 月号(第二百五十二号) ニューサイエンス社

村上泰樹編1990『上構遺跡 - 揖保川流域下水道建設に伴う発掘調査報告 - 』 兵庫県文化財調査報告 第69冊 兵庫県教育委員会

山田清朝編1997『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告書第165冊 兵庫県教育委員会

山田清朝編2002 『共同住宅造成にともなう日輪寺遺跡発掘調査報告書 日輪寺遺跡第4次~第7次調査』神戸 市教育委員会

- 山本三郎1971「第2節 播磨中期弥生式土器の実態-土坑出土土器を中心に-」櫃本誠一編『川島・立岡遺跡 (本文編)』 太子町教育委員会
- 山本三郎・田井恭一編1990『播磨大中遺跡の研究』播磨町教育委員会
- 山本三郎編1995『赤穂市 堂山遺跡-山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告 XVI-本文編』兵庫県文化 財調査報告第142冊 兵庫県教育委員会
- 山本博利·秋枝芳編『八代深田遺跡 姫路市八代字深田 』姫路市文化財調査報告 VI 姫路市教育委員会 米田敏幸1986「中田1丁目39番地出土土器」『八尾市文化財紀要』 2 八尾市教育委員会文化財室
- 湯村功編2002『鳥取県気高郡青谷町 青谷上寺地遺跡-一般県道青谷停車場井手線地方特定道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 II-』鳥取県教育庁文化財団調査報告書74 財団法人 鳥取県教育文化財団 渡辺昇他編1987『法林寺北遺跡』兵庫県文化財調査報告 第49冊 兵庫県教育委員会
- 渡辺昇編1990『上構遺跡-揖保川流域下水道建設工事に伴う発掘調査報告-』兵庫県文化財調査報告第69冊 兵庫県教育委員会
- 渡辺昇1996「長越遺跡の庄内式土器について-播磨での庄内式土器編年と播磨型甕存在の意義」『庄内式土器研究-庄内式併行期の土器生産とその動き-「摂津・播磨を中心とする庄内併行期の動き」』XI 庄内式土器研究
- 渡辺昇1999「庄内期の播磨の集落」森岡秀人・渡辺昇編『庄内式土器研究』XXI 庄内式土器研究会
- 渡辺昇編2010『姫路市所在 長越遺跡Ⅱ (飯田湯田遺跡) (二) 船場川水系船場川都市一般河川改修事業に伴う発掘調査報告書 』兵庫県文化財調査報告書 第375冊 兵庫県教育委員会
- 渡辺昇編2011 『揖保郡太子町 沖代遺跡-一般県道網干停車場新舞子線道路改良事業に伴う発掘調査報告書-』 兵庫県文化財調査報告第391冊 兵庫県教育委員会
- 渡辺昇編2012『姫路市 長越遺跡Ⅲ (飯田湯田遺跡)』兵庫県文化財調査報告第432冊 兵庫県教育委員会

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
1	弥生土器	広口壺	SK1	(36.2)	(48.2)	(32.0)	外面: 口縁部端面上下端に2段の刻目、頸部下端に指頭圧痕突帯4条、肩部に櫛描直線文 と波状文、胴部最大径付近はヨコ位ミガキ、下半は左上がりミガキ。内面:口縁部内面に指 頭圧痕突帯2条、胴部は左上がりのハケメ。
2	弥生土器	広口壺	SK2	(17.6)	-	_	外面:口縁部は緩やかに折り曲げ、端部にハケメ工具による刺突・3個一対の円形浮文。受部内面に3条の貼付突帯。頸部外面に断面三角形の貼付突帯3条。外面タテ位、内面ヨコ位ミガキ。
3	弥生土器	広口壺	SK2	(15.2)	_	_	口縁部は緩やかに折り曲げ、端部上端に刻目。口縁部内面に断面三角形貼付突帯2条。頸部 外面に断面三角形貼付突帯3条、肩部外面に櫛描直線文・波状文。受部内面に突帯1条、4 個一対の円形浮文1組。2孔一対の紐穴2組。頸部外面タテ位ハケメ、同内面ヨコ位ミガキ。
4	弥生土器	広口壺	SK2	(12.4)	-	-	頸部僅かに内湾しながら立ち上がる。口縁端部下方にやや拡張、端面にヘラ描斜格子文。頸 肩部に横描直線文。頸部外面タテ位ミガキ、同内面しぼり痕。
5	弥生土器	壺	SK2	_	8.4	-	外面タテ位ハケメ、内面ナデ・オサエ。底部外面板状工具によるナデ・ユビオサエ。やや上 げ底状。
6	弥生土器	壺	SK2	_	(14.4)	-	内外面器壁が粗く調整不明。
7	弥生土器	甕	SK2	_	_	_	口縁端部は上方を摘み上げる。内外面器壁が粗く調整不明。
8	弥生土器	甕	SK2	_	_	_	口縁端部は上方へ摘み上げる。外面上半は左上がりのハケメ。内面は主に右上がりのハケメ。
9	弥生土器	甕	SK2	-	(5.8)	-	外面タテ位ミガキ、内面ケズリの後に底部付近はオサエ。底部中央部に焼成前穿孔。
10	弥生土器	高杯	SK2	_	_	_	内外面器壁が粗く調整不明。
11	弥生土器	高杯	SK2		(13.2)	_	外面主にタテ位のピッチの短いハケメ。内面は不明。
12	弥生土器	広口壺	SI1	_	_	_	口縁部は緩やかに折り曲げ、端部は無文。口縁部内面に刻目をもつ突帯 2 条。
13	弥生土器	甕	SI1	-	(5.8)	-	外面にタテ位ミガキが微細に残存。内面は奇癖が粗く調整不明。
14	弥生土器	高杯	SI1				外面は奇癖が粗く調整不明。内面はヨコ位のケズリ。
15	弥生土器	台付鉢	SI1	_	_	_	鉢部外面は主にタテ位のミガキ、脚部との境界付近に断面三角形の突帯 2条。鉢部内面は主にヨコ位のミガキ。脚部内面はナデ・オサエ。
16	古式土師器	鉢	SK95	_	_	-	外面形態の説明、胴部外面は右上がりのタタキ、口縁部下に接合痕みえる。口縁部内面は反 時計回りのハケメ。胴部内面はおもにタテ位のミガキ。
17	古式土師器	小型器台	SK95	(9.6)	(11.2)	(8.0)	受部・脚部外面は器壁が粗く調整不明。
18 19	石器 弥生土器	環状石斧 広口壺	SI1 SI2	_			半分欠損。中央付近に両面からの穿孔の痕跡。外縁部にやや粗い剥離面と敲打痕。 外面僅かにタテ位ハケメ残存。内面器壁が粗く調整不明。頸部下半に指頭圧痕突帯。
20	弥生土器	IALISE.	SI2	_	_	_	アル国連が化メノロバノアプスけ。 PS国命至が祖、嗣室小号。 現のドキに指頭圧痕失布。 口縁端部上端に刻目。その下に指頭圧痕突帯 2 条。内面はナデ・オサエ。下端は接合面で剥離。
21	弥生土器	壺	SI2	_	(10.0)	_	外面主にタテ位のミガキ、底部側面は粘土円盤接合に伴うオサエ。内面ナデ・オサエ。破面 で底部の粘土円盤観察可。
22	弥生土器	高杯	SI2	_	_	_	受部下半のミガキはタテ位→ヨコ位。内面は器壁が粗く調整不明。
23	弥生土器	高杯	SI2	_	_	_	外面ヨコ位ミガキ、内面ヨコナデ。
24	石器	石錘	SI2	_	-	_	外縁部に幅1.3~1.8mmの敲打痕。
25	石器	削器	SI2	_	_	_	
26	弥生土器	高杯	SI3	-	-	-	内外面:主にヨコ位のミガキ。
27	弥生土器	甕	SK3	15.1	6.0	27.0	外面:タテ位〜右上がりのハケメの後にタテ位ミガキ。内面:器壁が粗く調整不明。
28	弥生土器	把手	SK3	_	-	_	外面:把手下に斜格子文。器壁はタテ位ミガキ、把手は微細なタテ位ハケメの後に粗いミガキ。内面:把手の挿込み痕が内面で観察可。器壁が粗く調整不明。
29	弥生土器	広口壺	SK4	_	_	_	短い頸部外面にタテ位ハケメの後に断面三角形突帯 2 条貼付。口縁部は緩やかに折り曲げる。頸部内面はヨコ位のミガキ。
30	弥生土器	広口壺	SK4	_	_	_	口縁端部は下方に拡張、端面に 5 条の擬凹線文上に、タテ 4 個の円形浮文 2 列残存。
31	弥生土器	広口壺	SK4	_	_	_	口緑端部は下方に拡張、端面に4条の擬凹線文上に2本一対の棒状浮文2対残存。口縁部 内面に2条の刻目突帯2条。
32	弥生土器	広口壺	SK4	_	_	-	形態は31に近い。端面に円形浮文4個と棒状浮文。
33	弥生土器	壺	SK4	_	(9.6)	_	外面はタテ位ミガキ、底部側面はオサエ。内面は左上がりのハケメ。底部円盤の痕跡僅かに 観察可。
34	弥生土器	無頸壺	SK4	_	_	_	外面断面三角形突帯 2 条貼付。頂部に刻目。口縁部頂部に円形浮文 1 個残存。内面器壁が粗く調整不明。
35	弥生土器	雍	SK4	_	_	_	緩やかに折り曲げた口縁部の端部は上方に僅かに摘み出す。内外面の調整は不明。
36	弥生土器	甕	SK4	_	_	_	口縁部の形状は35に近い。外面はタテ位〜左上がりのハケメ。内面は左上がりのハケメ。 内外面でhハケメの原体が異なる。
37	弥生土器	甕	SK4	_	_	_	外面はタテ位〜左上がりのハケメ。内面肩部付近は板状工具によるナデつけ、それ以下はタテ位ケズリ。
38	弥生土器	甕	SK4	_	-	_	外面はタテ位ハケメの後にハケメの原体による左下がりの刺突。内面タテ位ハケメ、外面調整・施文に伴うオサエ。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真図版	備考
10YR5/4にぶい黄褐色 10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		口縁部内面に2孔一対の 紐孔3対残存。
10YR7/3にぶい黄橙色 7.5YR8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm大の長石粒、赤褐色粒を含む。	24		口縁部内面に2孔一対の 紐穴4対残存。
7.5YR7/4にぶい橙色 7.5YR8/4浅黄橙色	軟質	径1.5mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	24		口縁部内面に2孔一対の 紐孔2対残存。
10YR8/2灰白色 7.5YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
10YR7/6明黄褐色 7.5YR8/4浅黄橙色	良好	径 1 \sim 5 mm大の石英粒・長石粒・灰色粒を多く含む。	24		底部に黒斑。
2.5YR5/8明赤褐色 5YR6/8橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。比較的精良。	24		
10YR8/2灰白色 7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
7.5YR8/2灰白色 7.5YR8/6浅黄橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒を少量含む。同大黒色粒(角閃石?)をやや多く含む。	24		
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm以下の角閃石粒・石英粒・長石粒を多く含む。	24		外面に黒斑。
10YR6/8赤橙色	良好	径 1 mm 大の石英粒を含む。	24		
10R5/6赤色	軟質	径 1 mm大の石英粒を少量含む。	24		口妇如中王15四月 17 时
10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	鉱物粒をほとんど含まない。	24		口縁部内面に紐孔1孔残 存。
10YR7/3にぶい黄橙色 10R5/4赤褐色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
7.5YR7/3にぶい橙色	良好	径 2 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	24		
2.5GY5/1オリーブ灰色 10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を含む。	24		
10YR7/4にぶい黄橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	24		
10YR8/3浅黄橙色	良好	径1mm以下の赤褐色粒を少量含む。比較的精良。	24		脚部に円孔4孔残存。
10)(00 (2)	±2	径9.8cm、厚さ2.7cm。	25		未製品か。170.7g。
10YR8/3浅黄橙色 10YR8/3浅黄橙色	良好 軟質	径2.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。 鉱物粒をほとんど含まない。	25 25		
10YR8/6黄橙色 7.5YR8/3浅黄橙色	良好	径 1 mm以下の角閃石粒・赤褐色粒を少量含む。	25		
10YR8/2灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の赤褐色粒を少量含む。	25		口縁部に黒斑。
2.5YR6/6橙色 2.5Y7/3浅黄色		径 2 mm以下の石英粒・長石粒を含む。	25		外面に黒斑。
2.5Y7/2灰黄色		長径5.1cm、短径4.4cm、厚さ3.7cm。	25		1247 a
		長さ2.9cm、幅5.3cm、厚さ0.5cm。サヌカイト製。	25		124.7 g 。 7.6 g 。
2.5Y8/2灰白色 2.5YR6/8橙色	軟質	径1mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	25		7.090
10YR8/2灰白色 10YR8/3浅黄橙色	軟質	径0.5mm大の石英粒・長石粒を含む。	25		内面コゲ。
5YR7/6橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含む。	25		
10YR6/1褐灰色	軟質	径0.5mm大の石英粒・長石粒・雲母片を少量含む。	25		
7.5Y8/3浅黄橙色 10YR8/2灰白色	良好	径0.5mm大の石英粒・長石粒を少量含む。	25		口縁端部に黒斑。
10YR7/3にぶい黄橙色 2.5Y7/3浅黄色	軟質	径 $1\sim3\mathrm{mm}$ 大の石英粒・長石粒を多く含む。	25		口縁部内面に2孔一対の 紐孔1対残存。
5Y4/1灰色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を多く含む。	25		1410 - 23/2013 0
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR6/2灰黄褐色	良好	径2mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	25		
10YR8/3浅黄橙色 2.5Y8/2灰白色	良好	径0.5mm大の石英粒・長石粒を少量含む。	25		
7.5YR8/6浅黄橙色 5YR7/8橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	25		
10YR8/3浅黄橙色 5YR8/4淡橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・雲母片を多く含む。	25		
2.5Y8/2灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径2mm大の石英粒・長石粒・角閃石を含む。角閃石は自形をなす。	25		
10YR8/1灰白色 10YR8/4浅黄橙色	軟質	径0.5mm石英粒・長石粒をやや多く含む。	25		外面下半にスス付着。

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
39	弥生土器	甕	SK4	_	(6.0)	-	外面タテ位ミガキ、底部付近はヨコナデ。底面は乱方向のナデ。内面は器壁が粗く調整不明。
40	弥生土器	甕	SK4	_	5.2	-	内外面ともに器壁が粗いが、外面には僅かにタテ位ミガキが残存。
41	弥生土器	高杯	SK4	_	_	_	外面:主に放射状のミガキ。内面:主にヨコ位のミガキ。
42	弥生土器	高杯	SK4	_	11.6	-	外面:一次調整のタテ位ハケメの後に同方向のミガキ。内面:裾部は反時計回りのケズリ。 内外面の調整の後に底部端部をヨコナデ。長方形透かし孔対向二対あり。
43	弥生土器	高杯	SK4	-	-	-	外面:三角形の透かし孔が未貫通。内面:ヨコナデ。
44	弥生土器	甕	SK4	19.9	7.8	36.4	外面:同部上半は維持調整のタテ位ハケメが残り、下半は同方向で3cm幅単位のミガキ。 内面:下半は板状工具によるナデつけ、最大径付近はタテ位ハケメ、肩部は左上がりのハケメ。両者で異なる原体を使用。底部中央に焼成後穿孔。
45	弥生土器	甕	SK4	_	5.8	_	外面:タテ位ミガキ。内面:ナデ・オサエ。底部中央に焼成後穿孔。
46	石器	打製石鏃	SK4				長さ2.6cm、茎幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.3g。平基式。サヌカイト製(金山産、視認)
47	石器	打製石鏃	SK4				長さ2.1cm、茎幅1.6cm~、厚さ0.45cm、重さ1.7g。平基式。基部折損。サヌカイト製(金 山産、視認)
48	弥生土器	広口壺	SK5	_	8.7	-	胴部最大径付近で、強く張る。外面:胴部下半ヨコ位ミガキ、上半は一次調整のタテ位ハケメ の後に櫛状工具による直線文・波状文・斜格子文・刺突文を施す。内面:下半は板状工具によ るナデつけ、最大径付近はナデ・オサエ、上半は左上がりのケズリ、顎肩部はナデ・オサエ。
49	弥生土器	甕	SK5	34.8	-	_	外面:口縁部は強いヨコナデ、胴部上半は一次調整のタテ位ハケメが残る、胴部中程は左上がりのミガキが僅かに残る。内面:胴部上半はタテ位ハケメの後に左上がりのハケメ、胴部下半は下→上方向のケズリ。
50	弥生土器	無頸壺	SK6	(16.6)	_	_	直線的に伸びる胴部に内側に拡張する口縁端部を持つ。外面:胴部の一次調整はタテ位ハケメ。胴部最上部の4条の凹線文間には細かな刻目、2孔一対の円孔一対残存、その下位にはハケメ原体による刺突文、円形浮文。内面:器壁が粗く調整不明。
51	弥生土器	甕	SK6	_	_	_	外面:主にタテ位ハケメ。内面:左下がりのハケメ。内外面ともに口縁部ヨコナデ。
52	弥生土器	高杯	SK6	_	(14.0)	-	脚部上端付近で杯部との接合痕確認(分割成形)。外面:脚部はタテ位ハケメ。底部の端面はヨコ位ケズリ。内面:時計回りのケズリ。
53	弥生土器	高杯	SK6	_	_	-	外面:一次調整のタテ位ハケメの後のミガキが僅かに残存。それ以外は内外面ともに器壁が粗く調整不明。
54	弥生土器	蓋	SK6	5.1	(16.4)	7.2	外面:一次調整のハケメの後にナデ。頂部は乱方向のケズリの後にナデ。内面:下半はナデオサエ、上半は反時計回りのケズリ。
55	弥生土器	長頸壺	SI4	14.6	4.3	24.5	器壁は全体的に厚いく、胴部はやや張る。外面:胴部上半に一次調整のタテ位ハケメ残る、 同部下半から肩部付近にかけて左上がり(時計回り)のハケメ。頸部でく僅かに左上がり のピッチの短い一次調整のハケメ。頸部・胴部の一次調整を頸券部界から開始することで、 でく僅かな稜線となる。内面:胴部については観察不可、頸部はケズリが僅かに残存。終 2 cm幅の粘土帯の接合痕みえる。口縁部はわずかに外反させ、丁寧なヨコナデにより成形。
56	弥生土器	長頸壺	SI4	_	6.1	-	胴部は56よりも丸みを帯びる。外面:一次調整の右上がり平行タタキが僅かに残り、その後にタテ位ハケメ。内面:幅約3~4cmの粘土帯の接合痕みえる。胴部半ばはヨコ位ハケメ。それ以外はナデ・オサエ。
57	弥生土器	広口壺	SI4	-	-	-	内外面とも器壁が粗く調整不明。緩やかに曲げた口縁部端面には板状工具による左下がりの刺突文。
58	弥生土器	壺	SI4	-	_	-	内外面ともに器壁が粗いが、外面には僅かにタテ位ミガキが残存。
59	弥生土器	壺	SI4	_	3.8	_	外面:ナデつけ。内面:クモノ巣状のハケメ。
60	弥生土器	甕	SI4	(14.6)	_	_	内外面ともに器壁が粗いが、外面には僅かに右上がり平行タタキが残存。
61	弥生土器	甕	SI4	_	(5.4)	_	外面:タテ位ハケメが僅かに残る。内面:主に左上がりのケズリ。
62	弥生土器	甕	SI4	_	3.6	_	底部やや上げ底状。外面:平行タタキ。内面:主にタテ位ケズリの後に体部付近は底部をチ 填に伴う粗いナデ・オサエ・
63	弥生土器	高杯	SI4	_	_	_	内外面ともに器壁が粗いが、外面はハケメが、内面はケズリの後にミガキがごく僅かに残る。
64	弥生土器	高杯	SI4	_	11.2	_	杯部底面に粘土塊充填。おそらく対向方向の円孔2個残存。外面:裾部下端付近では一次調整のタテ位ハケメが残る、それ以上はタテ位のミガキ。内面:上半のしぼり目を外面調整に伴うオサエがナデ状に切る。
65	弥生土器	高杯	SI4	_	_	-	やや膨らむがほぼ円筒形の脚部。上端に杯部円盤の接合痕跡僅かに残る。外面:器壁が粗く 調整不明。内面:粘土帯の接合痕みえる。ヨコ位ケズリ(時計回り)の単位は不明。
66	弥生土器	高杯	SI4	_	_	-	対向する円孔4個。外面:タテ位のハケメ。内面:断続的なヨコ位ハケメ。
67	弥生土器	高杯	SI4	_	_		内外面ともに器壁が粗く調整不明。
68	弥生土器	鉢	SI4	_	_	-	外面:僅かにタテ位ハケメが残る。内面:粘土帯の接合痕を外面調整に伴うナデ・オサエか切る。
69	弥生土器	器台	SI4	_	_	(23.5)	対向する長方形透かし孔 4 個。外面:タテ位ミガキ。内面:粘土帯の接合痕を外面調整伴ラナデ・オサエが切る。
70	弥生土器	甕	SI5	_	(6.6)	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
71	弥生土器	器台	SI5	_	-	_	外面:金属製と思われる鋭利なヘラ状工具による鋸歯文Rを施す。内面:ナデ。
72	古式土師器	壺	SI6	_	3.0	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 備考
2.5Y8/1灰白色 2.5Y6/1黄灰色	軟質	径2.5mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含む。	25	
10YR6/3にぶい黄橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径1.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	25	
7.5YR8/4浅黄橙色 2.5Y8/3淡黄色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	26	
7.5Y8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒を多く、角閃石粒・赤褐色粒を少量含む。	26	
5YR橙色 7.5YR浅黄橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	26	
10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm以下の石英粒・赤褐色粒を多く含む。	26	
7.5YR5/3にぶい褐色~10YR7/1灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を多く含む。	26 26	
			26	
7.5YR7/4にぶい橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	26	
			26	
10YR8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	26	
10YR3/6にぶい黄橙色 10YR2/6灰黄褐色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	26	
10YR8/3浅黄色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	26	
10YR8/1灰白色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を少量、径 1 mm大の角閃石粒をやや多く含む。	26	
5YR6/3にぶい橙色 5YR6/2灰褐色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・赤褐色粒を多く、同大長石粒を少量含む。	26	
7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径2.0cm以下の長石粒・赤褐色を多く、同大石英粒をそれらよりも少なく含む。	27	
7.5YR8/4浅黄橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	27	
10YR8/2灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27	
2.5Y8/1灰白色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27	
10YR3/1黒褐色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒(両者が噛合うものもあり)・角閃石粒	27	外来系(讃岐産?)
10YR5/4にぶい黄褐色		を多く含む。		7171711 (820-2012)
7.5YR8/6浅黄橙色 7.5YR7/3にぶい橙色	良好良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。 径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27 27	
7.5YR5/1褐灰色 7.5YR5/1褐灰色	良好	径 3 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	27	
7.5YR6/4にぶい橙色 2.5Y7/2灰黄色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒をやや多く含む。	27	
10YR8/3浅黄橙色 10YR8/2灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27	外面黑斑。
10YR8/3浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	27	
7.5YR5/2灰褐色 7.5YR6/4にぶい橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。角閃石粒を含む。	27	内外面黑斑。
2.5Y8/3浅黄色	良好	径 1 mmの石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27	
5Y7/1灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	27	内面に籾圧痕。
2.5Y8/3淡黄色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	27	
2.5Y7/1灰白色 2.5Y2/1黒色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を含む。	27	外面スス付着。
7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27	外面に僅かに赤色顔料残存 か。
10YR5/1褐灰色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。赤褐色粒を含む。	27	

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
73	弥生土器	甕	SP349	_	3.3	_	内外面ともに器壁が粗いが、内面底部付近に粘土充填に伴う粗いオサエが僅かに残る。
74	弥生土器	広口壺	SP345	(13.6)	_	_	外面:口縁部端面にヘラ状工具による左下がりの刺突文とその上に3個一対の円形浮文3対残存。頸部はタテ位ハケメ。内面は器壁が粗く調整不明。
75	古式土師器	高杯	SP345	_	_	_	下端に受部との接合痕。内外面:タテ位のミガキ。
76	古式土師器	高杯	SP345		_	_	外面:器壁が粗く調整不明。内面:ナデ。
77	古式土師器	装飾器台	SP345	(28.8)	_	-	外面:口縁部端面に金属器と思われる鋭利なヘラ状工具による鋸歯文Rと蕨手状の浮文、端面上端には半裁竹管文。受部外面は同心円状の平行タタキとそれ切る粗いハケメ。内面:受部内面外縁に半裁竹管文、口縁端面と同様の鋸歯文R、受部中央付近に貼付突帯、その外側に半裁竹管文、内側に斜線文、2次調整は放射状のミガキ。
78	弥生土器	鉢	SP468	(13.4)	-	_	外面:頭肩部以下は幅約2.5cm単位のタテ位ミガキ、口縁部に接合痕。内面:口縁部は丁寧なヨコナデ、胴部はやや粗いナデ・オサエ。
79	古式土師器	甕	SI6	-	_	_	外折した口縁部の中程は僅かに膨れる。外面:肩部に細密な平行タタキ。内面:肩部ヨコ位 ケズリの後にヨコ位ハケメ。口縁部に僅かにヨコ位ハケメ残る。内外面ともに口縁部に丁寧 なヨコナデ。
80	古式土師器	甕	SI7	_	_	_	外反する口縁部の端部を上下に僅かに拡張する。外面:肩部にタテ位ハケメ。内面:器壁が 粗く調整不明。
81	古式土師器	甕	SI7	_	_	_	口縁端部は情報に摘み出し、端部に面を持つ。内外面ともに器壁が粗く調整不明。
82	古式土師器	甕	SI7	_	-	_	外面:右上がりの平行タタキ。内面:粗いナデ・オサエ。
83	古式土師器	甕	SI7	_	(3.1)	_	外面:右上がりの平行タタキ。底部周辺は粘土塊充填に伴うナデ・オサエ。
84	古式土師器	甕	SI7	_	(4.0)	-	外面:右上がりのやや細かい平行タタキ。内面:クモノ巣状ハケメ。
85	古式土師器	有孔鉢	SI7	_	-	-	外面:右上がりの平行タタキ。内面:蒸気孔部分はノミ状工具により内面側から穿孔。
86	古式土師器	鉢	SI7	_	-	_	頸部付近で折り曲げた口縁部は緩やかに外反する。外面:肩部は主にタテ位ハケメ。内面: 主にヨコナデ。
87	古式土師器	鉢	SI7	_	_	_	内外面ともに外面にタテ位ハケメが僅かに残存。
88	古式土師器	脚台	SI7		(5.3)	_	内外面ともに、脚台部分の接合に伴うナデ・オサエ。
89	古式土師器	鉢	SI7 SP473	13.8	-	_	外面:器壁が粗く調整不明。内面:上半の調整は不明、下半は主にタテ位ハケメ、底部付近 はクモノ巣状ハケメ。
90	古式土師器	高杯	SI7 SP470	_	_	-	内外面ともにヨコ位のミガキが僅かに残る。
91	古式土師器	甕	SI7	_	_	_	外面:口縁部右上がりの平行タタキによるタタキ出し。内面:主にヨコナデ。
92	古式土師器	甕	SI7	-	-	-	外面:肩部板状工具によるヨコナデ、口縁部ヨコナデ。内面:肩部は器壁が粗く調整不明。
93	古式土師器	甕	SI7	_	(3.6)	-	外面:胴部下半は右上がりの平行タタキ、底部付近オサエ。内面:クモノ巣状ハケメ。
94	古式土師器?	壺	SI9	_	2.2	-	外面:胴部は右上がり〜ヨコ位の平行タタキ。内面:底部付近はナデ・オサエ、胴部は器壁 が粗く調整不明。
95	古式土師器	複合口縁壺	SI9	(19.6)	_	31.0	底部は残存していないが丸底の可能性。外面:口縁部はヨコナデ、頸部は器壁が粗く調整不明、 胴部はヨコ位の後にタテ位のハケメ。内面: 頸部はナデ・オサエ、胴部は削りの痕跡が僅かに残る。
96	古式土師器	壺	SI9	-	-	-	底部丸底。底部付近からヨコ位の平行タタキ。内面:板状工具によるナデつけ。
97	弥生土器	高杯	SI9	_	-	-	外面:タテ位のミガキ。内面:ヨコ位の削りの後にナデ・オサエ。
98	古式土師器	小型丸底壺	SI9	(9.9)	-	(14.2)	外面:口縁部は一次調整の左上がリハケメの後にタテ位の沈線状ミガキ、胴部は一次調整のタテ位〜左上がリハケメの後に胴部下半はヨコ位の沈線状ミガキ、底部付近は左上がりの沈線状ミガキ。内面:口縁部はタテ位沈線状ミガキ、肩部は外面調整に伴うナデ・オサエ、胴部下半はヨコ位ハケメ。
99	古式土師器	甕	SI9	(16.6)	-	-	□縁部は中程でわずかに膨れ外反する。外面:□縁部は強いヨコナデ、胴部は一次調整の右上がりハケメの後にヨコ位ハケメ。内面:□縁部はヨコ位ハケメの後に強いヨコナデ、胴部時計回りヨコ位~右上がりのケズリ。
100	古式土師器	鉢	SI9	(39.6)	_	_	外面:鉢部は左上がりのハケメの後に下半のみ同方向のミガキ。内面:鉢部上端はヨコ位ハケメが僅かに残るが、大半は左上がりのハケメ、口縁部は左上がりのハケメ。
101	古式土師器	壺	SI10	_	_	_	底部粘土円盤の接合痕観察可。外面:胴部下半は板状工具によるナデつけ、底部はタタキ。 内面:ナデ・オサエ。
102	古式土師器	鉢	SI10	(7.7)	(3.8)	7.2	外面:胴部中程は板状工具によるナデつけ、口縁部はヨコナデ、高台部は接合に伴うナデ・ オサエ。内面:粗いナデ・オサエ。
103	古式土師器	甕	SK62	_	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
104	古式土師器	甕	SK62	_	_	_	外面:胴部は不定方向のナデ、口縁部はヨコナデ。内面:ヨコ位ミガキ。
105	古式土師器	獲	SK431	14.5	_		口縁部の接合痕観察可、胴部最大径はやや上方に偏る。外面:口縁部叩き出し、胴部は右上がりの粗い連続ラセンタタキ。内面:口縁部は口縁部叩き出しに伴うナデ・オサエ。胴部は板状工具によるナデつけ。
106	古式土師器	甕	SK431	-	(3.6)	-	外面:胴部右上がりの連続ラセンタタキ。内面:板状工具によるナデつけ。
107	古式土師器	甕	SK431	_	-	_	内外面ともに器壁が粗いが、胴部外面に平行タタキが、同部内面にケズリがわずかに残存。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 備考
10YR6/3にぶい黄橙色 7.5YR8/6浅黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	27	
10YR8/3浅黄橙色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む	27	
2.5YR3/1暗赤灰色 5YR4/1褐灰色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む角閃石粒を含む。	27	
7.5YR7/6橙色	軟質	径 2 mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27	
10YR8/3浅黄橙色 10YR7/4にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・雲母片・茶褐色粒を含む。比較的精良。	27	
10YR7/6明黄褐色 10YR7/4にぶい黄橙色	良好	径 2 \sim 3 mm大の石英粒、径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27	
7.5YR6/1褐灰色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	27	
10YR8/2灰白色	軟質	径0.5mm以下の赤褐色粒をやや多く含む。	28	
10YR8/2灰白色	不良	径 2 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	28	
2.5Y2/3黒褐色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	28	
10YR5/1褐灰色 10YR7/3にぶい黄橙色	不良	径3mm以下の石英粒・長石粒・雲母片を多く含む。	28	
10YR5/2灰黄褐色 2.5YR6/4にぶい橙色	軟質	径3mm以下の石英粒・長石粒を含む。	28	
2.5Y7/2灰黄色 2.5Y7/1灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	28	
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR8/3浅黄橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	28	
10YR8/4浅黄橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径3mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒・赤褐色粒を含む。	28	
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	28	
2.5Y6/4にぶい黄色 10YR8/3浅黄橙色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	28	
7.5YR8/4浅黄橙色 10YR8/2灰白色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・雲母片を含む。	28	
2.5Y6/1灰黄色	良好	径 1 mm大の石英粒、0.5mm大の長石粒をそれぞれ少量含む。	28	
2.5Y7/3浅黄色 2.5Y8/3淡黄色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒・黒褐色粒を少量 含む。	28	
7.5YR4/1褐灰色 7.5YR7/4にぶい橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	28	
10YR4/7にぶい黄橙色 7.5YR6/8浅黄橙色	良好	径 2 mm大の石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く含む。	28	
10YR7/2鈍い黄橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	28	胴部上半にスス付着。
2.5Y7/2灰黄色 7.5YR7/6橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	28	
10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒、径 2 mm以下の雲母片・黒褐色粒を含む。	28	裾部に円孔 1 個。
10YR6/3にぶい黄橙色 10YR6/4にぶい黄橙色	甘	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・褐色粒(チャートか?)を少量含むが 比較的精良。	28	
10YR6/2灰黄褐色 2.5Y7/2灰黄色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・灰色粒を含むが精良。	28	
10YR6/1褐灰色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	28	外面スス付着。
2.5Y8/1灰白色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を少量含む。	28	
10YR灰黄褐色6/2 10YR7/3にぶい黄橙色7/3	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・雲母片・褐色粒を含む。	28	
10YR7/3にぶい黄橙色 5YR6/4にぶい橙色	甘	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	28	
5Y7/1灰白色 2.5Y6/1黄灰色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	28	
2.5Y8/1灰白色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	28	106と同一個体。
10YR7/1灰白色 10YR8/2灰白色	甘	105と同じ	28	105と同一個体。
2.5Y4/1黄灰色 2.5Y5/2暗灰黄色~2.5Y7/2灰黄色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・黒褐色粒・赤褐色粒を含む。	28	

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
108	古式土師器	甕	SK431	_	2.1	_	外面:ナデ。内面:ナデ・オサエ。
109	古式土師器	甕	SK431	_	1.6	-	底部小さい平底。外面:ナデ。内面:ナデ・オサエ。内面は器壁が粗く調整不明。
110	古式土師器	鉢	SI11	(12.0)	4.0	6.2	口縁部の成形は粗いため擬口縁状となり不整形な波状を呈する。外面:上半は粗いナデ、底部付近はオサエが加わる。内面:成形後に板状工具による不十分なナデつけ。
111	古式土師器	壺	SK110	_	5.7	-	外面:タテ位ハケメ。内面:クモノ巣状ハケメ。
112	古式土師器?	甕	SK110	_	_	_	口縁部は僅かに上方に摘み出す。外面:口縁端部下端に刻目。胴部上半は主にタテ位ハケメ。 内面:ナデ・オサエ。
113	古式土師器	甕	SK110	_	_	-	口縁端部は僅かに外傾し、端部は上方に摘み出す。外面:肩部は平行タタキ、口縁部はヨコナデ。内面:肩部は外面調整に伴うオサエ。
114	古式土師器	鉢	SK110	(11.1)	_	_	口縁部は丁寧なヨコナデによる調整を施されていないために不整形な波状を呈する。外面: 右上がりの平行タタキ。内面:やや左上がりのハケメ。
115	古式土師器	鉢	SI11	_	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明であるが、内面に粘土帯の接合痕が見える。
116	古式土師器	甕	SI11	(11.1)	(3.3)	11.6	成形や調整は全体的に荒い。外面:ヨコ位~左上がりの平行タタキ。口縁部は叩き出し。内 面:下半は下→上方向、肩部付近は反時計回りの粗いケズリ。
117	古式土師器	甕	SI11	_	(3.8)	_	底部に粘土塊充填の痕跡観察可。外面:右上がりの平行タタキ。内面:タテ位→ヨコ位のハ ケメ。
118	古式土師器	甕	SI11	_	4.8	-	底部に粘土円盤の痕跡観察可。外面:粗い平行タタキ。内面:ナデ・オサエ。
119	古式土師器?	甕	SI11	_	-	_	比較的丁寧なつくり。外面:比較的丁寧なタテ位のミガキ。内面:外面調整に伴うナデ・オ サエ。
120	古式土師器	甕	SI12	_	-	-	口縁部はややきつく折り曲げ。外面:肩部はやや左上がりのハケメ、口縁部はヨコナデ。内面:反時計回りのケズリ。
121	古式土師器	高杯	SI12	-	-	-	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
122	古式土師器	小型丸底鉢	SI12	(21.7)	-	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
123	古式土師器	甕	SI13	_	-	(5.8)	尖底。外面:胴部はナデ、底部付近は不定方向のケズリの後にナデ。内面:器壁は粗いが胴部にけずりが僅かに残存。
124	古式土師器	鉢	SI13	(12.3)	_	_	外面:右上がりのやや粗い平行タタキの後にナデ。内面:ナデ・オサエ。
125	古式土師器	高杯	SI13	(21.2)	_	-	脚部の差込み痕跡観察可。内外面ともに器壁が粗く調整不明。
126	古式土師器	高杯	SI13	_	-	-	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
127	古式土師器?	鉢	SI13	_	5.8	-	全体的に荒い作り。外面:高台部貼り付けに伴うナデ・オサエ。内面:クモの巣状のハケメ が僅かに見える。
128	古式土師器	甕	SK83		_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
129	古式土師器	甕	SI13 周壁溝	_	_	-	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
130	古式土師器	甕	SP538	_	-	-	小さな平底。外面:器壁が粗く調整不明。内面:ナデ・オサエ。
131	古式土師器	高杯	SK84	_	-	-	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
132	古式土師器	高杯	SK84	_	-	_	外面:器壁が粗く調整不明。内面:口縁部放射状のミガキが僅かに見える。
133	古式土師器	高杯	SI13	_	9.2	_	外面:脚部タテ位ミガキ、受部は不明。内面:脚部の奥側にヨコ位ケズリ、他はナデ・オサエ。受部は不明。
134	古式土師器	甕	SI13	_	_	_	外面:肩部にタテ位ハケメ。口縁部はヨコナデ。内面:肩部は反時計回りのヨコ位ケズリ。
135	古式土師器	甕	SI13	_	4.4	_	内外面:ナデ・オサエ。
136	古式土師器	甕	SI13		4.3	_	外面:ナデ・オサエ。内面は器壁が粗く調整不明。
137	古式土師器	高杯	SI13	_	-	-	内外面:器壁が粗く調整不明。
138	古式土師器	広口壺	SI15	(17.8)	-	_	外面:頸部に一次調整のタテ位ハケメの後にヨコ位の沈線状ミガキ。内面:外面調整に伴う ナデ・オサエ。粘土帯の接合痕見える。
139	古式土師器	無頸壺	SI15	(8.4)	_	_	外面:ヨコ位ハケメがわずかに残るタテ位ハケメを切る。内面:下半はタテ位ハケメ、上半はナデ・オサエ。
140	古式土師器	壺	SI15	_	_	_	外面:タテ位ハケメ。内面:クモノ巣状ハケメ。内面:器壁は粗いが僅かにケズリが残る。
141	古式土師器	甕	SI15	(17.0)	_	_	外面:肩部ヨコナデ、口縁部は丁寧なヨコナデ。内面:ヨコナデ。
142	古式土師器	甕	SI15	(15.0)	_	_	外面:肩部ヨコナデ、口縁部は丁寧なヨコナデ。内面:器壁が粗く調整不明。
143	古式土師器	甕	SI15	(15.0)	-	-	口縁部は中程で僅かに膨らむ、端部は上方に摘み出し端面は僅かに面を持つ。外面:口縁部はヨコナデ、胴部はヨコ位~僅かに右上がりの細密なラセンタタキ。内面:胴部は反時計回りのケズリ。
144	古式土師器	甕	SI15	_	(4.0)	-	外面:右上がりの平行タタキ。内面は器壁が粗く調整不明。
145	古式土師器	甕	SI15	_	1.4	_	小さな平底。外面:器壁が粗く調整不明。内面:ナデ・オサエ。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版	備考
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR8/2灰白色~10YR2/1黒色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	28		外面に黒斑。
10YR7/3にぶい黄橙色 2.5YR5/6明赤褐色	軟質	鉱物粒をほとんど含まない。	28		
10YR6/2灰黄褐色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
2.5Y5/1黄灰色 5Y2/1黒色,5Y6/1灰色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を含む。	29		底部に葉脈痕。
7.5YR6/4にぶい橙色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く、同大黒褐色粒を少量 含む。	29		
7.5YR5/4にぶい褐色 7.5YR7/4にぶい橙色			29		
10YR8/4浅黄橙色	軟質	径1.5mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	29		
2.5Y8/2灰白色~2.5Y7/1灰白色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 3 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR8/2灰白色 10YR8/2灰白色	甘	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	29		
10YR8/3浅黄橙色 7.5YR7/6橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	29		
N3/暗灰色 10YR4/2灰黄褐色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
2.5Y2/1黒色~2.5Y8/2灰白色 10YR8/3浅黄橙色~10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	29		
5Y1/4灰色 10YR2/7にぶい黄橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	29		
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR7/2にぶい黄橙色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
2.5Y8/2灰白色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 2 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含み粗い。	29		
10YR5/1褐灰色 10YR6/1褐灰色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	29		
10YR6/1褐灰色	甘	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・雲母片を少量含む。	29		二次被熱の痕跡。
7.5YR4/6にぶい橙 7.5YR6/7橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	29		
7.5YR8/3浅黄橙 5YR7/6橙色,7.5YR8/2灰白色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	29		外面に黒斑。 内面に穀物圧痕。
2.5Y8/1灰白	甘	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
7.5YR8/3浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	29		
7.5YR6/6橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR8/1灰白色 2.5YR5/6明赤褐色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を含む。	29		外面にスス付着。
10YR8/4浅黄橙色 5YR6/6橙色	良好	径 4 mm以下の石英粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR6/3にぶい黄橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
2.5Y8/1灰白色	甘	径 1 mm 大の石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を少量含む。	29		脚裾部に対向位置に円孔三 個。
10YR8/2灰白色	不良	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・橙褐色粒を多く含む。	29		
10YR6/4にぶい黄橙色 10YR6/3にぶい黄橙色	甘	径 3 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	29		
7.5YR3/7にぶい橙色	良好	径 1 mm 大の石英粒・赤褐色粒を多く含む。	29		
10YR7/4にぶい黄橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	29		円孔二個。
7.5YR8/4浅黄橙色	軟質		29		1 次調査のSH 1 。
5YR5/6明赤褐色~7.5YR5/2灰褐色	軟質		29		1 次調査のSH 1。 内面に漆付着。
10YR6/1褐灰色 10YR5/2灰黄褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29		
7.5YR8/6浅黄橙色	やや軟		29		1 次調査のSH 1。
5Y7/1灰白色 2.5Y8/2灰白色	やや軟		29		1 次調査のSH 1 。
10YR8/2灰白色	やや軟		29		1次調査のSH1。
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR6/1灰黄褐色	軟質		29		1 次調査のSH 1 。
10YR7/3にぶい黄橙色 7.5YR8/4浅黄橙色	やや軟		29		1 次調査のSH 1 。

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
146	古式土師器	高杯	SI15		_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
147	古式土師器	高杯	SI15		_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
148 149	古式土師器 古式土師器	高杯 高杯	SI15 SI15		(10.5)		外面:脚部タテ位ミガキ。内面:上方しぼり痕、裾部はナデ・オサエ。 内外面ともに丁寧なヨコナデ。
150	古式土師器	高杯	SI15 SP06		- (14.9)	_	外面:器壁が粗く調整不明。内面:ピッチの短いヨコ位ハケメ。
151	古式土師器	小型器台	SI15 SP06	_	(11.0)	_	外面:器壁が粗く調整不明。内面:右上がりのハケメ。
152	古式土師器	甕	SI15 周壁溝	_	-	-	外面:肩部タテ位ハケメ、口縁部ヨコナデ。内面:肩部内面は器壁が粗く調整不明。
153	古式土師器	甕	SI16 周壁溝	_	-	_	外面:口縁部ヨコナデ。内面:肩部ケズリ。
154	古式土師器	甕	SI16	_	-	_	外面:右上がりの平行タタキ。内面:板状工具によるナデつけ。
155	古式土師器	長頸壺	SK7	_	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
156	古式土師器	甕	SK7	_	_	_	外面:口縁部付近はヨコナデ。内面:肩部は板状工具によるタテ位ナデつけ。
157	古式土師器	甕	SK7	_	(3.6)	_	外面:胴部下端はタテ位ハケメ、底部付近は成形に伴うオサエ。内面:ナデ・オサエ。
158	古式土師器	甕	SK7	_	3.3	_	外面:胴部下端は板状工具によるタテ位ナデつけ、底部付近は成形に伴うオサエ。内面:ナデ・オサエ。
159	古式土師器	高杯	SK7	_	_	-	外面:基本的にはタテ位ミガキを施すが、杯部と脚部、脚部と脚裾部界を意識しているよう に思われる。内面:脚部上部にはしぼり目、裾部はヨコ位ハケメ。
160	古式土師器	蓋	SK7	3.0	10.8	4.0	外面:上部は成形に伴うナデ・オサエ、その他は器壁が粗く調整不明。内面:粗いナデ・オサエ。
	古式土師器	広口壺	SK7	_	_	_	内外面ともに器壁が粗いが、外面の頸部以下、内面の肩部にはハケメが僅かに残る。
162 163	古式土師器	甕?	SK7 SK7		(5.2)	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明であるが、口縁部外面に接合痕が見える。 内外面ともに成形に伴うナデ・オサエ。
164	古式土師器	甕	SK7	_		_	外面:肩部右上がりの平行タタキ、口縁部はヨコナデ。内面:ナデ・オサエ。
165	古式土師器	甕	SK7	_	4.0	_	外面:底部から右上がりの平行タタキ。内面:底部付近は下→上方向のケズリ、それより上 方は器壁が粗く調整不明。
166	古式土師器	高杯	SK7	_	-	_	外面:ピッチの短いタテ位ミガキ。内面:しぼり目。
167	古式土師器	高杯	SK7	_	_	_	外面:ピッチの短いタテ位ミガキ。内面:しぼり目。内面:上方はしぼり目、下方はナデ・オサエ。
168	古式土師器	高杯	SK7	_	_	_	外面:器壁が粗いが端面にヨコ方向の綾杉状の線刻。内面:ナデ・オサエ。
169	古式土師器	高杯	SK7	_	_	-	内外面ともに器壁が粗いが、口縁部端面に3条のヘラ描沈線。
170	古式土師器	有孔鉢	SK7	_	3.5	_	外面:左上がりの平行タタキ。内面:ナデ・オサエ。
171	古式土師器	小型器台	SK7	_	-	-	外面:タテ位ミガキ。内面:器壁が粗く調整不明。
172	古式土師器	甕	SK8	_	(2.2)	_	外面: 胴部下端はタテ位ハケメ、底部付近は成形に伴うオサエ。内面: ナデ・オサエ。内面: 板状工具による左上がりのナデつけ。
173	古式土師器	甕	SK8	(16.2)	_	_	□縁部は直背的に伸び、端部は上方に僅かに摘み上げる。外面:肩部は右上がりの細密な平行タタキ、□縁部は丁寧なヨコナデ、後円部中程に接合痕がみえる。内面:肩部は時計回りのケズリ、□縁部は丁寧なヨコナデ。
174	古式土師器	甕	SK8	16.0	_	_	□縁部中程で僅かに膨らみ内湾、端部は肥厚する。胴部は最大径付近ででく僅かに張りを見せる。外面:胴部下半はヨコ位平行タタキ、中程で左上がりとなり、肩部付近で右上がり~ ヨコ位となる。□縁部は丁寧なヨコナデ。内面:胴部は基本的にケズリ(下半下→上、中程反時計回り、上半時計回り)
175	古式土師器	甕	SK8	(18.4)	-	_	口縁部は中程で僅かに膨らみ内湾気味、端部は内側に摘み出すことで外傾面をもつ。外面: 肩部はヨコ位の細密な平行タタキ、口縁部は丁寧なヨコナデ。内面:器壁が粗いが肩部にケ ズリの痕跡が僅かに残る。
176	古式土師器	甕	SK8	(15.4)	_	-	口縁部は中程で僅かに膨らみ内湾、端部は肥厚する。外面: 肩部右上がり~ヨコ位の細密な平行タタキの後に左上がりの粗いハケメ。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面: 胴部上半は反時計回りのヨコ位ハケメの後に肩部で同方向のケズリ。
177	古式土師器	甕	SK8	(15.2)	_	_	口縁部は比較的直線的に伸び端部は上方に僅かに摘み出す。胴部は最大径が上方に上がることで卵倒形を呈する。外面:胴部下半はタテ位ハケメ、上半は右上がりのハケメが僅かに残る。口縁部は丁寧なヨコナデ。内面:時計回り右上がりのケズリ、口肩部界に僅かに段が残る。
178	古式土師器	甕	SK8	_	_	_	口縁部は中程で極僅かに膨らみ比較的直線的に伸びる、端部は内側に摘み出すことで外傾面をもつ。外面:肩部は右上がりの細密な平行タタキ、口縁部は丁寧なヨコナデ。内面:肩部はケズリの後に外面調整に伴うナデ・オサエ。
179	古式土師器	甕	SK8	_	-	-	口縁部は中程で膨らみ比較的直線的に伸びる、端部は上方に摘み出す。内外面ともに器壁が 粗く調整不明。
180	古式土師器	高杯	SK8	_	14.1	-	脚部は中実で円柱状に伸び、裾部は緩やかに広がる。外面:脚柱状部はタテ位ミガキ、裾部は左上がりの微細なハケメ。内面、柱状部はヨコ位ケズリ、裾部上半は反時計回りヨコ位のピッチの短いハケメ、下半はヨコナデ。
181	古式土師器	高杯	SK8	-	-	_	脚部は中空で下方に僅かに広がる。外面:タテ位のミガキ、もしくはヘラ状工具によるナデつけ。内面:しぼり目。
182	古式土師器	高杯	SK8		_	_	脚部は中空で下方に僅かに膨らみながら広がる。外面:器壁が粗く調整不明。内面:しぼり目。
183	古式土師器	甕	SD1	-	_	-	口縁部は中程で僅かに膨れ比較的直線的に伸びる。外面: 肩部はヨコ位の細密な平行タタキ、 口縁部は丁寧なヨコナデ。内面: 肩部は器壁が粗いがヨコ位ケズリが僅かに残る。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版
5YR6/4にぶい橙色	やや硬		29	1 次調査のSH 1 。
5YR6/6橙色	やや硬		29	1 次調査のSH 1 。
5YR7/6橙色~10YR8/2灰白色	軟		29	1 次調査のSH 1 。
7.5YR8/4浅黄橙色	やや軟		29	1 次調査のSH 1 。
7.5YR8/3浅黄橙色~5YR7/6橙色	軟		29	1 次調査のSH 1 。
7.5YR6/4にぶい橙色	軟		29	1 次調査のSH 1 。
7.5YR7/2明褐灰色 10YR7/3にぶい黄橙	不良	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	29	
10YR5/1褐灰色 10YR5/1褐灰色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30	
10YR5/2灰黄褐色 2.5YR7/4淡赤橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒を少量含む。	30	
10YR6/1褐灰色~10YR8/2灰白色 7.5YR8/6浅黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を含む。	30	
10YR8/3浅黄橙色 10YR8/3浅黄橙色	良好	径0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	30	
2.5Y7/3浅黄色 2.5Y7/2灰黄色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	30	
10YR7/2にぶい黄橙色 10R2/1赤黒色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を少量含む。	30	
10YR8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30	脚部・裾部界のほぼ対向位 置に円孔 4 個。
10YR8/2灰白色 10YR8/1灰白色	甘	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	30	完形。
10YR8/2灰白色 10YR8/1灰白色	甘	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30	
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30	
10YR8/3浅黄橙色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30	
5YR7/6橙色~2.5Y8/3淡黄色 2.5Y8/2灰白色~5YR7/6橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30	
2.5Y7/1灰白色 10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	30	
10R5/4赤褐色 2.5YR5/4にぶい赤褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30	円孔 1 個。
10YR8/2灰白色 10YR8/1灰白色	軟質	鉱物粒はほとんど含まない。	30	三方に円孔。
10YR8/1灰白色 10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を含む。	30	
7.5YR2/3極暗褐色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を含む。	30	外来系(讃岐産)。
2.5Y6/1灰黄色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	30	底部中央に焼成前穿孔(外 径1.0cm、内径0.4cm)
7.5YR8/3浅黄橙色	軟質	径 2 mm 大長石粒を多く、径0.5mm以下の石英・長石粒を含む。	30	
10YR6/1褐灰色 10YR7/1灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含むが比較的精良。	30	
10YR8/2灰白色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色を多く含む。	30	庄内形。
2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30	庄内形。
10YR8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色を多く含む。	30	庄内形。
7.5YR8/1灰白色 7.5YR8/3浅黄橙色~7.5YR8/1灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を少量、赤褐色粒をやや多く含む。	30	庄内形。
10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30	庄内形。
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	30	庄内形。
2.5Y7/2灰黄色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	30	庄内形。
10YR8/3浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒を少量含む。	30	
10YR8/3浅黄橙色,10YR8/1灰白色 10YR8/2灰白色.10YR8/3浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	30	
5YR7/6橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30	
2.5Y8/1灰白色~2.5Y6/1黄灰色 N7/灰	軟質	径 3 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30	庄内形。

掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
184	古式土師器	甕	SD1		2.0		小平底。内外面ともに器壁が粗く調整不明。
185	古式土師器	甕	SD1	_	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
186	古式土師器?	高杯	SD1	_	-	_	外面:タテ位ミガキが僅かに残る。内面:ナデ・オサエ。
187	古式土師器	甕	SD2 上層	(14.8)	-	-	外面:胴部上半は右上がりの平行タタキの後に部分的にタテ位なで消し、口縁部はヨコナデ。 内面:胴部上半は板状工具によるナデつけ、肩部は反時計回り左上がりのハケメの後に外面 調整にも伴うナデ・オサエ。
188	古式土師器	甕	SD2 上層	_	3.2		胴部:右上がりの平行タタキ、底部付近はオサエ。内面:板状工具によるナデつけの後に外面調整に伴うナデ・オサエ。
189	古式土師器	高杯	SD2 上層	(15.0)	-	_	外面:杯部は放射状のミガキ、口縁部はナデ・オサエ、脚部はタテ位ミガキ。内面:杯部は放射状のミガキ、脚部はしぼり目。
190	古式土師器	高杯	SD2 上層	-	-	-	外面:器壁が粗いがナデの痕跡が僅かに残る。内面:しぼり目。
191	古式土師器?	装飾器台	SD2 上層	_	-	(4.2)	外面:上下に拡張した口縁端部上端に左下がりの刻目、端面に鋭利なヘラ状工具による鋸歯 文L。内面:丁寧なヨコナデ。
192	弥生土器	広口壺	SD2 上層	_	-	-	口縁部は下方に拡張、接合面で剝離。内外面ともに丁寧なヨコナデ。
193	弥生土器	甕	SD2 上層	(14.0)	-	_	外面:上下に摘み出した口縁部端面に沈線2条、胴部上半は右上がりのハケメ。内面:肩部に外面調整に伴うオサエが顕著。
194	弥生土器	高杯	SD2 上層	_	-	_	口縁端部を内外に摘み出し、上方に端面を持つ。外面:受部上半は丁寧なヨコナデ、下半は 同心円状の断続的なミガキ、口縁部端面に擬凹線 3 条。内面:受部下方は同心円状の断続的 なミガキ。
195	弥生土器	長頸壺	SD2 中層	_	(3.4)	_	胴部は丸みを帯びる、肩部接合面で剝離、器壁は厚い。外面:下→上方向ミガキ、底部付近 はオサエ。内面:タテ位〜左上がりのハケメ、胴部最大径付近で粘土帯の接合痕が見える。
196	弥生土器?	広口壺	SD2 中層	9.9	4.7	18.5	外面:胴部下半は主にタテ位の板状工具によるナデつけ、胴部最大径付近で接合に伴うナデ・オサエ、胴部上半はタテ位〜やや左上がりのピッチの短いハケメ、口縁部は端部を上方に摘み出し、丁寧なヨコナデ。内面:胴部下半はタテ位の板状工具によるナデつけ、胴部最大径付近は反時計回りのヨコ位ハケメ、胴部上半は粘土帯の接合面を残す。
197	古式土師器	壺	SD2 中層	-	7.2	-	外面:胴部下半は一次調整のタテ位ハケメの後に同方向の粗いミガキ、底部付近はオサエ。 内面:下→上方向のケズリ。
198	古式土師器	壺	SD2 中層	-	5.1	-	外面: 胴部下端は板状工具によるタテ位ナデつけ、底部付近は成形に伴うオサエ。内面: ナデ・オサエ。右上がりの平行タタキの後に、タテ位ミガキ、底部はオサエ。内面: 乱方向のハケメ。
199	古式土師器	広口壺	SD2 中層	(16.0)	-	_	外面:肩部タテ位ハケメの後に同方向のミガキ。口頸部は丁寧なヨコナデ。内面:肩部に粘 土帯接合痕が見える。
200	古式土師器	広口壺	SD2 中層	13.8	-	-	外面:胴部上半〜肩部は一次調整のタテ位ハケメの後に同方向の粗いミガキ、口縁部は主に ヨコナデ。内面:胴部上半は主にタテ位ハケメ、肩部はヨコ位ハケメ、同範囲は粘土帯の接 合面を残す。
201	古式土師器	広口壺	SD2 中層	_	_	_	外面:一次調整の右上がり平行タタキの後に左上がりのハケメ。内面:胴部下半はヨコ位ハケメ、最大径付近は反時計回りヨコ位ケズリ、同上半は下→上方向のケズリの後にヨコ位ハケメ、頭肩部はオサエ。
202	古式土師器	広口壺	SD2 中層	-	5.1	-	胴部最大径付近でやや張る。外面:胴部下半は右上がりのミガキ、最大径以上はタテ位ミガキ、底部付近はオサエ。内面:胴部最大径の接合痕以下は右上がりハケメ、同以上はナデ・オサエ。
203	古式土師器	広口壺	SD2 中層	_	5.4	-	器形は202に類似するが製作技法に差異が看取できる。外面:基本的に右上がりの平行タタキで胴部下半は内面調整に伴うオサエが切る。内面:胴部最大径の接合痕以下は左上がりのハケメ同痕付近は反時計回りのケズリ、それ以上は左上がり斜位のハケメ、粘土帯の接合面を残す。
204	古式土師器	広口壺	SD2 中層	_	5.0	-	202・203と類似する器形で調整が最も丁寧。外面:タテ位〜やや右上がりのミガキ、底部付近はオサエ。内面:左上がりのハケメ・板状工具によるナデつけ。
205	古式土師器	広口壺	SD2 中層	(23.9)	-	-	外面:同心円状の平行タタキの後に放射状のハケメ、丁寧なヨコナデ、口縁部端面には擬凹線3条。内面:丁寧なヨコナデ。
206	古式土師器	甕	SD2 中層	12.9	-	-	外面:やや粗い右上がりの連続ラセンタタキ、胴部下半は上→下方向の粗いハケメ。内面: 主にタテ方向のハケメ、粘土帯の接合痕を残す、口縁部は反時計回りヨコ位のハケメ。
207	古式土師器	甕	SD2 中層	(12.8)	-	-	外面:右上がりの平行タタキの後にタテ位の粗いハケメ、下半は原体を器壁から離さず連続 して施す。内面:左上がりのケズリ。
208	古式土師器	甕	SD2 中層	(15.6)	-	_	外面:右上がりの平行タタキ、口縁部タタキ出し、口縁部に接合痕が見える。内面:左上が りのケズリ。
209	古式土師器	甕	SD2 中層	_	4.2	_	外面:右上がりの平行タタキ後にタテ位の粗いハケメ。内面:下→上方向のケズリ。
210	古式土師器	甕	SD2 中層	_	3.8	-	外面:右上がりの平行タタキ、上半は左上がりの粗いハケメ。内面:左上がりのハケメの後 にタテ位の板状工具によるナデつけ。
211	古式土師器	甕	SD2 中層	-	(3.8)	-	外面:右上がりの平行タタキ、特に下半はタテ位のハケメが切る。内面:下→上方向のケズ リ、上半はやや右上がりのケズリ。
212	古式土師器	甕	SD2 中層	(14.0)	4.0	20.2	外面:胴部は主に下→上方向のハケメ、口縁部は内面調整に伴うオサエ。内面:胴部下半は 下→上方向のケズリ、上半は左上がりのケズリ、口縁部は左上がりのハケメの後にヨコナデ。
213	古式土師器	甕	SD2 中層	13.2	-	-	□縁部は上方に拡張し端面を持つ。外面:胴部はタテ方向のハケメ、その上端は□縁部のヨコナデに切られる、□縁部端面んい擬凹線3条。内面:胴部中程は下→上方向のケズリ、上半は左上がり方向のケズリ。
214	古式土師器	甕	SD2 中層	_	_	_	外面:胴部は器壁が粗いが右上がり平行タタキが僅かに残る、口縁部ヨコナデ。内面:粘土帯の接合痕が見える。
215	古式土師器	甕	SD2 中層	_	3.4	_	外面:器壁が粗く調整不明。内面:下→上方向のケズリ。
216	古式土師器	甕	SD2 中層	-	5.8	-	内外面ともに不定方向のナデ・オサエ。

色調	焼成	胎土	図版番号	写真図版	備考
2.5Y7/3浅黄色	軟質	径 3 mm 大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	30		
2.5Y8/2灰白色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		在来系でなはい可能性。
7.5YR5/4にぶい褐色 10YR5/3にぶい黄褐色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・角閃石粒を多く含む。	30		外来系、2孔のうち1孔 は未貫通。
2.5Y7/3浅黄色 2.5Y8/2灰白色~2.5Y6/2灰黄色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を含む。	30		外面に黒斑。
10YR8/4浅黄橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	30		
2.5Y8/2灰白色	軟質	径0.5mm石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	30		
7.5YR7/2明褐灰色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	30		
2.5Y8/2灰白色 5Y8/2灰白色	軟質	径 3 mm以下の石英粒・長石粒・橙褐色粒を含む。	31		
10YR5/3にぶい黄褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	31		外来系(河内産)。
7.5YR5/4にぶい褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒をやや多く含むが、比較的精良。	31		外来系(讃岐産)。
10YR6/4にぶい黄褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	31		外来系(讃岐産)。
10YR8/3浅黄橙色 2.5YR7/3浅黄橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	31		
2.5Y6/1黄灰色 10YR浅黄橙色	良好	径 3 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒をやや多く含む。	31		
10YR8/1灰白色 10YR8/2灰白色	軟質	径 3 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	31		
10YR5/1褐灰色 10YR6/2灰黄褐色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	31		
5YR6/4にぶい橙色~10YR8/2灰白色 10YR8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含むが比較的精良。	31		
10YR4/1褐灰色 2.5Y7/2灰黄色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を含む。	31		
2.5YR7/6橙色~10YR4/1褐灰色 10YR8/2灰白色~10YR6/2灰黄褐色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を含む。	31		
2.5Y8/2灰白色 2.5Y8/1灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く、赤褐色粒を多く、同大黒褐色粒を 少量含む。	31		
2.5Y8/2灰白色~2.5Y6/1黄灰色 10YR8/4浅黄橙色~10YR4/1褐灰色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	31		
2.5Y7/2灰黄色 10YR8/3浅黄橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒を、径 1 mm以下の赤褐色粒・黒褐色粒を 少量含む。	31		
10YR8/3浅黄橙色 2.5YR7/6橙色~5YR7/6橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含み、やや粗い。	31		外来系(讃岐)
10YR6/1褐灰色 10YR8/2灰白色	Ħ	径 2 mm大の石英粒・長石粒・雲母片・赤褐色粒を含む。	31		
10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・黒褐色粒を少量含む。	31		
2.5Y7/1灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒を多く、同大赤褐色粒を少量含む。	31		
10YR8/1灰白色	軟質	径 3 mm以下の石英粒・長石粒・褐色粒(チャート?)・黒褐色粒を含む。	31		
7.5YR8/1灰白色 2.5YR6/8橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・褐色粒(チャート?)・黒褐色粒を含む。	32		
2.5Y8/1灰白色 10YR8/3浅黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を含む。	32		
2.5Y2/1黒色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径2mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	32		外面に黒斑。
10YR8/4浅黄橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	32		
5YR6/4にぶい橙色 2.5YR6/6橙色	軟質	径 3 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	32		
7.5Y4/1灰色 2.5YR5/6明赤褐色	軟質	径 3 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	32		外面に黒斑。
7.5YR5/3にぶい褐色 10YR4/3にぶい黄褐色	軟質	径 1 mm以下の長石粒・角閃石粒を多く含む。	32		外来系(讃岐産)

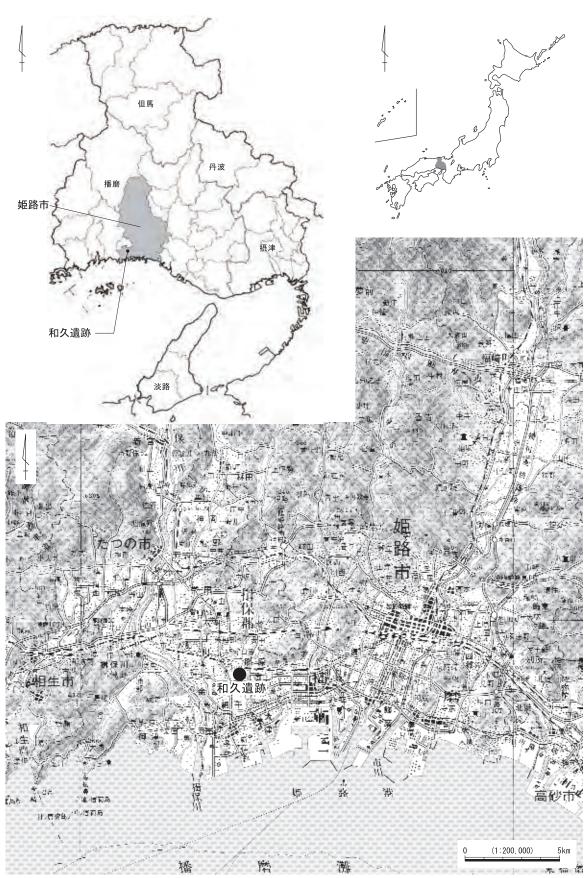
掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
217	古式土師器	甕	SD2 中層	13.5	4.9	25.2	外面:胴部の一次調整は基本的に下→上方向のハケメで、一度器壁を平滑にした後に底部付近から胴部最大径付近まで再度施し、その後に胴部下半のみタテ位の密なミガキ、口縁部は丁寧なヨコナデ。内面:胴部最大径以下は下→上方向のケズリ、それ以上は外面調整に伴う密なオサエ。
218	古式土師器	甕	SD2 中層	(14.0)	_	-	器形・調整等は217に近い。
219	古式土師器	甕	SD2 中層	_	5.2	_	器形・調整等の殆どは217・218に近いが、胴部外面のミガキの範囲が前2者よりもやや低い範囲にとどまる。
220	古式土師器	甕	SD2 中層	(14.0)	_	-	器形・調整等は217~219に近い。
221	古式土師器	甕	SD2 中層	_	5.0	_	器形・調整等の殆どは217~220に近いが、外面のミガキが施されていない。
222	弥生土器	高杯	SD2 中層	(25.6)	_	-	外面:受部は放射状のハケメの後に同方向のミガキが僅かに残る、口縁部・受部界にヘラ描 沈線1条、口縁部ヨコナデ。内面:受部は放射状のハケメ。
223	弥生土器	高杯	SD2 中層	(27.4)	_	-	内外面ともに器壁が粗いが、両者にミガキが僅かに残る。
224	弥生土器	高杯	SD2 中層	_	_	_	外面: 受部は放射状のハケメ、口縁部・受部界にヘラ描沈線 1 条、口縁部はヨコナデ。内面: 受部は放射状のミガキ。
225	弥生土器	高杯	SD2 中層	_	_	-	外面:受部は放射状のミガキ、口縁部・受部界にヘラ描沈線 1 条、口縁部ヨコナデ。内面: 受部〜口縁部はミガキ、口縁部端部はヨコナデ。
226	弥生土器	高杯	SD2 中層	17.4	(18.0)	12.5	脚部は左上がりのハケメの後にタテ位ミガキ、裾部は放射状のハケメ、杯部は下半が放射状のミガキ、上半はナデ・オサエ。内面:脚部はしぼり目、時計回りのヨコ位ケズリ、裾部は 同心円状のハケメ。
227	古式土師器	高杯	SD2 中層	_	(16.6)	_	脚部は中実。外面:脚部はタテ位ミガキ、同裾部は左上がりハケメの後に放射状のミガキ、 受部は放射状のミガキ。内面:脚部はしぼり目、同裾部はヨコ位ハケメ、受部は放射状のミガキ。
228	古式土師器	高杯	SD2 中層	_	(13.7)	_	脚部上半は中実。外面: 脚部はタテ位ミガキ、裾部上半は放射状のミガキ、同端はヨコナデ。 内面: 脚部はしぼり目、同裾部はヨコナデ、杯部はミガキ。
229	古式土師器	高杯	SD2 中層	_	-	_	脚部頂部及びその即縁には杯部を接合した痕跡なし。外面:脚部主にタテ位ハケメ。内面:脚上部はしぼり目、その下位はヨコナデ、裾部はヨコ位ハケメ。
230	古式土師器	高杯	SD2 中層	_	-	_	脚部は中空。外面:脚柱部はタテ位ミガキ、杯部と裾部は器壁が粗く調整不明。内面:脚中部はしぼり目、ケズリの後にナデ、粘土接合痕残る、杯部は不明、裾部はヨコ位ハケメが僅かに見える。
231	古式土師器	高杯	SD2 中層	_	_	_	脚部は中空。外面:脚部はタテ位ミガキ。内面:脚部はしぼり目、ヨコ位ケズリの後にナデ、 杯部はミガキ。
232	古式土師器	鉢	SD2 中層	11.1	3.2	6.7	外面: 下半は左上がり、上半はヨコ位の平行タタキ、底部付近はナデ・オサエ。内面: 底部付近はナデ・オサエ、中程はナデ、口縁部付近は左上がりハケメの後にヨコナデ。
233	古式土師器?	鉢	SD2 中層	8.0	2.4	8.7	外面:胴部は主にタテ位ハケメ、口縁部ヨコナデ・オサエ。内面:胴部下半はナデ・オサエ、 それ以上は板状工具によるヨコ位のナデつけ、口縁部の接合痕が見える。
234	古式土師器	脚台	SD2 中層	_	9.2	_	外面:胴部は右上がりの平行タタキ、脚部は接合に伴うナデ・オサエ。内面:胴部は主に左 上がりのハケメ、脚部は板状工具によるヨコ位ナデつけ。
235	古式土師器?	把手付鉢	SD2 中層	13.7	3.5	10.1	外面:胴部は左上がりのミガキ、口縁部下には沈線3条、把手の接合痕残る。内面:胴部は極僅かにミガキが残る、口縁部は施文に伴うナデ・オサエ。
236	古式土師器	装飾器台	SD2 中層	_	_	_	口縁部に上下に拡張した粘土接合痕が僅かに見える。外面: 受部主に放射状のハケメ、口縁部端面にヘラ状工具による鋸歯文し。内面: 口縁部付近に小さい半裁竹管文 2 列。
237	古式土師器?	鉢	SD2 中層	(14.1)	_	_	外面:胴部は器壁が粗く調整不明、口縁部はヨコナデ。内面:胴部は板状工具による左上が りのナデつけ。
238	古式土師器	鉢	SD2 中層	(22.4)	4.4	16.8	外面: 胴部は底部付近にやや左上がりの平行タタキが僅かに残る、右上がりハケメの後に左上がりのやや粗いハケメ。口縁部はヨコナデ・オサエ。内面: 底部付近はナデ・オサエ、それ以上は左上がりのハケメで、同方向の工具の当たりが見える。
239	弥生土器?	器台	SD2 中層	_	_	_	外面:筒状部はタテ位ハケメの後に浅い沈線6条、裾部は放射状のミガキ。内面:筒状部は 粘土帯の接合面が見える、裾部は放射状のハケメ。
240	古式土師器?	手焙形土器	SD2 中層	_	3.5	17.5	外面:胴部下半は主にタテ位のミガキ、接合部はヘラ描沈線により接合痕を消す。内面:胴部下半は主にタテ位のミガキ、接合部はヘラ描沈線により接合痕を消す。内面:胴部は下→上方向のケズリを施す。
241		砥石	SD2 中層	_	_	_	長辺7.1cm ~、短辺6.6cm ~、厚さ3.4cm ~、重さ178.8g。全面折損、僅かに砥面が残る。
242	弥生土器	広口壺	SD2 下層	_	_	_	外面:口縁部端面上端に左下がりの刻目、そのうえに3個一対の円形浮文2組。内面:口 縁部には2条の貼付突帯。
243	弥生土器	高杯	SD2 下層	_	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明であるが、三角形透かし孔は未貫通。
244	弥生土器	広口壺	SD2 下層	_	_	_	外面:頸部は1次調整のタテ位ハケメの後に断面三角形の貼付突帯3条。内面:口縁部内面に貼付突帯1条、頸部上半はヨコナデ、同下半はヨコ位ミガキ。
245	弥生土器	高杯	SD2 下層	_	_	_	外面:杯部は短いヨコ位のミガキ、脚部上端に円孔1個未貫通。内面:杯部はヨコ位ミガキ。
246	弥生土器	脚台	SD2 下層	_	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明、脚部に円孔 3 個残存。
247	石器	敲石	SD2 下層	_	_	_	長さ9.1cm、幅8.2cm、厚さ5.1cm、重さ640.1g。中央部分は浅くくぼむ。側縁に敲打痕が 見える。
248	弥生土器	長頸壺	SD2 下層	11.6	_	_	外面: □縁部ヨコナデ、頸部はタテ位ミガキ、頸部下端以下に一次調整のハケメが残る、肩部は粗い左上がりミガキ。内面: 頸部上半はヨコ位ミガキ、下半は左上がりのハケメ、肩部は接合に伴うナデ・オサエ。

色調	焼成	胎土	図版 番号	写真 図版		備考
10YR6/4にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の長石粒・角閃石粒を少量、同大赤褐色粒を極僅かに含む。	32		外来系(讃岐産)
5YR5/3にぶい赤褐色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒を多く含む。	32		外来系(讃岐産)
7.5Y5/4にぶい褐色 7.5Y6/3にぶい褐色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・角閃石を多く、雲母片・赤褐色粒を少量 含む。	32		外来系(讃岐産)
7.5YR6/4にぶい橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を多く、同大赤褐色粒を少量 含む。	32		外来系(讃岐産)
2.5Y7/1灰白色~25Y4/1黄灰色 10YR4/1褐灰色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	32		外来系(讃岐産)
2.5Y8/1灰白色~2.5Y7/1灰白色 2.5Y8/1灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒黒褐色粒を少量含む。	32			
7.5YR8/6浅黄橙色 7.5YR7/4にぶい橙色	良好	径2mm大の石英粒・長石粒を多く、径5mm大の赤褐色粒を稀に含む。	32			
5YR6/8橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	32			
10YR8/2灰白色 7.5YR8/4浅黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	32			
10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	32		裾部の対個。	†向位置に円孔4
2.5Y8/2灰白色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を含む。	32			
2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	32			
10YR7/2にぶい黄橙色 10YR7/3にぶい黄橙色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33			成品か別器種の可 り。対向位置に円
5YR7/6橙色~5YR8/4淡橙色 7.5YR7/6橙色~7.5YR7/3にぶい橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		おそらく 2個。	対向位置に円孔
10YR5/1褐灰色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	33		おそらく 2個。	対向位置に円孔
7.5YR8/3浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含むが比較的精良。	33		内面に黒	斑。
2.5Y8/2灰白色 2.5Y8/3淡黄色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・褐色粒(チャートか?)を多く含む。	33		外面に赤	色顔料残る。
10R6/6赤橙色 10R6/4にぶい赤橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く、同大赤褐色粒を少量 含む。	33			
5YR8/4淡橙色 5YR7/6橙色	良好	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	33			
10YR8/2灰白色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒をやや多く含む。	33			
10YR5/4にぶい黄褐色	軟質	径 4 mm大の石英粒・長石粒を少量、径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤 褐色粒・黒褐色粒を含む。	33			
10YR7/3にぶい黄橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	33			
10YR8/3浅黄橙色 2.5Y8/3浅黄色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	33		おそらく 透かし孔	対向位置に長方形 2個。
10YR8/2灰白色~ N4/灰色 10YR8/1灰白色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・橙褐色粒を含む。	33		完形。	
-	-	-	33			
10YR3/2黒褐色 10YR1.7/1黒色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	34			
5YR6/6橙色 5YR7/4にぶい橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・橙褐色粒を多く含む。	34			
2.5Y7/2灰黄色 2.5Y8/3淡黄色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を含む。	34			
7.5YR5/3にぶい褐色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒を多く含む。	34			
10R5/4赤褐色 10R5/4赤褐色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	34			
			34			
2.5Y7/2灰黄色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒、径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐 色粒を含む。	34			

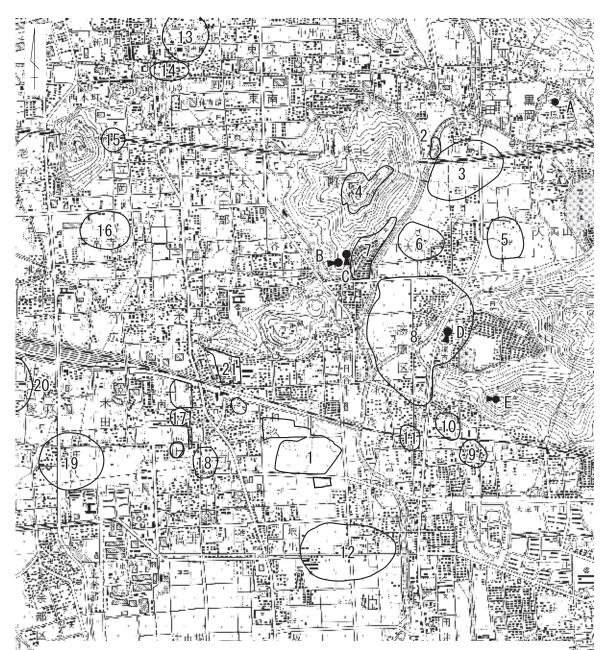
29 水生岩 松郎 下間 下記 日本 23 一月の大刀、中報とから上がりのケスリ、それ以上は外面側に伴うナデ・オウエ 上半には比したり合きを表す。	掲載 番号	種別	器種	出土遺構	口径	法量 底径	器高	形態・技法の特徴
	249	弥生土器	長頸壺		_	2.3	_	外面:胴部は一次調整の右上がり平行タタキの後にタテ位のハケメ。内面:胴部下半は下→ 上方向のケズリ、中程はやや右上がりのケズリ、それ以上は外面調整に伴うナデ・オサエ、 上半には粘土帯の接合面を残す。
対しては	250	弥生土器	広口壺		_	_	_	外面:口縁部端面にヘラ描沈線 2 条の上に竹管文 4 個。内面:ナデ。
22	251	弥生土器	高杯	SD2	(27.9)	_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
25	252	弥生土器	鉢	SD2	(27.6)	5.0	11.1	外面: 口縁部は成形時のナデ・オサエの後にヨコ位ミガキ、鉢部は頸部下のヨコ位ミガキを 鉢部のタテ位ミガキが切る。
22 古式上師器 広口音 502 (13.0)	253	弥生土器	鉢	SD2	(28.6)	_	_	外面:鉢部にタテ位ミガキが僅かに残る。内面:鉢部下半はタテ位ミガキ、上半のヨコ位ミ
および おい おい おい おい おい おい おい お	254	古式土師器	広口壺	SD2	(13.0)	_	_	外面:頸部以下のタテ位ハケメを口縁部のヨコナデが切る。内面:胴部は粘土帯の接合面が
256 古式上朝鮮 広口 502 138 750	255	古式土師器	広口壺	SD2	(12.4)	-	_	外面:胴部は頸肩部界→やや右下方向のハケメ、頸部は頸肩部下半は→上方向のハケメ、口 縁部ヨコナデ。内面:胴部は板状工具によるタテ位ナデつけ、粘土帯の接合面を残す、頸部
257 古式上師器 広口皇 502 7.1 -	256	古式土師器	広口壺		_	4.5	_	外面:一次調整の左上がり平行タタキをタテ位ミガキが切る。内面:主に右上がりのハケメ。
258 古式土師器	257	古式土師器	広口壺	SD2	_	3.8	_	外面:胴部下半はタテ位ミガキ、上半は器壁が粗く調整不明。内面:ナデ・オサエ。
	258	古式土師器?	台付無頸壺	SD2	7.1	_	_	外面:胴部最大形に接合痕が見える。胴部全面タテ位ミガキ、口縁部ヨコナデ。内面:胴部
25 15式上野器 東	259	古式土師器	甕	SD2	(15.6)	_	_	外面:胴部は右上がりの平行タタキの後にタテ位ハケメ・同方向の板状工具によるナデつけ、 口縁部ヨコナデ・オサエ、接合痕みえる。内面:胴部下半は左上がりのハケメ、同上半はヨ
261 古式土師器	260	弥生土器?	甕		(11.6)	(2.7)	_	外面:右上がり平行タタキの後に左上がりのハケメ、口縁部ヨコナデ。内面:胴部下半下→ 上方向のケズリ、同上半は左上がりのケズリ。
262 古式拍照器 膜 SD2 下層 ー 日本 一 日本部のと思いた立上がる。外面:器壁が和く調整不利。内面:翻部は未工具によるナーファ、口藤部自コナデ。 263 古式土銅器 度 SD2 下層 ー 3.6 外面:ターグロバケメ、内面:底部付近は下→上方向のケズリ、削部下半以上は左上がリケズリ 264 古式土銅器 高杯 SD2 下層 ー 一 ー 開助は中座、外面:脚部は十下上方向のケズリ、開部下半以上は上上ばりまでおけったがりの、ケメの値にタテ仕まれた。内面:脚部は上半しばりまでおける。 265 古式土銅器 高杯 SD2 下層 ー ー ー 開助は中空、外面:解部は一次調整の左上がりのハケメの後にタテ仕まれた。内面:脚部は上半しばりまでは、一定では、一定では、一方で開からりつきなどりの、ケメの他にタテ仕まれた。内面:脚部は上半しばりまでは、一定では、一定では、一定では、一定では、一方で開からりのコークをプリーをおよります。 266 古式土銅器 高杯 SD2 下層 ー ー ー 脚部は中空、外面:網部はマテ位のミガキ、経部域にヘラ描放線 3 条。内面:時間切りのヨロケズリーをおよります。 267 古式土銅器 有孔針 SD2 下層 ー 13.7 ー 網部は中空、外面・調節はオタテ位のミガキ、経部域はステールがとはよりのでするりまた。内面:上上はしばり目のでは、自身では、自身では、自身では、自身では、自身では、自身では、自身では、自身	261	古式土師器	甕	SD2	13.5	_	_	外面:胴部は右上がりの平行タタキ、口縁部タタキ出し、口縁部ヨコナデ・オサエ、接合痕
263 古式土師器 襲 SD2 下層 ー 3.6 一 外面: タテ位ハケメ。内面: 庭部付がは下→上方向のケズリ、別部下半以上は左上がりケスリ 開部は中空、外面: 静部は子子、外面: 静部は子子、村部は放射状のミガキ、内面: 静部は上半しばす 目、複部はパケメ。 264 古式土師器 高杯 SD2 下層 ー	262	古式土師器	甕		_	_	_	口縁部は受口状に立上がる。外面:器壁が粗く調整不明。内面:胴部は板状工具によるナデ
264 古式土師器 高杯 SD2 下層 一	263	古式土師器	甕		_	3.6	_	外面:タテ位ハケメ。内面:底部付近は下→上方向のケズリ、胴部下半以上は左上がりケズリ。
265 古式土師器 高杯 SD2 下層 ー	264	古式土師器	高杯	SD2	_	_	_	脚部は中空。外面:脚部はタテ位ミガキ、杯部は放射状のミガキ。内面:脚部は上半しぼり 日、裾部はハケメ。
266 古式土師器 高杯	265	古式土師器	高杯	SD2	_	_	_	脚部は中空。外面:脚部は一次調整の左上がりのハケメの後にタテ位ミガキ。内面:脚部は
267 古式土師器 高杯 SD2 下層 一 13.7 一 脚部は中空。外面:脚部は今テ位のミガキ、裾部端にへう描沈線 1条。内面:上半はしぼり目裾部はヨコナデ。 268 古式土師器 有孔鉢 SD2 (15.9) 3.6 (12.0) 外面:蜂部は右上がりの平行タタキ、口縁部はヨコナデ。内面:房部は時計回りのヨコ位ケズリ 口縁部はヨコナデ。内面:房部は時計回りのヨコ位ケズリ 口縁部はヨコナデ。内面:房部は時計回りのヨコ位ケズリ 口縁部はヨコナデ。内外面ともに器壁が粗く調整不明。 270 古式土師器 寮 SD4 ー ー ー 内外面ともに器壁が粗く調整不明。 271 古式土師器 寮 SD4 ー ー ー 内外面ともに器壁が粗く調整不明。 272 古式土師器 寮 SD4 ー ー ー 内外面ともに器壁が粗く調整不明。 273 古式土師器 寮 SD4 ー ー ー 内外面:会職をお出きが加く調整不明。 274 古式土師器 寮 SD4 ー ー ー 内外面:頸部は大りのでのよりまが強力に対象である。 275 古式土師器 高杯 SD4 ー ー ー 脚部大半が中実。外面:多方位のまがまが強力には残る。 内面:器壁が相く調整不明。 276 古式土師器 小型路台 SD4 ー ー ー 脚部大半がの実施が進行に対象に対象を対する。 他は器壁が相く調整不明。 の面:受部を対する。 ファー・カー・カー・カー・カー・関部は対力がよりまたがは	266	古式土師器	高杯	SD2	_	_	_	脚部は中空。外面:タテ位のミガキの後にヘラ描沈線3条。内面:時計回りのヨコ位ケズリ。
268 古式土師器 有孔鉢 SD2 F層 (15.9) 3.6 (12.0) 外面:幹部は右上がりの平行タタキ、口縁部はヨコナデ。内面:左上がりのケズリ。	267	古式土師器	高杯	SD2	_	13.7	_	脚部は中空。外面:脚部はタテ位のミガキ、裾部端にヘラ描沈線 1 条。内面:上半はしぼり目、 裾部はヨコ位ハケメ、裾部端はヨコナデ。
269 古式土師器 直口壺 SD4 (15.6)	268	古式土師器	有孔鉢	SD2	(15.9)	3.6	(12.0)	
270 古式土師器 複合口線壺 SD4 内外面ともに器壁が粗く調整不明。 271 古式土師器 甕 SD4 内外面ともに器壁が粗く調整不明。 272 古式土師器 甕 SD4 内外面ともに器壁が組く調整不明。 273 古式土師器 甕 SD4 内外面ともに器壁が組く調整不明。 274 古式土師器 甕 SD4 丸底。外面:右上がりの平行タタキ。内面:器壁が粗く調整不明。 275 古式土師器 高杯 SD4 脚部大半が中実。外面:タテ位のミガキが僅かに残る。内面:器壁が粗く調整不明。 276 古式土師器 高杯 SD4 脚部は中実。外面:タテ位のミガキが僅かに残る。内面:器壁が粗く調整不明。 277 古式土師器 小型器台 SD4 脚部は中実。外面:外面はタテ位ミガキ。内面:ヨコ位の削りが僅かに残る。 277 古式土師器 小型器台 SD4 脚部はカケメ状の痕跡が僅かに残る。他は器壁が粗く調整不明。内面:受部オナデ、脚部はカケメ状の痕跡が僅かに残る。。他は器壁が粗く調整不明。内面:受部オナデ、脚部はカケメ状の痕跡が僅かに残る。。との語:オナエ、路上の乾燥が進行してから成形したためにタテ位のひび割れが見える。内面:活計が近はナデ・オサエ、静田は板状工具によるカデつけ。 279 古式土師器 鉢 SD4 内外面ともにナデ・オサエ。 280 古式土師器 甕 SP100 (13.8) 3.2 (23.0) リ、上半はやや右上がりのケズリ。後円部タタキ出し。内面:胴部は主にタテ位いケメ、「縁部はヨコナデ。 281 古式土師器 甕 SP102 (12.6) 知面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:1000000000000000000000000000000000000	269	古式土師器	直口壺		(15.6)	_	_	外面: 胴部は左上がりのハケメ、口縁部はヨコナデ。内面: 胴部は時計回りのヨコ位ケズリ、 口縁部はヨコナデ。
272 古式土師器 甕 SD4 内外面ともにヨコナデ。 273 古式土師器 壺 SD4 丸底。外面:右上がりの平行タタキ。内面:器壁が粗く調整不明。 274 古式土師器 甕 SD4 ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ― ―	270	古式土師器	複合口縁壺	SD4	_	_	_	
273 古式土師器 壺 SD4 一 一 大庭。外面:右上がりの平行タタキ。内面:器壁が粗く調整不明。	271	古式土師器	甕	SD4		_	_	内外面ともに器壁が粗く調整不明。
274 古式土師器 褒 SD4 一 一 一 外面:頸部ヨコナデ、口縁部端面は10条一単位の擬ヨコ線文。内面:口縁部ヨコナデ、万部ケズリ。	272	古式土師器	甕	SD4	_	_	_	内外面ともにヨコナデ。
274 古式土師器	273	古式土師器	壺	SD4	-	-	-	丸底。外面:右上がりの平行タタキ。内面:器壁が粗く調整不明。
275 古式土師器 高杯 SD4	274	古式土師器	甕	SD4	_	_	_	外面: 頸部ヨコナデ、口縁部端面は10条一単位の擬ヨコ線文。内面:口縁部ヨコナデ、肩部ケズリ。
277 古式土師器 小型器台 SD4 - 外面: 受部はヨコ位の沈線状ミガキが僅かに残る。他は器壁が粗く調整不明。内面: 受部が	275	古式土師器	高杯	SD4	_	_	-	
277 古式土師器 小型丸底鉢 SD4 ー ー ナデ、脚部はハケメ状の痕跡が僅かに残る。 278 古式土師器 小型丸底鉢 SD4 (8.8) ー 5.9 丸底。外面:オサエ、胎土の乾燥が進行してから成形したためにタテ位のひび割れが見える内面:底部付近はナデ・オサエ、鉢部は板状工具によるナデつけ。 279 古式土師器 鉢 SD4 ー ー 内外面ともにナデ・オサエ。 280 古式土師器 甕 SP100 (13.8) 3.2 (23.0) り、上半はやや右上がりのアズリ。後円部タタキ出し。内面:胴部は主にタテ位ハケメ、「縁部はヨコナデ。 281 古式土師器 甕 SP102 (12.6) ー ー 外面:頸部はヨコ位の平行タタキ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ。 282 土師器 皿 SP131 8.6 5.9 1.5 内外面回転ナデ、底部回転糸切り。	276	古式土師器	高杯	SD4	_	_	_	脚部は中実。外面:外面はタテ位ミガキ。内面:ヨコ位の削りが僅かに残る。
279 古式土師器 小型火៤製	277	古式土師器	小型器台	SD4	_	_	_	外面:受部はヨコ位の沈線状ミガキが僅かに残る。他は器壁が粗く調整不明。内面:受部はナデ、脚部はハケメ状の痕跡が僅かに残る。
280 古式土師器 甕 SP100 (13.8) 3.2 (23.0) 外面:右上がりの平行タタキ、特に下半はタテ位のハケメが切る。内面:下→上方向のケス リ、上半はやや右上がりのケズリ。後円部タタキ出し。内面:胴部は主にタテ位ハケメ、「縁部はヨコナデ。 281 古式土師器 甕 SP102 (12.6) 外面:頸部はヨコ位の平行タタキ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りのごコ位ケズリ、口縁部はヨコナデ。 282 土師器 皿 SP131 8.6 5.9 1.5 内外面回転ナデ、底部回転糸切り。	278	古式土師器	小型丸底鉢	SD4	(8.8)	_	5.9	丸底。外面:オサエ、胎土の乾燥が進行してから成形したためにタテ位のひび割れが見える。 内面:底部付近はナデ・オサエ、鉢部は板状工具によるナデつけ。
280 古式土師器 甕 SP100 (13.8) 3.2 (23.0) リ、上半はやや右上がりのケズリ。後円部タタキ出し。内面:胴部は主にタテ位ハケメ、「縁部はヨコナデ。 281 古式土師器 甕 SP102 (12.6) - - 外面:頸部はヨコ位の平行タタキ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りの:コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ。 282 土師器 皿 SP131 8.6 5.9 1.5 内外面回転ナデ、底部回転糸切り。	279	古式土師器	鉢	SD4	_	_	_	内外面ともにナデ・オサエ。
281 古式土師器 選 SP102 (12.6) - コ位ケズリ、口縁部はヨコナデ。 282 土師器 皿 SP131 8.6 5.9 1.5 内外面回転ナデ、底部回転糸切り。	280	古式土師器	甕	SP100	(13.8)	3.2	(23.0)	外面:右上がりの平行タタキ、特に下半はタテ位のハケメが切る。内面:下→上方向のケズ リ、上半はやや右上がりのケズリ。後円部タタキ出し。内面:胴部は主にタテ位ハケメ、口 縁部はヨコナデ。
	281	古式土師器	甕	SP102	(12.6)	_		外面:頸部はヨコ位の平行タタキ、口縁部はヨコナデ・オサエ。内面:頸部は時計回りのヨコ位ケズリ、口縁部はヨコナデ。
283 瓦質土器 椀 SD6 (14.1) (5.0) 4.6	282	土師器	Ш	SP131	8.6	5.9	1.5	内外面回転ナデ、底部回転糸切り。
	283	瓦質土器	椀	SD6	(14.1)	(5.0)	4.6	

色調	焼成	胎土	図版番号	写真 図版
10YR5/2灰黄褐色 2.5Y8/2灰白色~8/3淡黄色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒をを多く、径 4 mm大の石英粒・ 長石粒を稀に含む。	34	
10YR4/6褐色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・角閃石粒・雲母片を含む。	34	外来系(河内産)
2.5Y7/1灰白色~7.5YR7/4にぶい橙色 7.5YR1.7/1黒色~7.5YR7/3にぶい橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	34	
10YR8/1灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	34	内面底面に籾圧痕。
10YR8/3浅黄橙色 7.5YR8/3浅黄橙色	軟質	径0.5mm石英粒・長石粒を少量含む。	34	
7.5YR7/1明褐灰色 5YR8/4淡橙色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	34	
10YR8/1灰白色~10YR7/1灰白色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を少量含む。	34	
10YR4/2灰黄褐色 2.5Y8/2灰白色~2.5Y3/1黒褐色	軟質	径3mm大の石英粒・長石粒を多く含む。	34	外面に黒斑。
7.5YR8/1灰白色 7.5YR7/3にぶい橙色~7.5YR4/1褐灰色	甘	径 2 mm大の石英粒・長石粒・茶褐色粒(チャートか?)を多く含む。	34	
10YR8/2灰白色 10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・雲母片?を含む。	34	
5YR7/4にぶい橙色 5YR7/6橙色	軟質	径 3 mm大の石英粒・長石粒・茶褐色粒・茶褐色粒(チャートか?)を含む。	34	外面スス、内面コゲ。
10YR6/1褐灰色 10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・橙褐色粒を含む。	34	
10YR8/3浅黄橙色 7.5YR8/4浅黄橙色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含むが、やや粗い。	34	外面スス、内面コゲ。
7.5YR8/3浅黄橙色 2.5Y8/2灰白色	良好	径0.5mm以下の長石粒を少量含む。	34	外来系(近江系か?)
10YR7/1灰白色	良好	径 2 mm以下の石英粒・長石粒・角閃石粒を少量含む。	34	外来系(讃岐産)
7.5YR8/6浅黄色 7.5YR8/4浅黄色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒・灰色粒(結晶片岩か?)を含む。	35	
10YR8/2灰白色 10YR7/2にぶい黄橙色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・雲母片を含むが比較的精良。	35	対向位置に円孔4個。
10YR6/4にぶい黄橙色 10YR5/3にぶい黄橙色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒・黒褐色粒を多く含む。	35	
7.5YR8/6浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を少量含む。	35	対向位置に円孔4個。
7.5YR8/2灰白色 10YR8/1灰白色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・橙褐色粒・灰色粒、径 5 mm大の長石粒 を稀に含む。	35	底部に焼成前穿孔。
10YR8/3浅黄橙色 10YR8/1灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35	
10YR8/3浅黄橙色.2.5Y7/1灰白色 N6/灰色,7.5YR7/4にぶい橙色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	35	
7.5YR8/3浅黄橙色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を少量含む。	35	
7.5YR8/2灰白色 7.5YR8/6浅黄橙色	良好	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・黒褐色粒をやや多く含む。	35	在地産か不明。
2.5Y7/2灰黄色 5YR5/6明赤褐色	軟質	径 2 mm以下の石英粒・長石粒を多く含む。	35	
2.5Y7/3浅黄色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・両者の噛み合い・角閃石を少量含む。	35	外来系 (吉備産)
10YR8/2灰白色	良好	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	35	
5YR7/3にぶい橙色 2.5YR7/6橙色	軟質	径 2 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35	おそらく対向位置に円孔 2個。
7.5YR8/3浅黄橙色 10YR8/2灰白~7.5YR8/3浅黄橙色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒、径 1 mm大の赤褐色粒をやや多く含む。	35	
10YR8/2灰白色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒・赤褐色粒を含む。	35	
10YR8/2灰白色	軟質	径 1 mm以下の石英粒・長石粒、径 5 mm以下の赤褐色粒をやや多く含む。	35	
	軟質	径 1 mm大の赤褐色粒を・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35	図上復元。
10YR8/2灰白色 2.5Y8/2灰白色	軟質	径 1 mm大の石英粒・長石粒・赤褐色粒を多く含む。	35	
10YR8/2灰白色~10YR6/1褐灰色 5YR7/4にぶい橙色~5YR7/1明褐灰色	軟質	径0.5mm以下の石英粒・長石粒をやや多く、雲母片?を少量含む。	35	
7.5Y8/1灰白色~7.5Y6/1灰色 N7/灰白色~7.5Y6/1灰色	軟質		35	

図 版



和久遺跡の位置 (S=1:200,000)

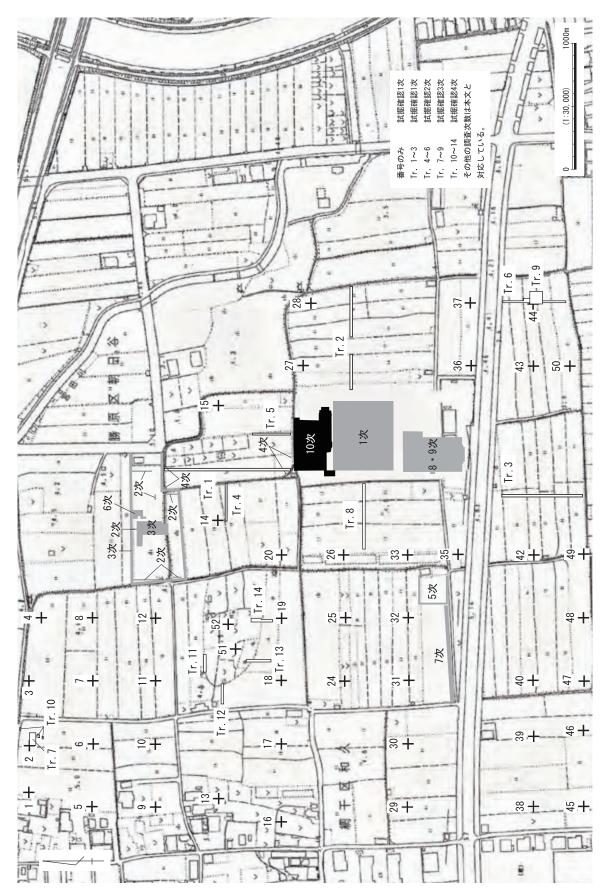


【集落遺跡】

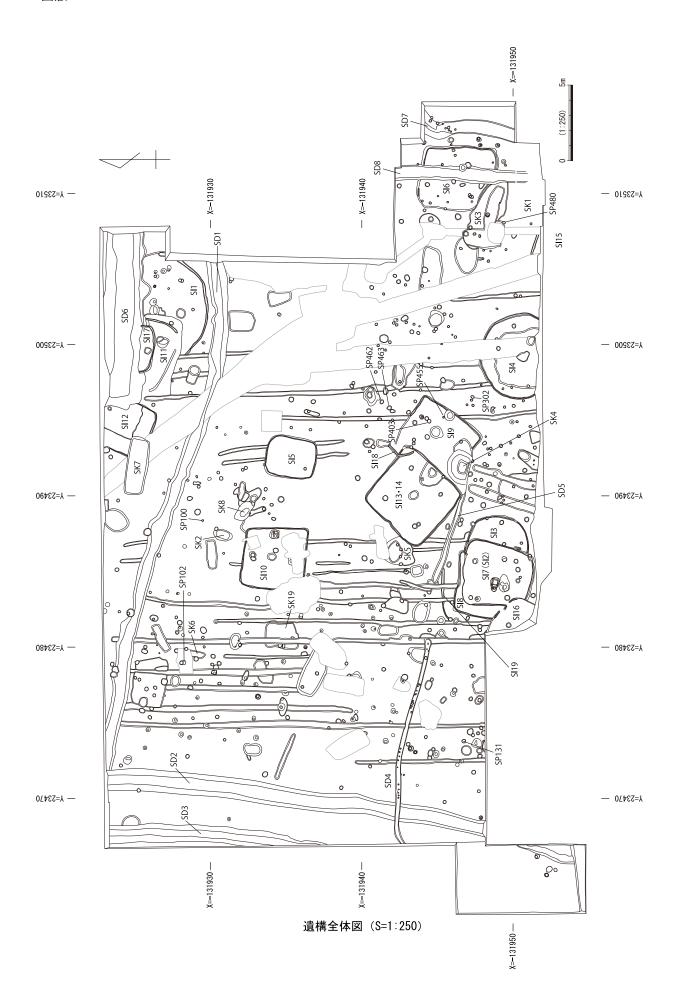
- 1 和久遺跡 2 大津茂川床遺跡 3 川島遺跡 4 檀特山山頂遺跡 5 ツクワ遺跡
- 6 下太田遺跡 7 檀特山遺跡 8 丁・柳ヶ瀬遺跡 9 南山戸遺跡 10 山戸遺跡
- 11 茶屋遺跡 12 坂出遺跡 13 鵤遺跡 14 鵤石田遺跡 15 立岡遺跡
- 16 蓮常寺北遺跡 17 中筋遺跡 18 地蔵寺遺跡 19 沖代遺跡 20 福地相坂遺跡
- 21 関ノ口遺跡

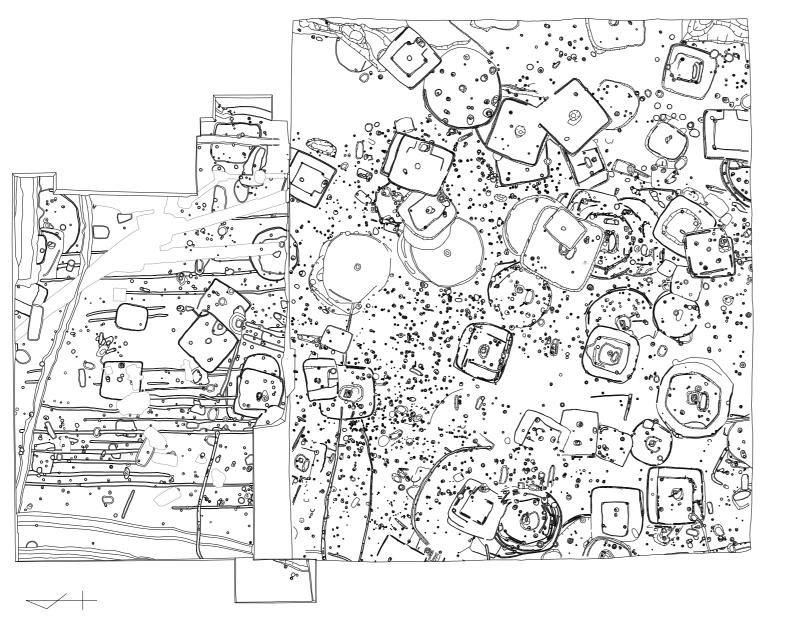
【墳丘墓•前期古墳】

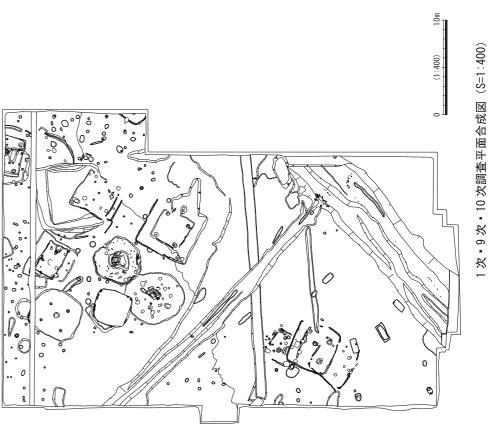
- A 黒岡山古墳(墳丘墓) B 檀特山1号墳 C 檀特山3号墳 D 瓢塚古墳
- E 山戸4号墳

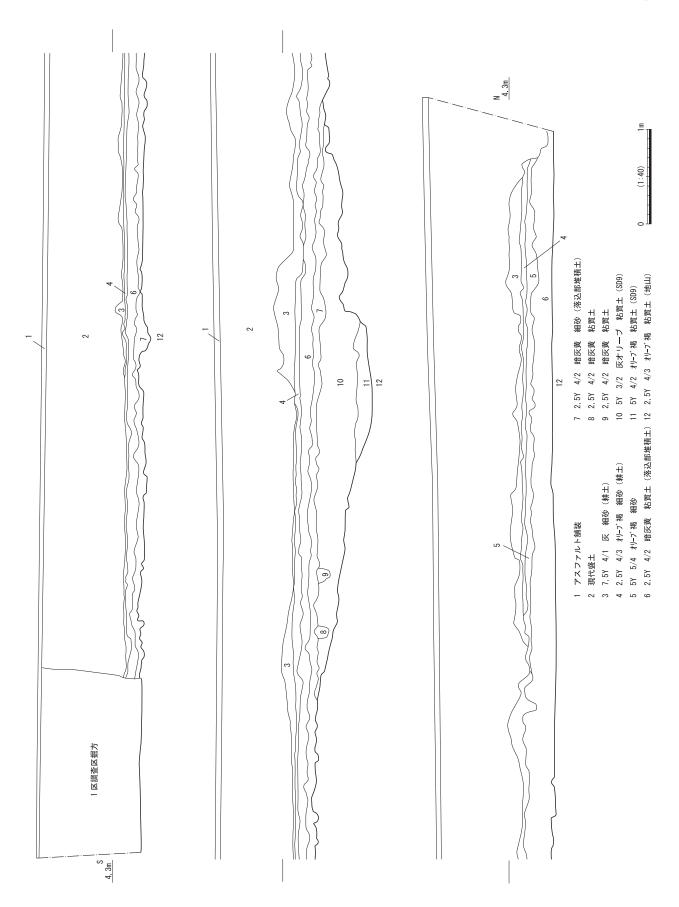


和久遺跡における既往の調査 (S=1:3,000)

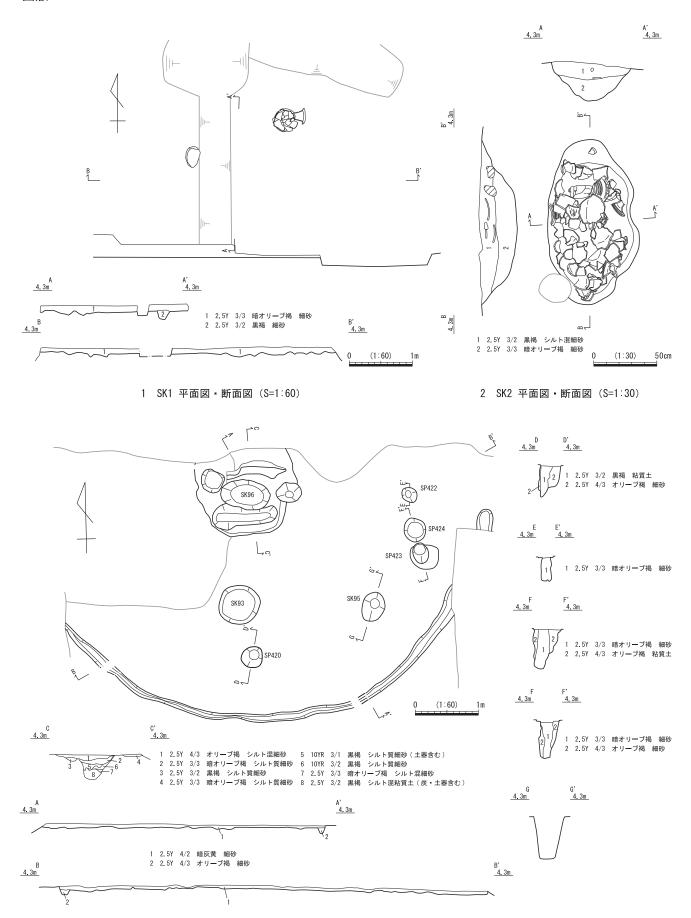




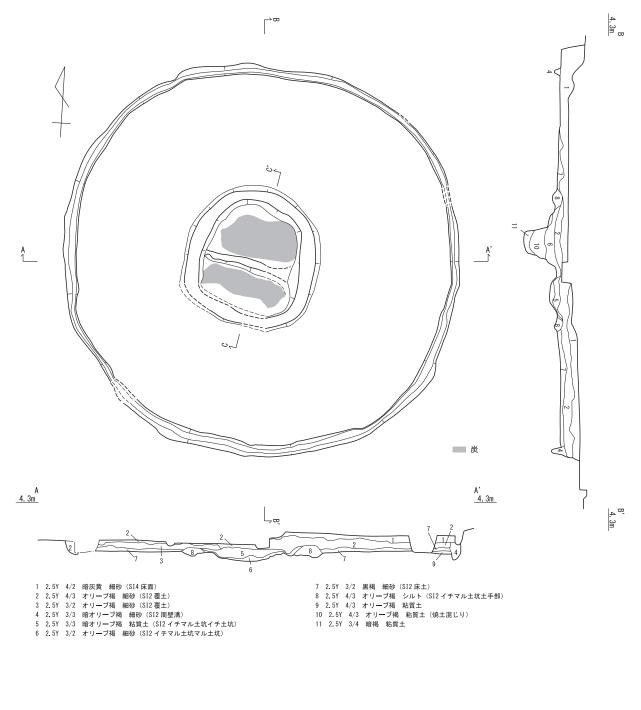


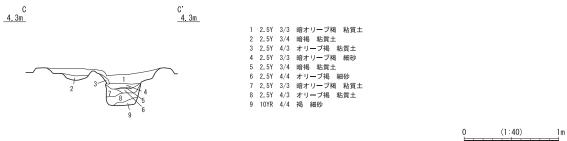


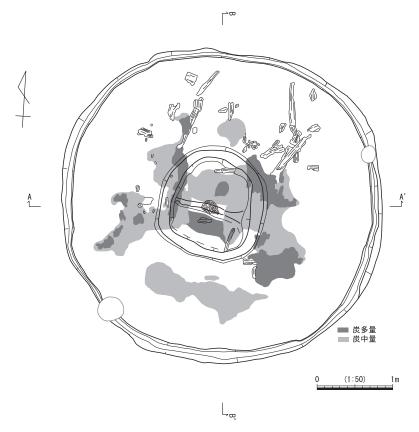
調査区西壁土層断面図(S=1:40)



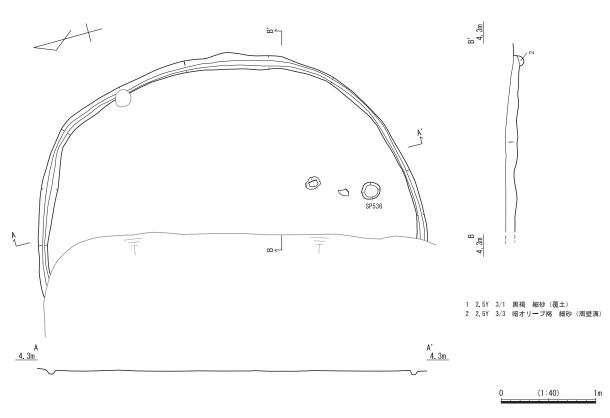
3 SI1 平面図 - 断面図 (S=1:60)



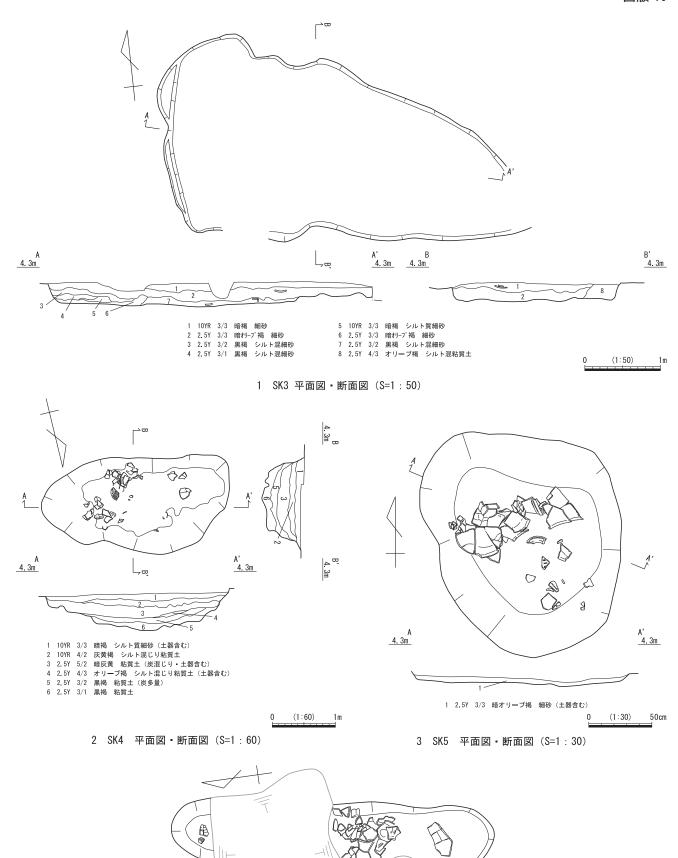




1 SI2炭化材検出状況 平面図(S=1:50)



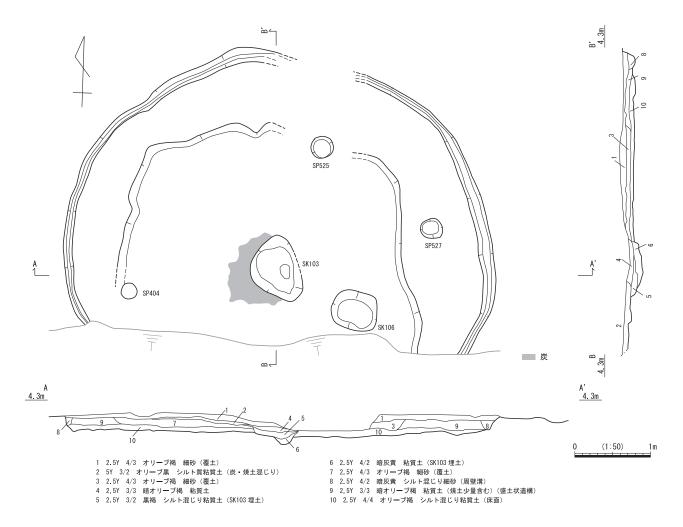
2 SI3 平面図・断面図 (S=1:40)



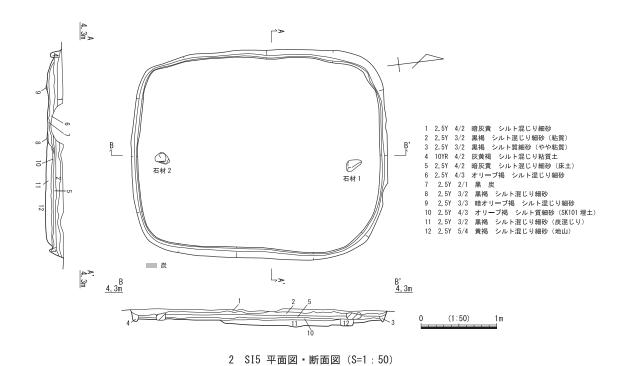
4 SK6 平面図・断面図 (S=1:25)

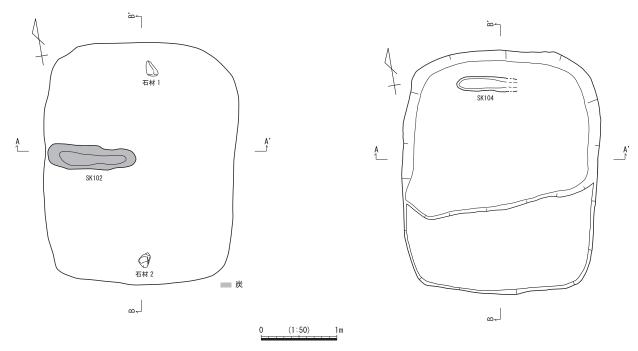
(1:25)

50cm

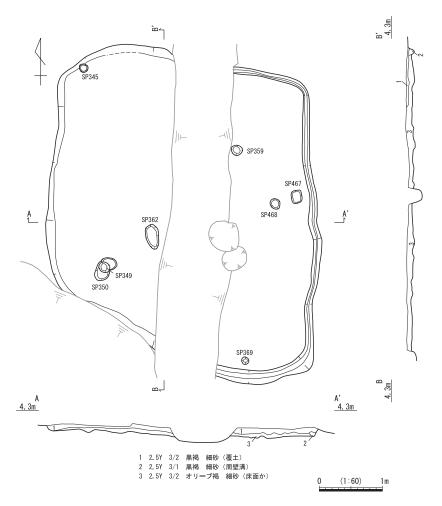


1 SI4 平面図・断面図 (S=1:50)

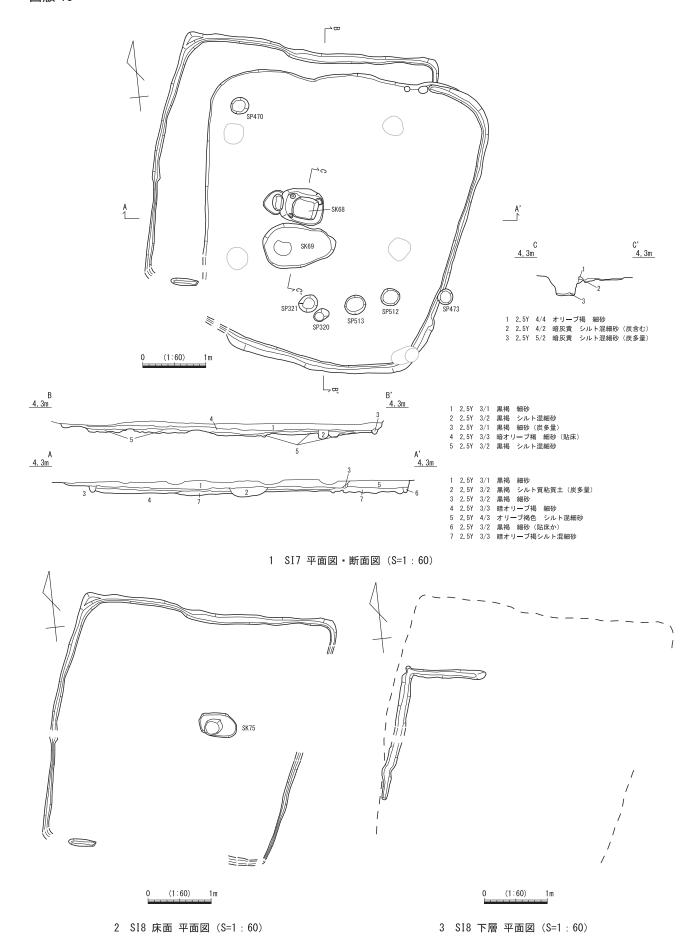


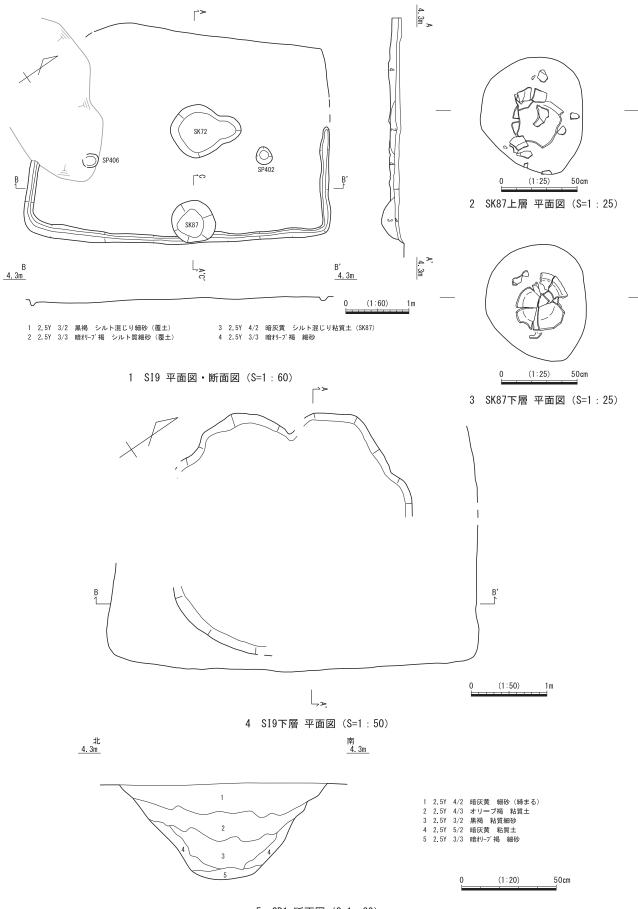


1 SI5・SI5下部構造 平面図・断面図 (S=1:50)

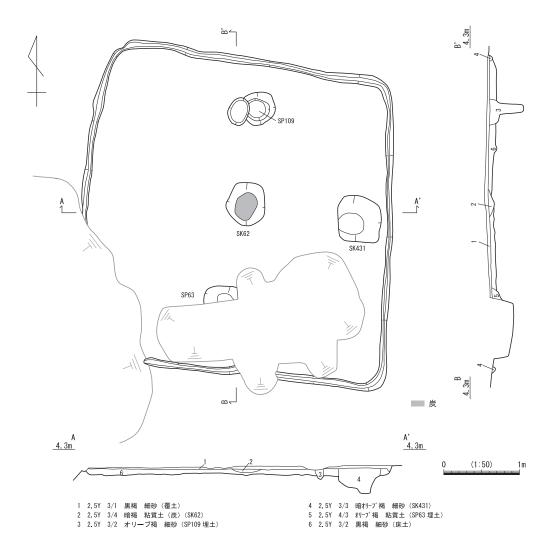


2 SI6 平面図・断面図 (S=1:60)

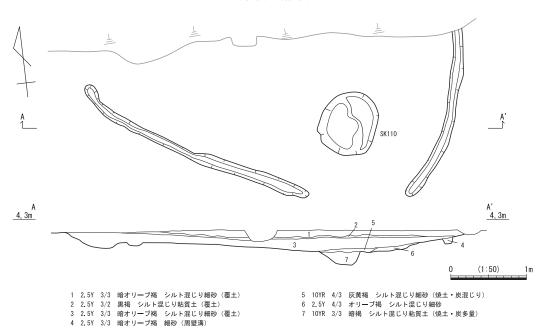




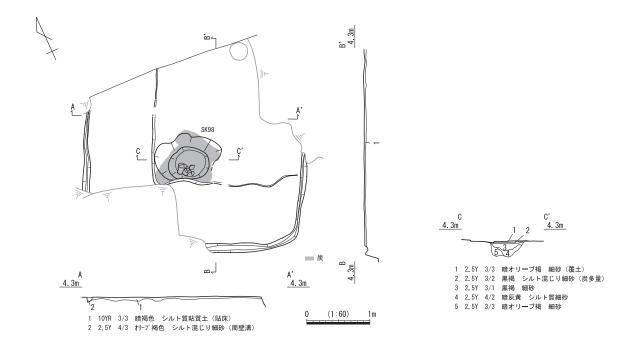
5 SD1 断面図 (S=1:20)



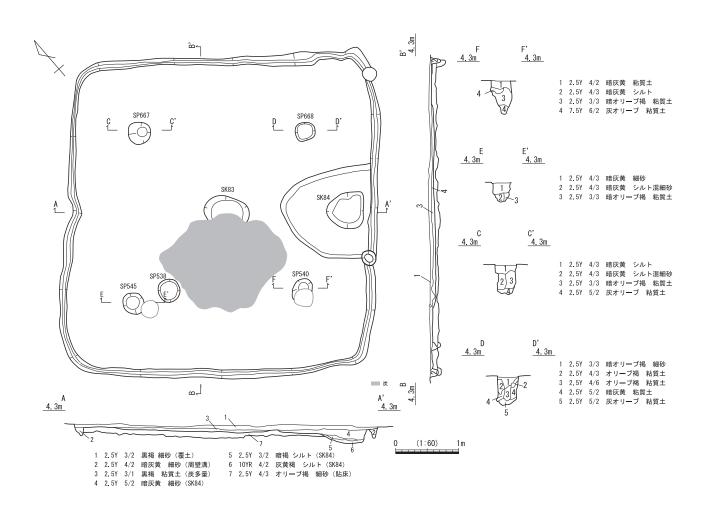
1 SI10 平面図・断面図 (S=1:50)



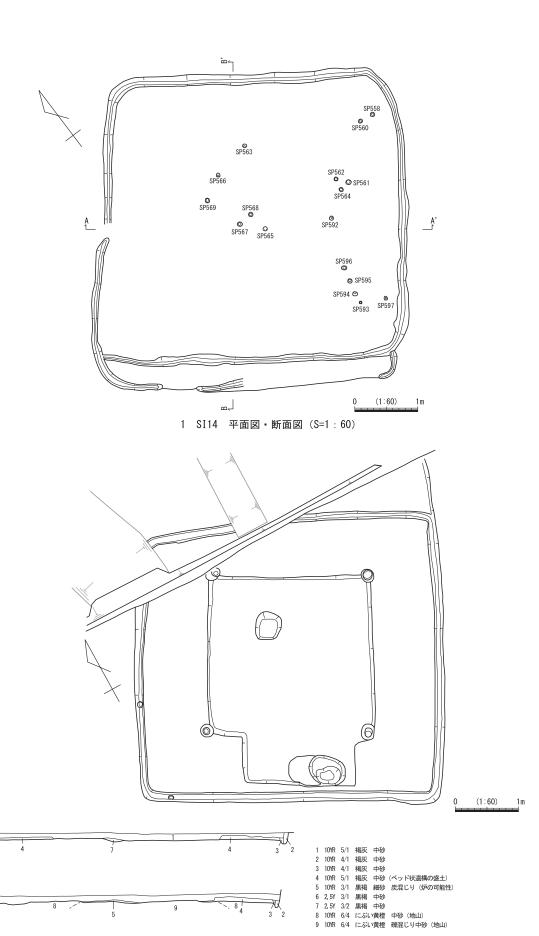
2 SI11 平面図・断面図 (S=1:50)



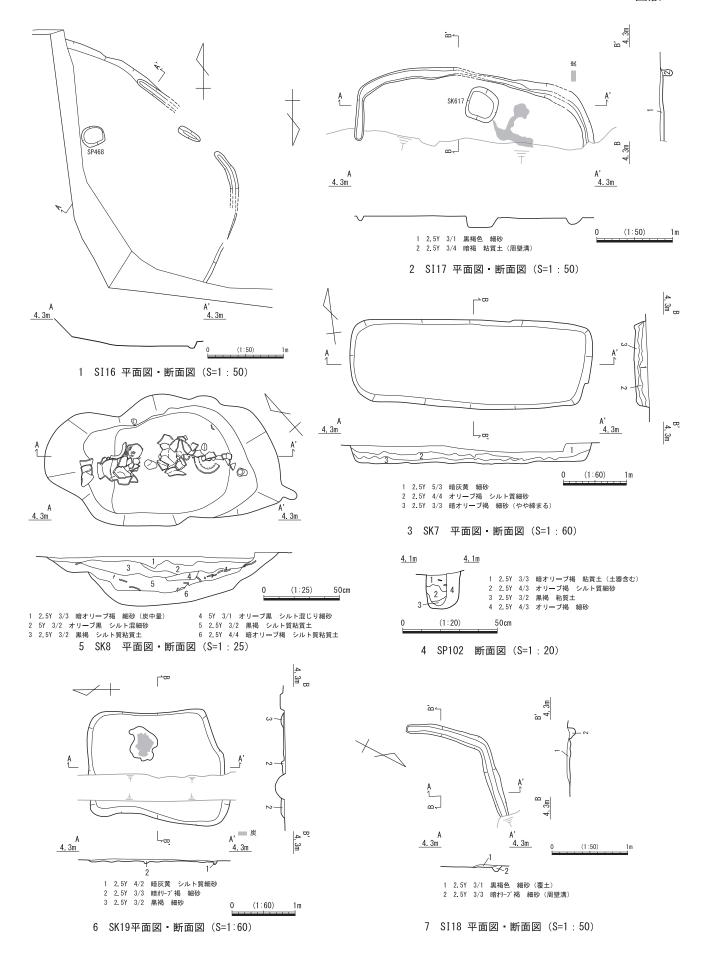
1 SI12 平面図・断面図 (S=1:60)

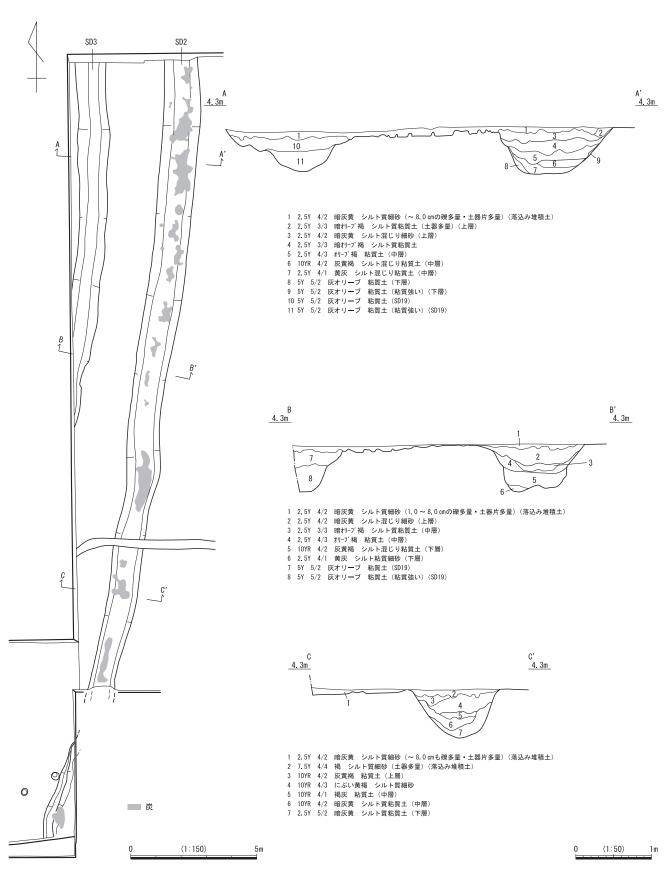


2 SI13平面図・断面図 (S=1:60)

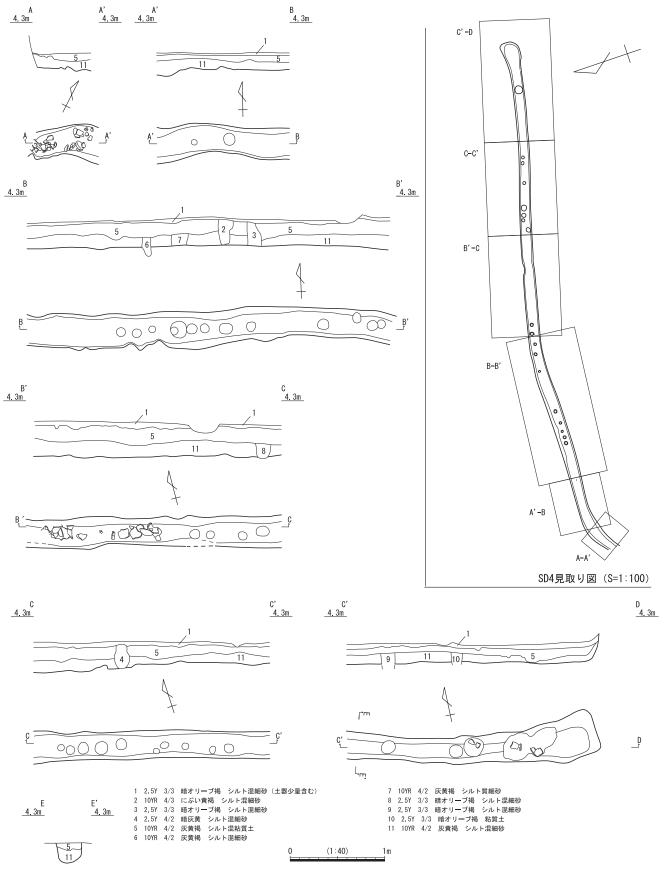


2 SI15 平面図・断面図(第1次調査SH01の実測図を合成)(S=1:60)

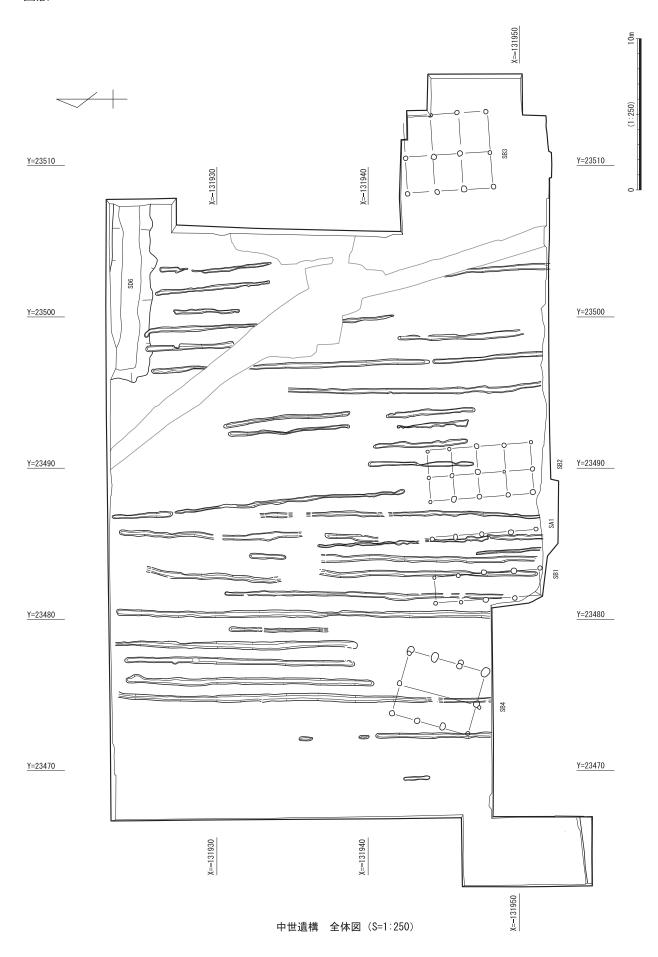


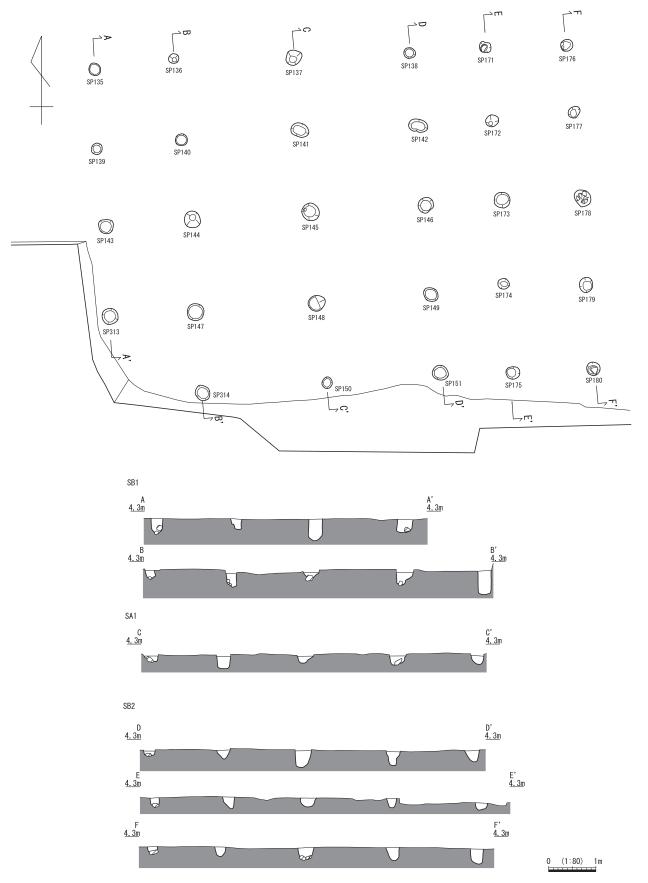


SD2 - 3平面図 (S=1:150) 、断面図 (S=1:50)

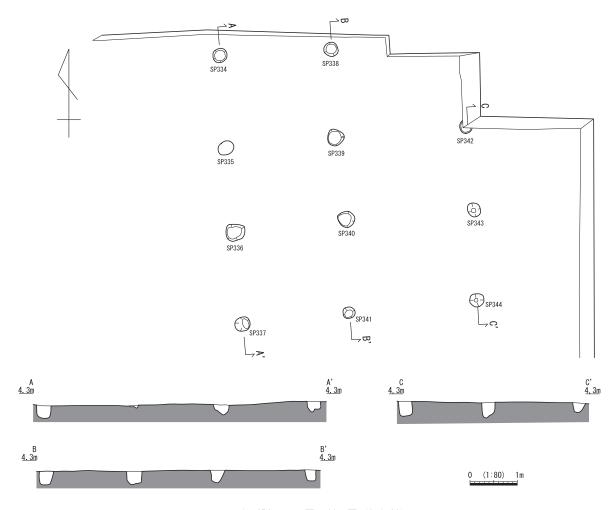


SD4平面図・断面図 (S=1:40)

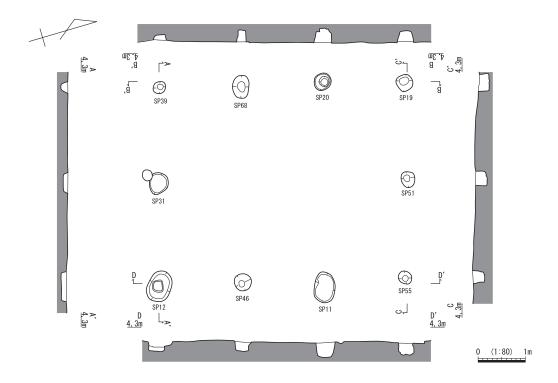




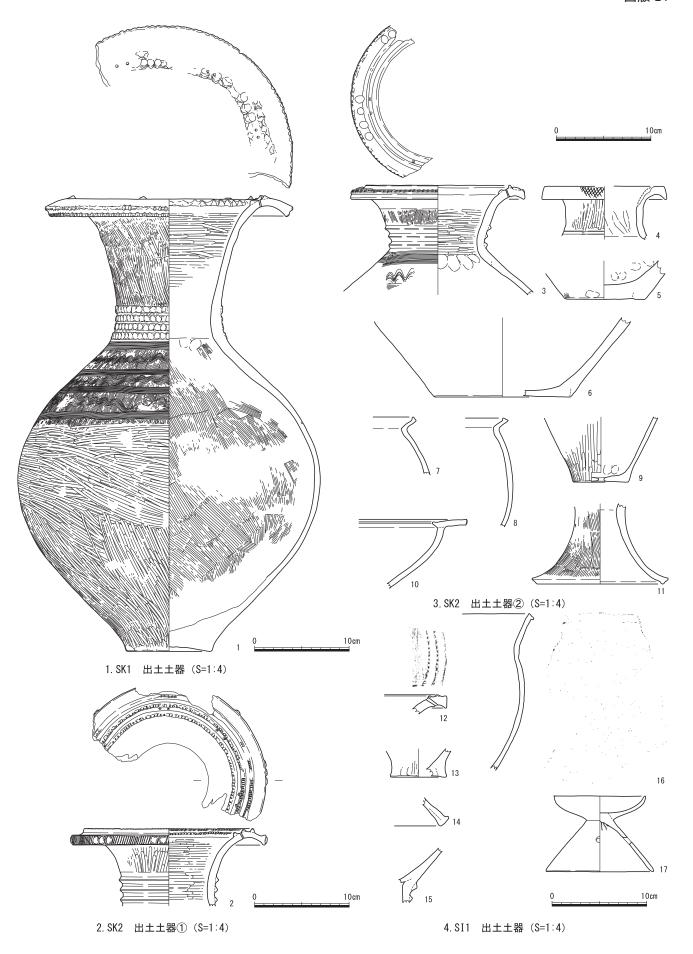
SB 1 • 2 • SA1 平面図 • 断面図 (S=1:80)

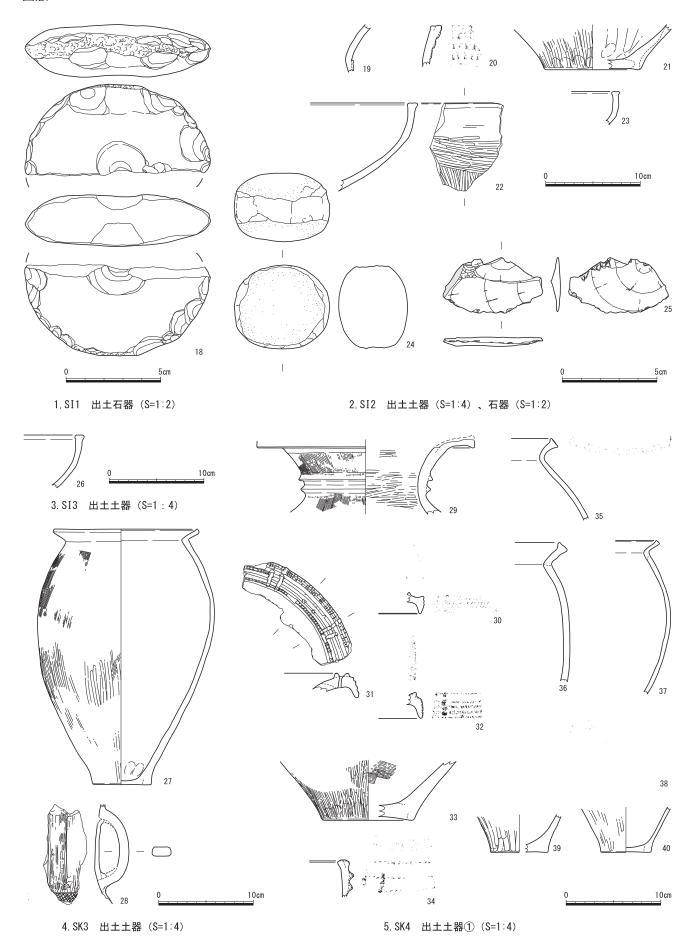


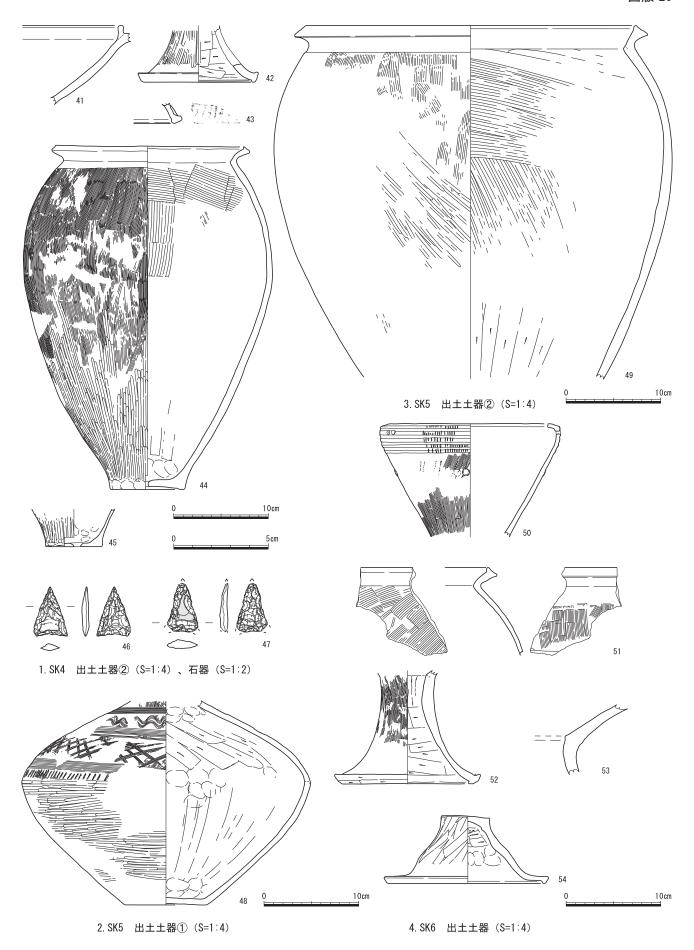
1 SB3 平面図・断面図 (S=1:80)

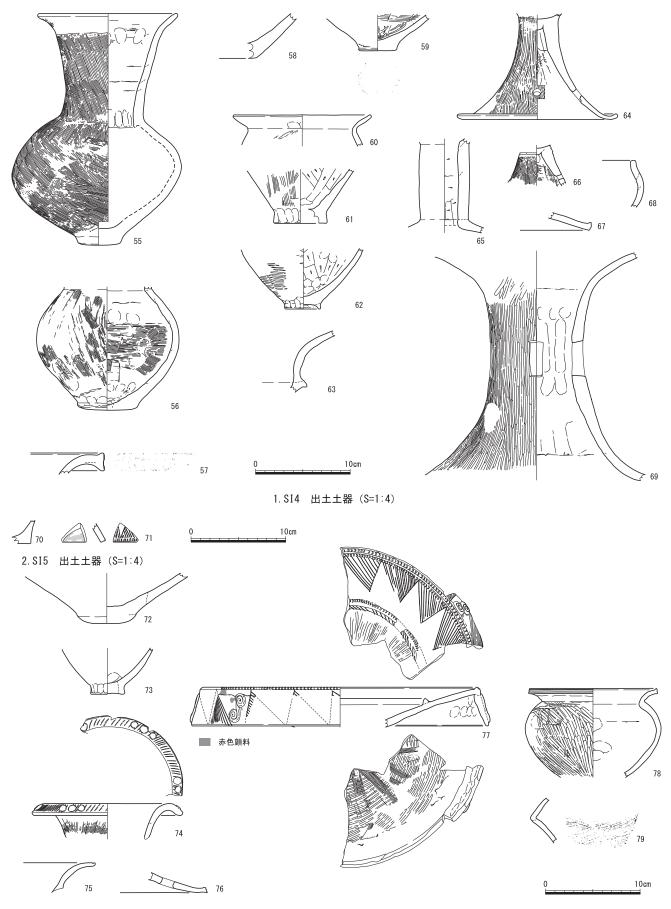


2 SB4 平面図・断面図 (S=1:80)

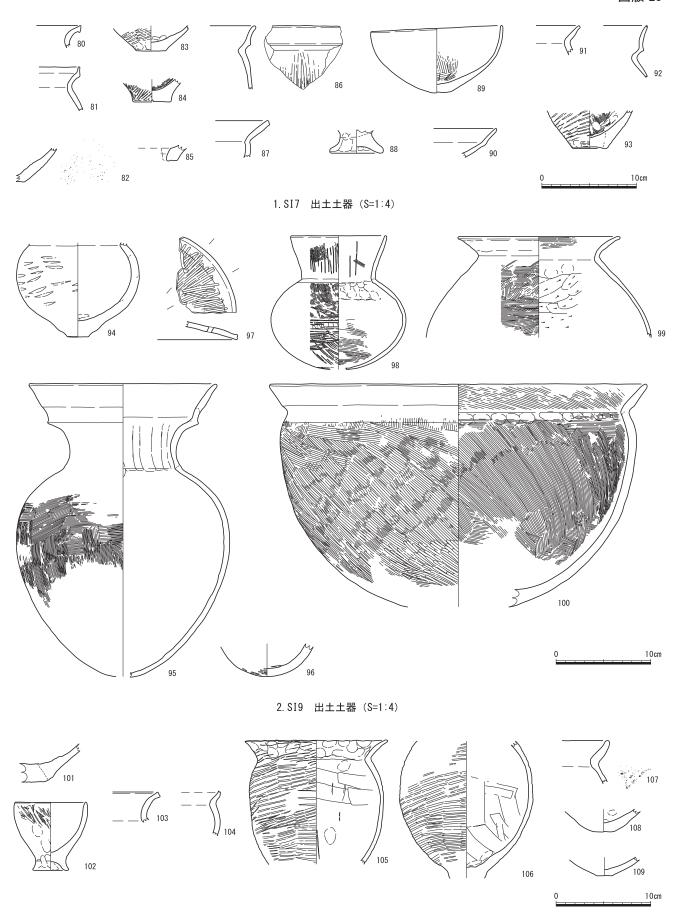




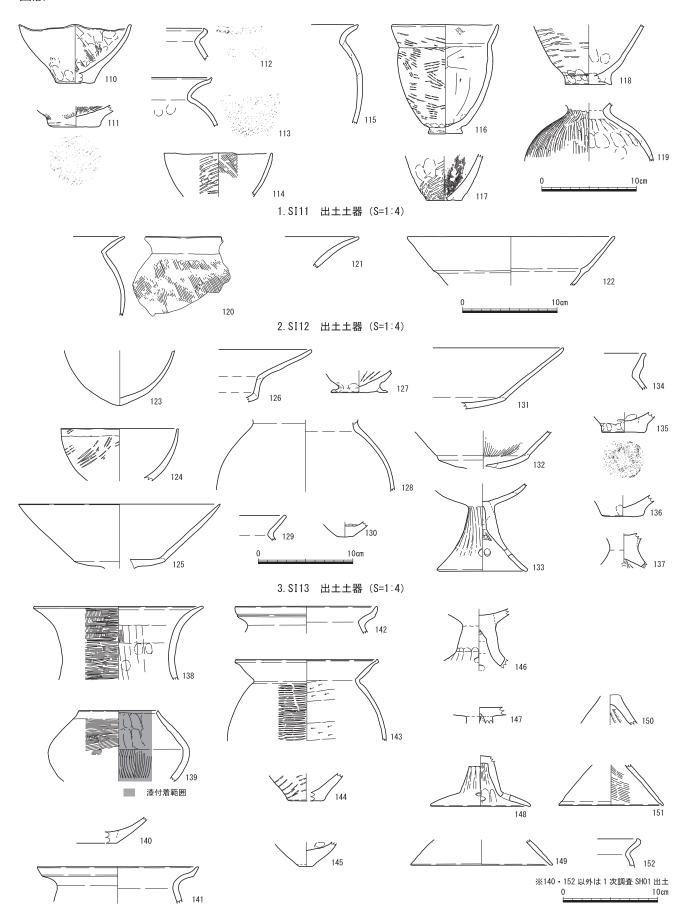




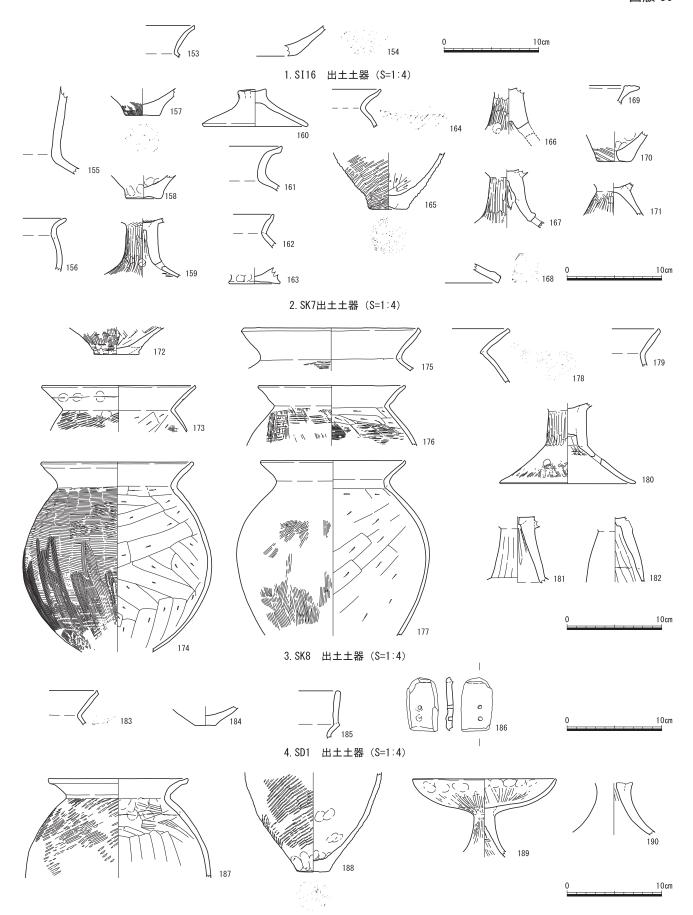
3. SI6 出土土器 (S=1:4)



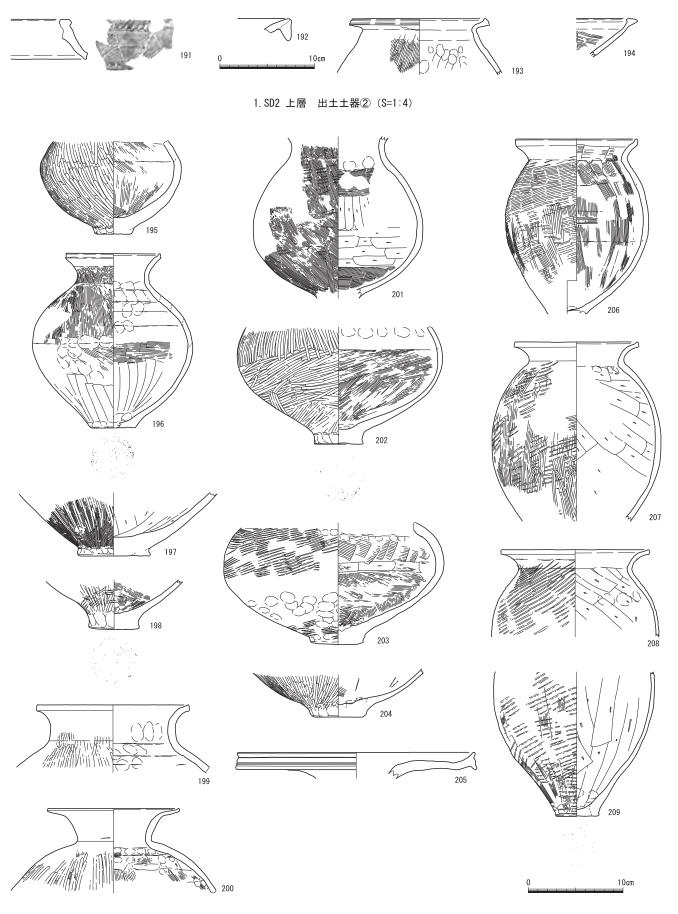
3. SI10 出土土器 (S=1:4)



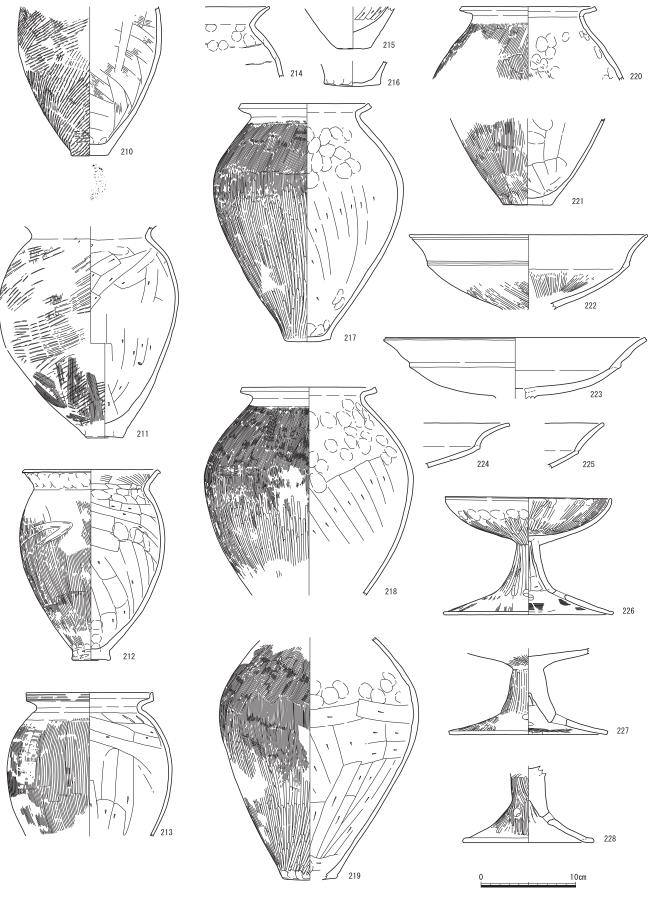
4. SI15 出土土器 (S=1:4)



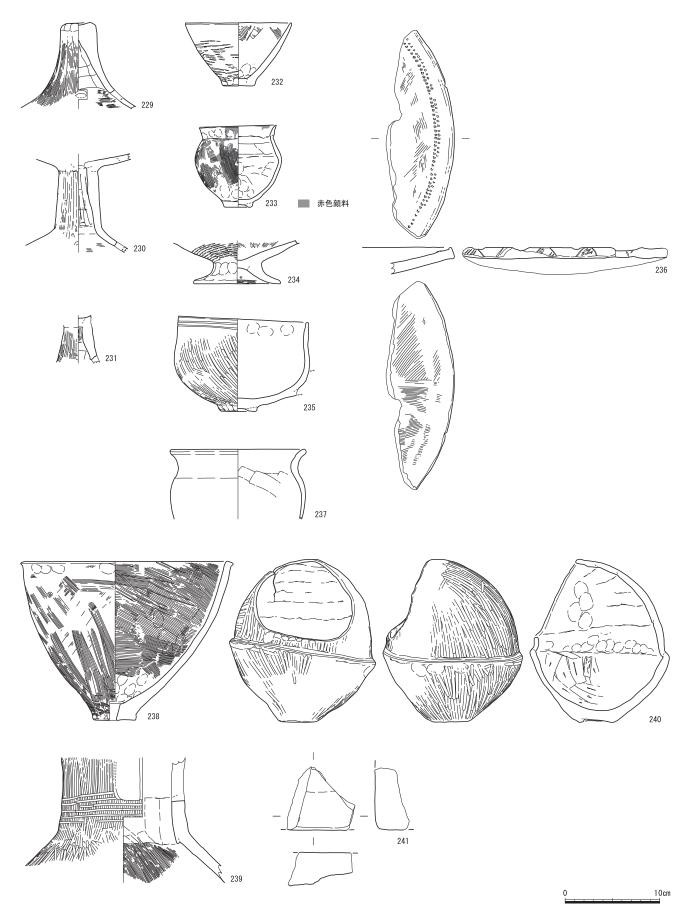
5. SD2 上層 出土土器① (S=1:4)



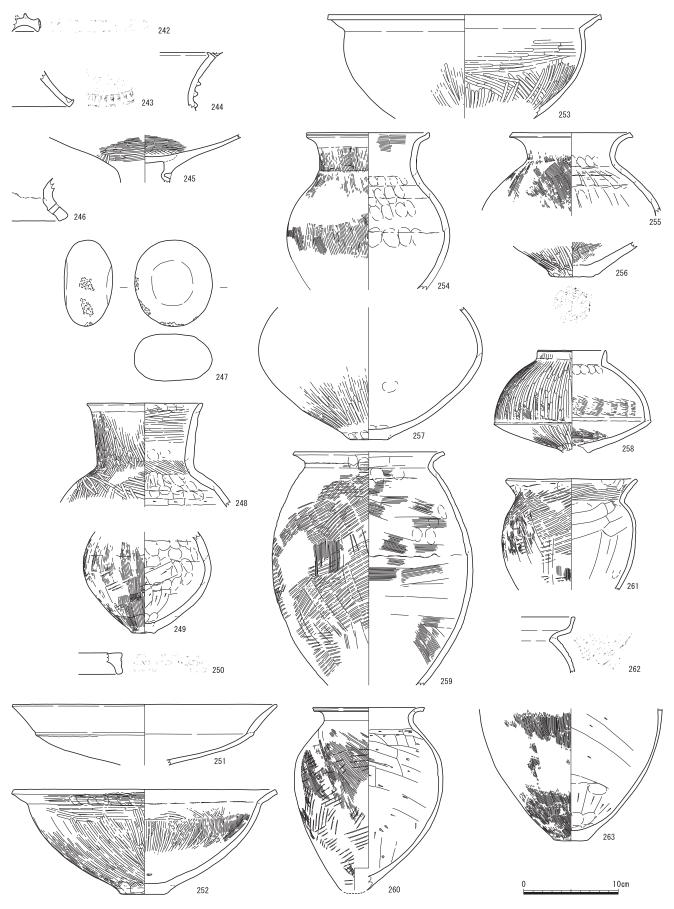
2. SD2 中層 出土土器① (S=1:4)



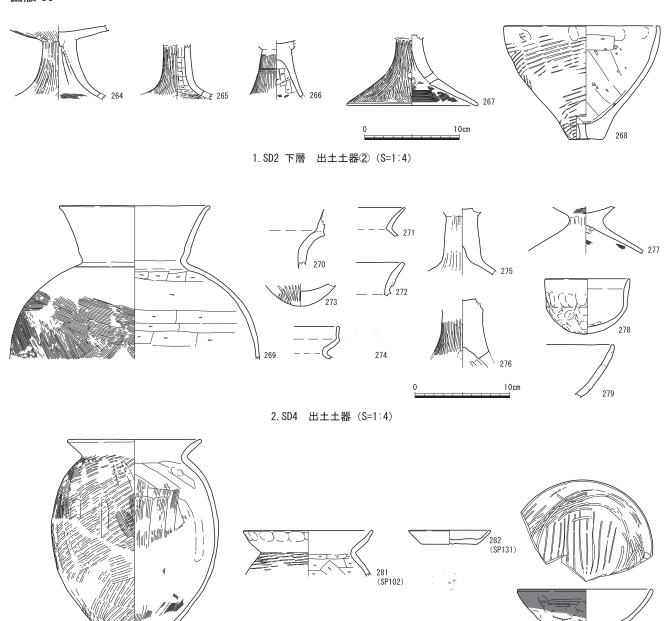
SD2 中層 出土土器② (S=1:4)



SD2 中層 出土土器③ (S=1:4)、石器 (S=1:4)



SD2 下層 出土土器① (S=1:4)、石器 (S=1:4)



3. その他の遺構 (S=1:4)

280 (SP100)

10cm

重ね焼き痕



調査区南西部全景(北から)



SD2土器検出状況(北から)



SD2手焙形土器検出状況(南から)



SD2土器検出状況(北西から)



SD2土器検出状況詳細(北西から)



SD2断面状況(北から)



調査区南西部東壁断面状況(北西から)



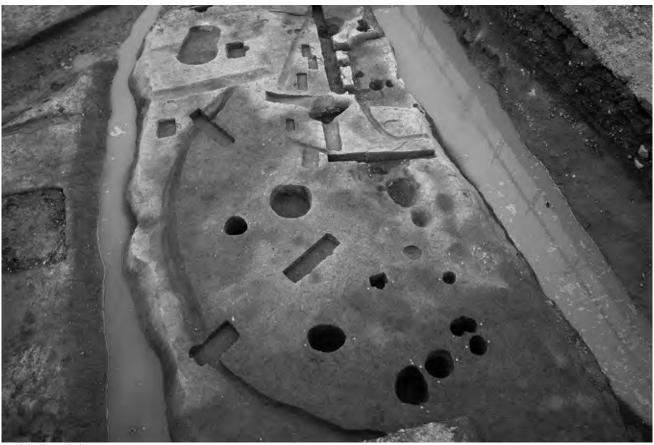
調査区全景(北東から)



SI1炭化材検出状況(南西から)



SI1全景(北西から)



SI1完掘状況(南東から)



SI1イチマル土坑検出状況(南東から)



SI1炭化材断面状況(南から)



SI1炭化材断面状況(南から)



SK93検出状況(東から)



SI2炭化材検出状況(北西から)



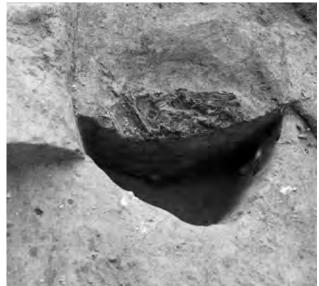
SI2全景(北西から)



SI2イチマル土坑検出状況(北から)



SI2イチマル土坑検出状況(北から)



SI2イチマル土坑マル土坑断面状況(東から)





SI2イチマル土坑イチ土坑断面状況(西から)



SI3全景(北東から)



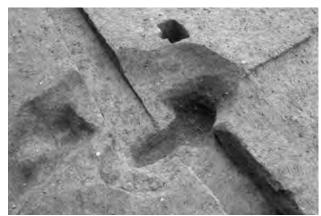
SI4全景(北西から)



SI4ベッド状遺構断面状況(東から)



SI4土器検出状況(北東から)



SI4内SK103検出状況(南東から)



SI4完掘状況(北から)



SI5全景(南から)



SI5下部構造全景(北から)



SI5石材1検出状況(東から)



SI5内SK98検出状況(東から)



SI5石材2検出状況(西から)



SI5内SK98断面状況(南東から)



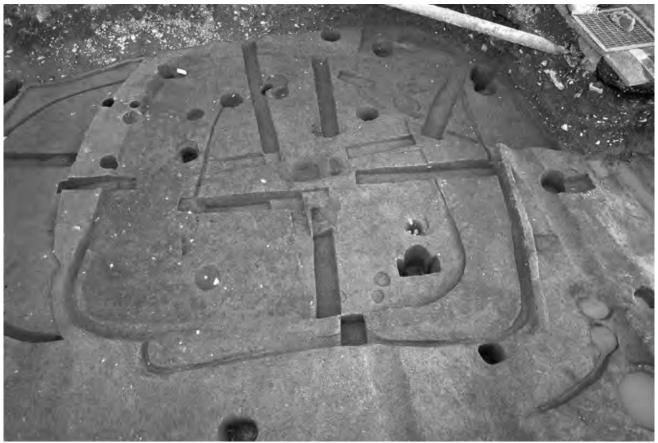
SI6全景(東から)



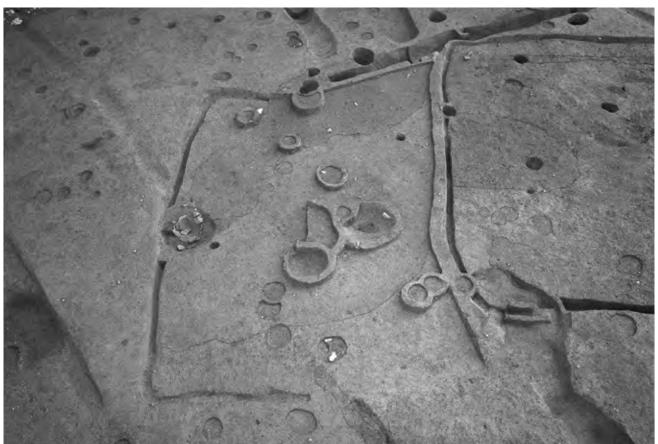
SI7全景(北から)



SI7イチマル土坑検出状況(北から)



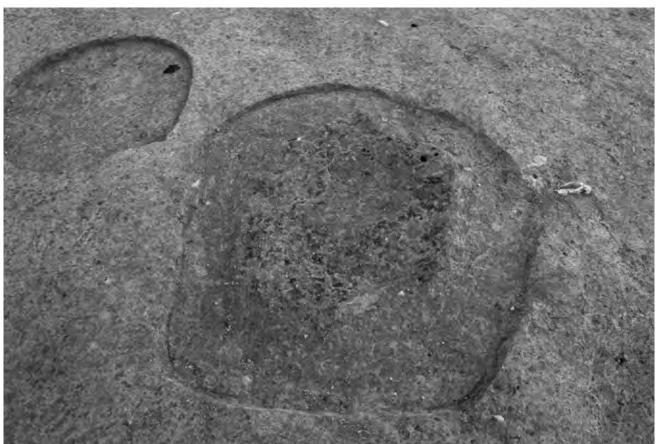
SI8全景(北から)



SI9全景(北から)



SI10全景(北から)



SI10内SK62検出状況(北から)



SI10内SP109断面状況(北から)



SI10内SP63断面状況(南から)



SI10内SK431土器検出状況(北東から)





SI10内SK431断面状況(北から)



SI10内SK431完掘状況(北から)



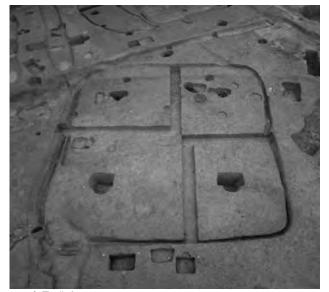


SI11全景(北西から)

SI12全景(南東から)



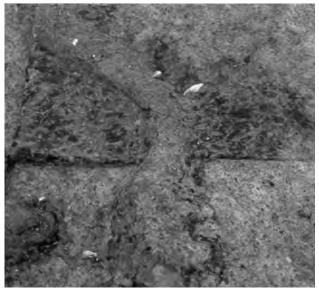
SI12内中央燃焼土坑検出状況(西から)



SI13全景(北東から)



SI13内中央燃焼土坑検出状況(北から)



SI13内中央燃焼土坑土手検出状況(北から)



SI14全景(北東から)



SI13内中央燃焼土坑検出状況(北から)



SI13内中央燃焼土坑土手部断面状況(東から)



SI15全景(北から)



SI16全景(北西から)



SI17全景(南東から)



SI17完掘状況(南東から)



SD2検出状況(南から)



SD2土器検出状況(北西から)



SD2土器検出状況(北東から)



SD1・2の切り合い状況(南西から)



SD2土器検出状況(西から)



SD2粘土塊検出状況(北東から)



SD2土器検出状況(北から)



SD2土器検出状況(北西から)



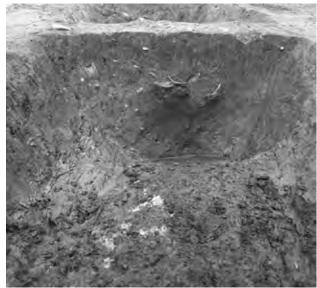
SD2炭集積部検出状況(北西から)



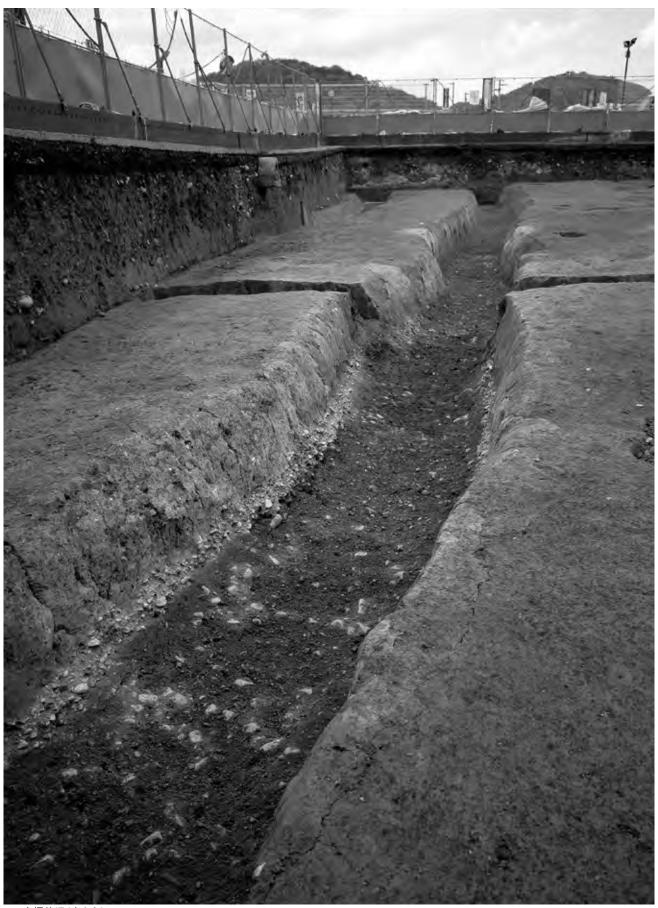
SD2土器検出状況(西から)



SD2炭集積部検出状況(北から)



SD2断面状況(北から)



SD2完掘状況(南から)



SD1断面状況(西から)



SD4全景(東から)



SD1断面状況(西から)



SD4断面状況(西から)



SD4断面状況(西から)



SD4断面状況(北東から)



SD4断面状況(北から)



SD4断面状況(北から)



SD4断面状況(北から)



SD4土器検出状況(東から)



SD7検出状況(北から)



SD7断面状況(北西から)



SD7断面状況詳細(北から)



SK19検出状況(北から)



SK48土器検出状況(東から)



SK19焼土面検出状況(北から)



SK54土器検出状況(北西から)



SK54土器検出詳細状況(北西から)



SK2検出状況(南から)



SK64検出状況(東から)



SK2土器検出状況(南西から)



SK2土器検出状況(西から)



SK64土器検出状況(北東から)



SK64土器検出状況(南から)



SP345上層土器検出状況(北西から)



SP302断面状況(北から)



SP455断面状況(南から)



SP463断面状況(南から)



SP345下層土器検出状況(南東から)



SP403断面状況(南西から)



SP462断面状況(南から)



SP463石群検出状況(南から)



調査区南東部全景(西から)



SK1土器検出状況(西から)



SP624断面状況(西から)



SK1土器検出状況(南東から)



SK1土器検出状況(北西から)



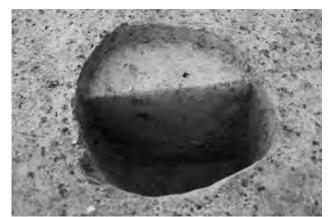
SP480断面状況(北から)



SP626断面状況(西から)



SB1·2·SA1検出状況(東から)



SP139断面状況(西から)



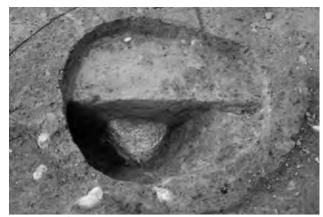
SP146断面状況(西から)



SP150断面状況(西から)



SP137断面状況(西から)



SP144断面状況(西から)



SP148断面状況(西から)



SP178根石検出状況(西から)



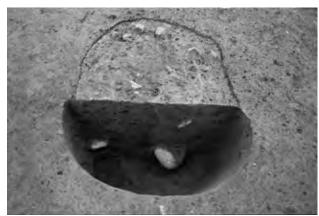
SB3検出状況(南から)



SP355断面状況(西から)



SP337断面状況(西から)



SP336断面状況(西から)



SP342断面状況(西から)



SD6断面状況(西から)



SD6断面状況(西から)

写真図版 34



調査区西壁断面(南東から)



調査区南壁断面(北西から)



現地指導状況(立命館大学 青木哲哉氏)



調査区西壁断面詳細(東から

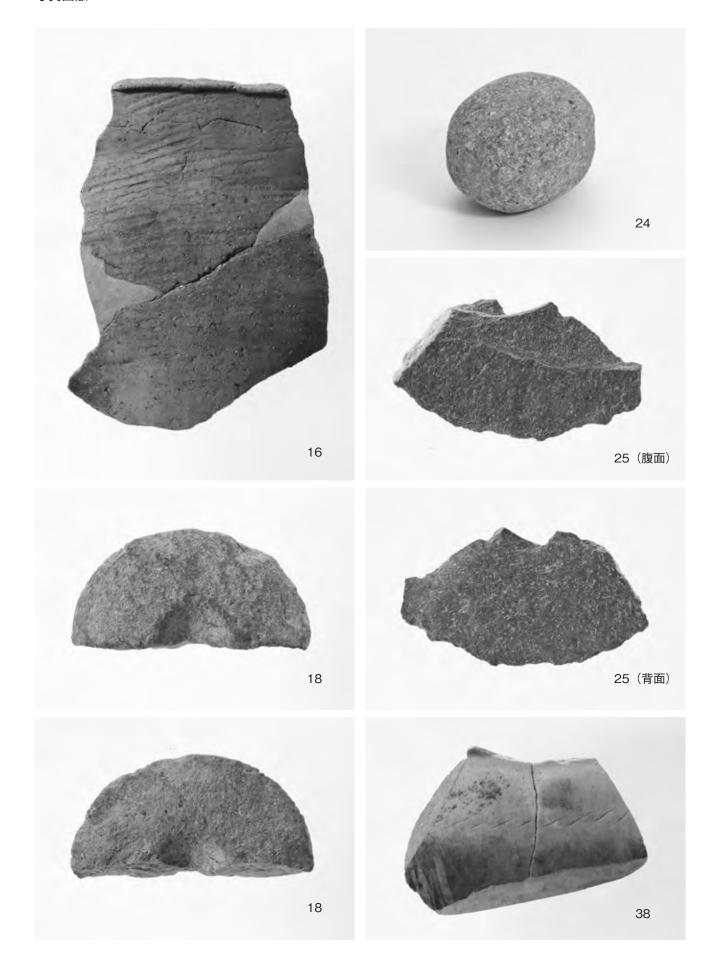


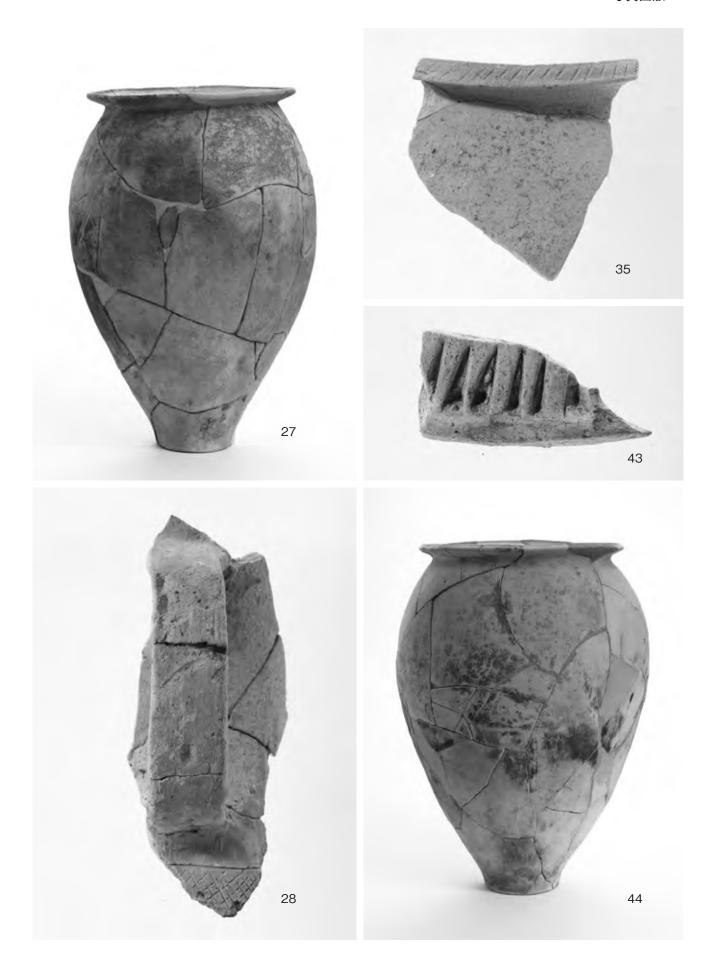
調査区南壁断面詳細(北から)

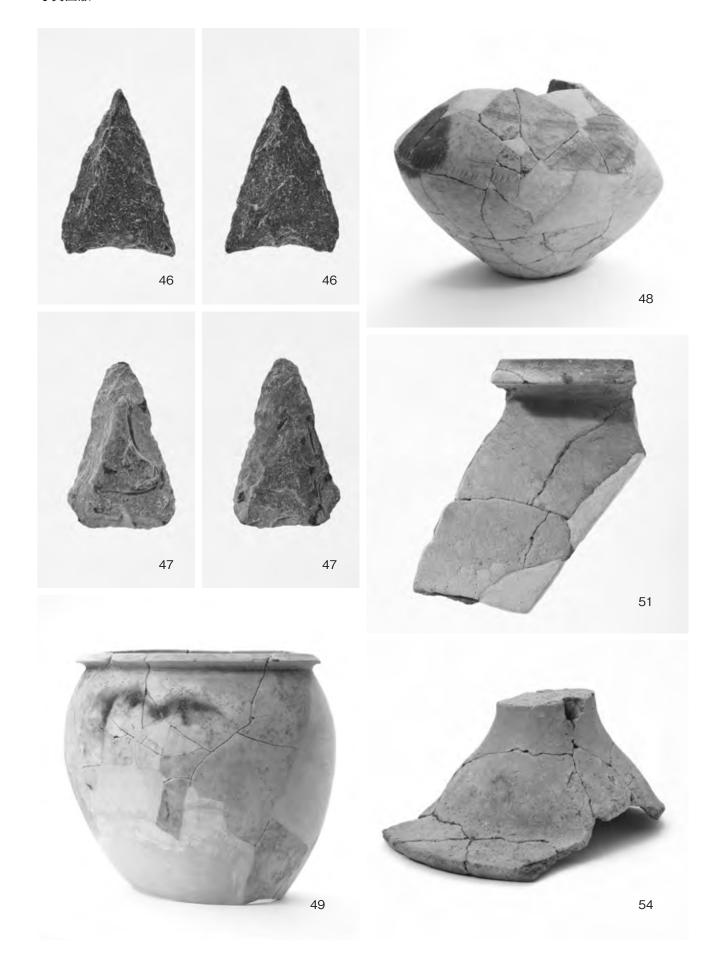


現地説明会状況

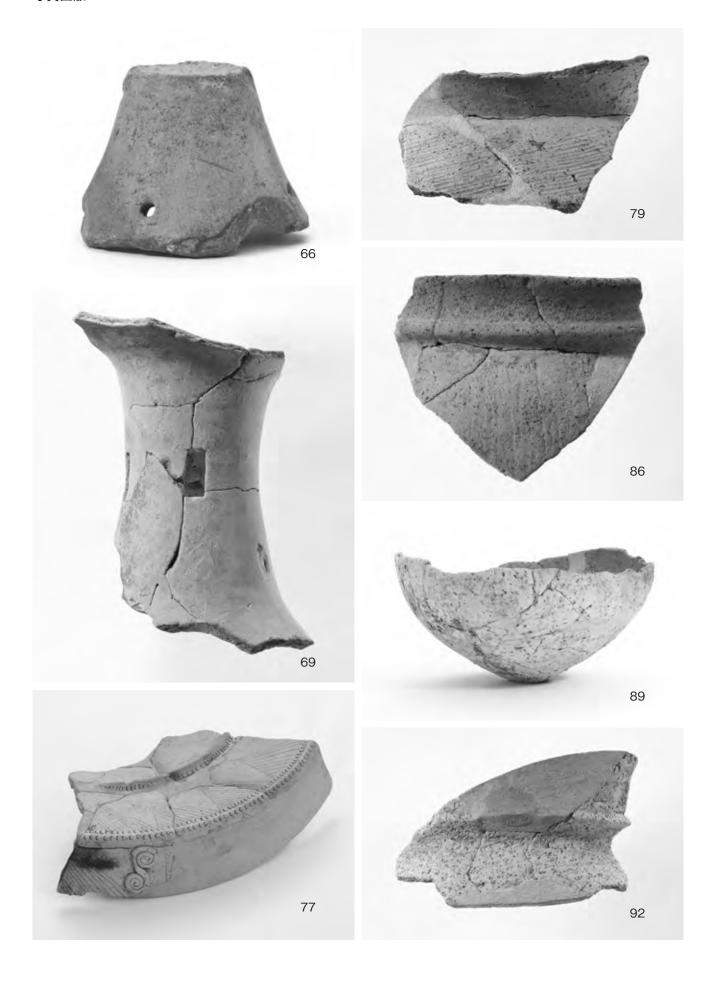














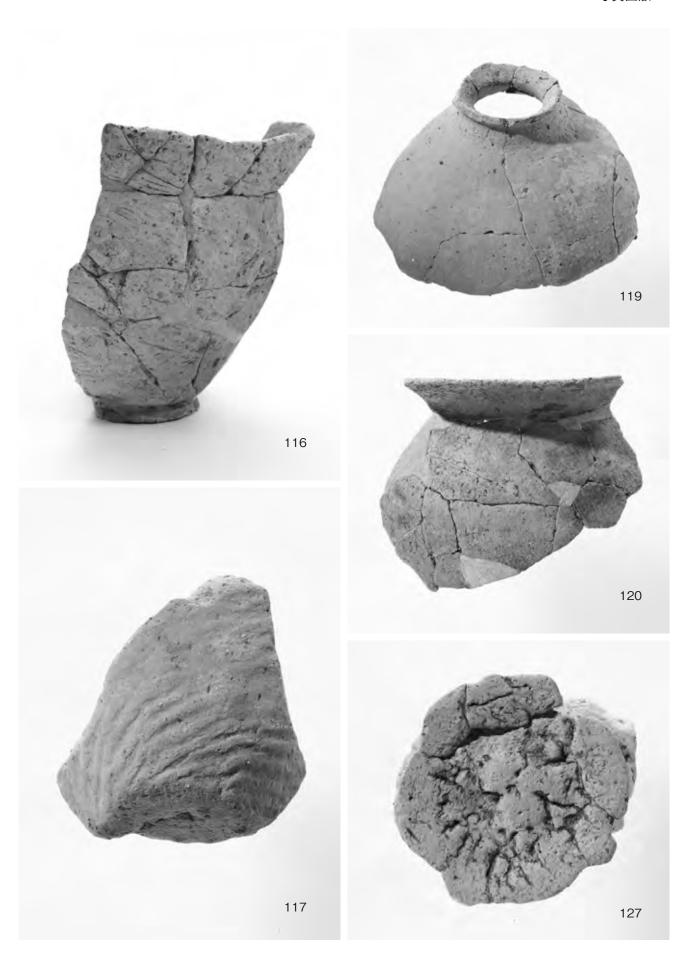


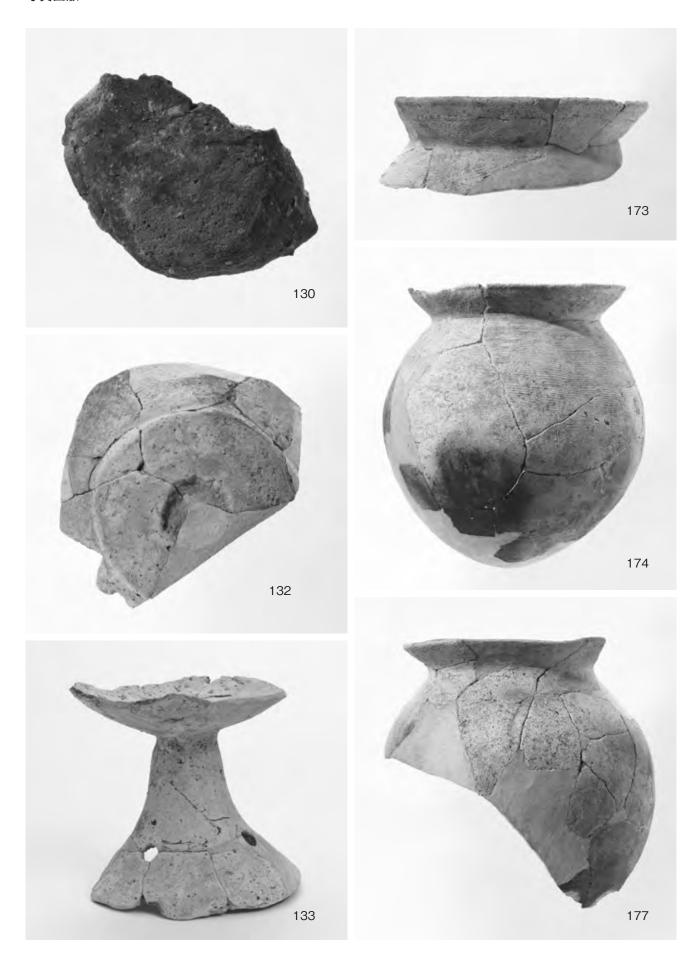
















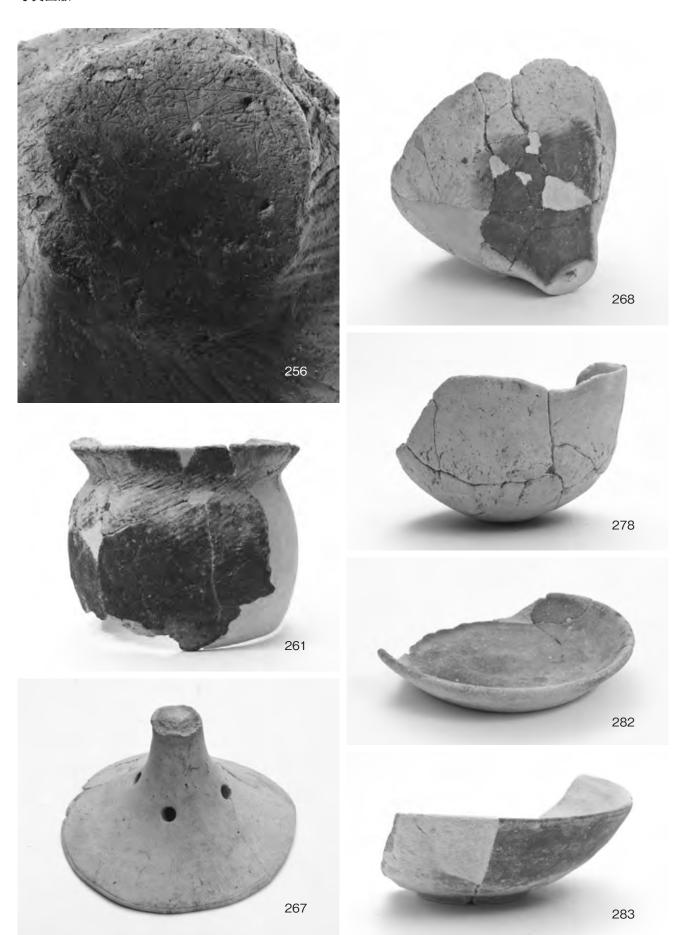








写真図版 48



報告書抄録

ふりが	なわく	わくいせき									
書	名 和ク	和久遺跡									
副書	名 第10	第10次発掘調査報告書									
卷	次										
シリーズ	名 姫路	姫路市埋蔵文化財センター調査報告									
シリーズ番-	号 第9	第91集									
編著者	名 山丁	山下大輝・福井優									
編集機	関 姫路	姫路市埋蔵文化財センター									
所 在:	地 〒6	〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1 TEL (079) 252-3950								0	
発行年月日 令和2年(2020)3月31日											
ェッゕェ 所収遺跡名		ふりがな 所在地		コード 市町村 遺		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
ゎくぃせき 和久遺跡	兵庫県姫	ラごけんひめ じし 庫県姫路市 ぁぽしくゎく 網干区和久		201	202338	34° 50′ 53″	134° 40′ 16″	2017. 9 .20 ~ 2018. 4 .27	1,270 m²	病院新棟建設	
所収遺跡名	種別	主な問	寺代		主な遺構		主な遺物		遺跡調査番号		
和久遺跡	集落跡	' '	生時代 竪穴建物器 墳時代 溝・土坑・6			弥 生 土 器 古式土師器		20170250			
要約	調査・第5 する微高地た。 今回検出	弥生時代中期後半から古墳時代初頭までの竪穴建物跡を18棟検出し、これまでの第1次周査・第9次調査の成果を追認した。また調査区西側で確認した溝は、竪穴建物跡が展開する微高地と遺構が検出されなかった低地とを区画する性格を有することが明らかになった。 今回検出した溝により、和久遺跡における集落域西限を確認した可能性もあり、今後の周査成果が期待される。									

姫路市埋蔵文化センター調査報告第91集

和久遺跡

- 第10次発掘調査報告書 -

令和 2 年(2020年) 3 月31日発行

編 集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1

TEL (079) 252-3950

発 行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷·製本 小野高速印刷株式会社

〒670-0933 兵庫県姫路市平野町62番地